
バカとテストと召喚獣は新時代

神滅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣は新時代

【Nコード】

N5059K

【作者名】

神滅

【あらすじ】

明久や雄二の伝説の2-Fの時代が卒業した。愁たちは明久たちが卒業した次の年に入学した。この愁たちが2年になると新時代が始まる。

新時代の始まり（前書き）

キャラクター設定が細かくは決まっていなかったけど始まってしまった。駄作ですがよろしく願います。

新時代の始まり

俺は今日から文月学園の2年生になる。

だから、通いなれた通学路を俺と黎と美羽が走っている……。

俺「遅刻する！」

先頭を走っているのは俺。天城 愁 は通学路を全力ダッシュしていた。

美「愁！、あんただけ間に合おうなんてずるいよ！」

後ろから声をかけてくるのは、小島 美羽。幼馴染の1人。ぱつと見はきれいな女性。

黎「お前を起しに行ってやったのに見捨てる気か!？」

美羽の隣を走るのは小坂 黎。こいつも幼馴染で親友だ。顔立ちが良く何度かラブレターなどをもらっては断ってる。はっきりいってうらやましい奴……。

俺「早い者勝ちっていうんだツイテ……」

少し、後ろを向いていると何かに当たった。

俺「こんなところに壁が……?」

西「ほう、俺が壁だというのか天城！」

そこにいたのは、強敵、西村先生―（通称：鉄人）だった。

俺「そ、そんなことないですよ鉄じ……。西川先生」

危なかった。鉄人と本人の前で言ってしまいそうだった……。

西「今となつてはお前くらいだぞ……。俺の前で鉄人と言いつうになつたり俺の名前を間違えたりするのは……」

しまった……。西川先生じゃない！。西村先生だ……。

俺「そんなことをする生徒がいたんですか？西村先生！」（最後だけ強調）

西「お前が入学する一つ前の卒業生たちだ。お前らの代は知らないだろうがな」

会話をしていると後ろから二人がやってきた。

「西村先生。おはようございます」

西「おはよう。小坂に小島。そういえばお前たちのクラス分けだが」

俺「もちろんAクラスに入れてますよね」

西「小坂。お前には期待していたが風で振り分け試験を受けれないなんてな。受けていたらAクラスは確実だったのに。小島は問題の書く欄さえ間違えていなければCクラスだったぞ」

黎「すみません。病気には勝てないんで」

美「え、そうなんですか？」

二人は封筒を渡され自分のクラスを確認しながら鉄人の話を聞いていた。

西「そして、天城。お前にはあきれたぞ」

俺「え？」

封筒が渡され中を見ると……。

『Fクラス』

そう、その4文字だけが書かれていた……。

俺「うそだー！」

Fクラス（バカの溜まり場）

以下の問いに答えなさい

『調理の為に火をかける鍋を制作する際、マグネシウムを選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この問題点と代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

上田 黎

『問題点・・・マグネシウムは炎にかける酸素と反応する為危険だ。合金例・・・ジュラルミン』

先生

正解です。鉄という引っかけ問題ですが引っかけありませんでしたね。

天城 愁

『問題点・・・調理をする材料がない。合金例・・・まず、食料を確保しろ！』

先生

食料まで書かないと問題にならないんですか？

俺「3人そろってFクラスかよ・・・」

俺たちは鉄人からクラスを聞いてしびしび、Fクラスに向かった。

黎「いや、4人目も確実にいると思うぞ」

俺「え？4人目？」

美「あ、Aクラスの教室だ・・・」

廊下を歩いているとAクラスの教室の前を通った。

ノートパソコンに個人エアコン、冷蔵庫、個人の机はリクライニングシート。

俺「黎・・・」

黎「愁、言っな・・・。すごく危険な感じがする」

俺「あれ（教室）、壊そうぜ・・・」

黎「停学になつてろ」

あゝ、壊したい・・・。

美「二人とも、さっさと行くよ」

Fクラスについたが・・・

ガラ　俺が教室を空ける

教室を空けた俺はどこかわからなくなった。

床は畳できのこが一部生えてる。

机の代わりがぼろぼろのちゃぶ台で椅子の代わりに座布団。
窓が割れている箇所が多数。

壁はひび割れと落書きがあっぴどいことに・・・。

教室の隅はクモの巣って……。

俺「ここはどこ？」

後ろの二人に聞いてみた。

「「Fクラス」」

正直な回答をありがとう。

真「ウエルカム」

教壇に立って俺を歓迎したのは高校で知り合った上田 真。

俺「……」

いつもの4人がそろってしまった。

俺「何をたくらんでるんだ？」

まず、真や黎や美羽がFクラスにいるはずがない……。

真と黎はAクラスの成績だ。美羽に関してはAクラスは無理でもCクラスは確実なはず……。

真「心外だな、何も考えてないぞ」

黎「喧嘩も一緒にした仲の友達を疑うのか？」

俺「お前らだから疑うんだよ」

美「あれ、いつもの4人でFクラスから這い上がるって話だったんじゃない？」

俺「え？」

そんな話、聞いた覚えないぞ・・・

黎「忘れてたんじゃないぞ」

真「言わなくてもFクラスってわかってただけだぞ」

俺「さて、どっちから先にやる？」

真「まあ、事実だ。あきらめろ。後、席はどこでもいいらしいから座ろうぜ」

俺たちは適当に空いてる席が多い場所に座る。

俺は美羽の前に美羽の隣の席を争う真と黎。

「「譲れ」」

一歩も引かない二人。

美「じゃ、私が後ろの席に行くね」

譲ったのは美羽だった・・・。

俺「真、黎。2人とも殺意を抑えろ・・・」

俺の後ろから微かにだが声が・・・。

黎「お前が譲ればこんなことに・・・」

真「お前こそ譲ればよかっただろ」

美羽には聞こえない音量で言い争ってる・・・。

そんなことをしていると先生が入ってきた。

福「席についてもらえますか？HRを始めます、おはようございます2年F組担任の・・・」

先生は黒板にチョークで名前を書こうしたがすぐあきらめた。

福「福原慎です、よろしくお願いします」

良く見たらチョークがないのかよ。

福「まずは設備の確認をします」

生徒全員が周りをみる。

福「卓袱台、座布団、えー・・・不備があれば申し出てください、必要なものがあれば極力自

分で調達するようにしてください」

ちよつとまで、いいのかこれで!?

福「それでは、窓側の人から自己紹介をお願いします」

自己紹介か……。

苑「中井 苑だ。俺はFFF団の会長だ」

ちよつと待て、FFF団ってなんだ!?

F1「俺の名前は……」

他メンバー面倒なのでF とかD でメインキャラクター以外は表
します。

そして、俺の番。

俺「天城 愁だ。とりあえず、仲間を見捨てる奴は最低だと思つて
る」

俺の自己紹介をすると後ろの真の番だ……。

真「上田 真だ。このクラスの代表だ。代表とでも真とでも呼んで
くれ」

F1「上田つて、あの上田か?」

F2「まさか、あいつは学年でも上位クラスだぞ」

いや、そのまさかなんだがな……。

美「小島 美羽です。これからよろしくね」

F2「今度はかわいい子だな」

F3「そうだな」

ドッド F2とF3の机にカッターが刺さる音

「「・・・」

「「コミが」

後ろから聞こえたけどまさかね・・・。

そして、少ししたら

黎「小坂 黎だ。熱でFクラスになった」

自分で言ってるよ。

F1「うそだろ・・・。Aクラス並が2人いるのか」

F2「でも、男ばかりだからな・・・」

そして、一通りの自己紹介が終わった。そういえば俺の隣の席が空いたままなんだが・・・。

福「それじゃ、皆さん。これから「すいません。遅れました」

先生の挨拶をさいぎったのはきれいな女の子だった・・・。

福「七瀬さんですか、連絡は受けてます。自己紹介とあいてるあの席にどうぞ」

希「七瀬 希乃です。・・・あまり話すことは好きじゃないです」

ちょっと待て、俺の隣ってあの子かよ……。

ザワ……

俺のところに視線（殺気）が……。

俺の隣は窓側なので隣の席は1つしかない。しかも、その席は俺が座ってる。

変なこと考えてる奴がいないだろな……。

福「それでは、HRを終わります」

V S F F F 団！ 勝利の導き

問題

以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい

『光は波であって、（ ）である』

上田 真

『粒子』

教師

『簡単ですか』

中井 苑

『違反者』

教師

『なぜ光が者扱いなんでしょう？』

天城 愁

『早い』

教師

『いろいろな文章が変だと思わないのですか？』

小島 美羽

『小さな世界』

教師

『その考えはいいですが答えを覚えましょう』

俺「ところで、FFF団ってなんなんだ？」

とりあえず自己紹介から疑問になってたから聞いてみた。

黎「知らないのか？あの、伝説のFクラスから始まった集団だ。彼女もちとか、そういう奴を怨んで裁くらしい」

俺「そうなのか、じゃ黎は気をつけるよ。ラブレターとかもらって断つてるとやばいことになるんじゃないのか？」

2人でしか聞こえないくらいの音量で話してたはずなのに・・・

FFF団「「「なんだと！」「」」

こういう関係の話には地獄耳らしい・・・。
なにか知らないけどいつの間にか回りの奴らが覆面と黒マントの格好になってる。

黎「愁、俺に怨みでもあるのか？」

すでに『俺たち』（ここ重要）は囲まれていた・・・。

俺「待った！何で俺まで囲まれてるんだ！？」

FFF団1「七瀬さんの隣とか羨ましいからだ！」

FFF団2「死の裁きを！」

黎「さすが親友。こんなときも一緒とは」

俺「理不尽だろこれ！」

FFF団3「罪人を捕らえよ！」

FFF団「「「おおお！」」」

クラスのほぼ、全員が掛け声を出した気がする。

真「愁に黎！無様だな！」

困んでる輪の外の声がいやに腹が立った。

黎「そういえば真。今日、下駄箱から手紙を取り出してたよな」

あれ、今日は遅刻ぎりぎりまで下駄箱では会ってないはず……。

真「何をいつてるんだ？俺にそんなことは……。ちょっと待て、何で俺を困んでるんだ？おい、話を聞け、話せばわかるはずだ！」

被害者が1名増えたようです。

黎「真、おめでとう。今日から君も仲間だ」

笑顔で地獄の道連れを作ってるこいつが恐ろしい……。

真「黎、貴様！」

黎「ここは協力するべきじゃないかな？」

俺「黎、お前と一緒にの喧嘩は久々だな」

真「それしかないな……」

中学以来だな……。

黎「中学のころのケルベロスの復活かな？」

FFF団4「ケルベロス？聞いたことあるぞ、喧嘩しまくりの2人がこの学園に入ってきたって、

嘘だともつてたがこいつらだったのか！？」

FFF団5「かまうことはない！やっちなまえ、向こうは三人だ！」

襲い掛かるFFF団。そして、喧嘩が始まり……。5分程度で終わった。

生存者は2人だった……。そう……。美羽と七瀬さんだった……。
。（喧嘩してたやつは最後に相打ちで終了）

そして、授業をあまり聞かずに1日が終わった。

真「さて、みんな！」

真が教壇に立って何か言ってる。

真「喧嘩をして仲を深めたが」

殺したいくらいにくだいです。

真「俺たちは最低クラスだ！だが、みんながみんな個性を持つてる。それに、ここには最強のメンバーがいる！」

真はみんなの方を見る。

真「だから、試験召喚戦争をしようと思う!」

F5「いやだ!負けるだけだ!」

F1「俺たちはもう美羽さんがいればそれだけでいい!」

F2「そうだ!美羽さんと七瀬さんがいればいい!」

ドツドツ F1とF2に……(以下略)

「気軽に名前で呼ぶな」

聞こえないよ。親友たちの声なんて聞こえてないよ……。

真「俺たちには勝利するための人材はある!まずは、ク……小坂
黎こいつは知ってるな」

黎「ちょっと待て、クから始まる言葉で何を言おうとした!」

クズだうな……。

真「小島 美羽はAクラスは無理でもBクラス並だ」

F3「綺麗で勉強もできるなんて!」

美「いや、黎と真に比べたらまだまだだよ……」

真「さらに俺、上田 真も全力で戦う」

F4「Aクラスが2人にBクラス並1人かこれなら少しはいいとこ

いけるんじゃないか？」

真「知らない奴が多いだろうが、七瀬 希乃は去年の終わりに転向してきた。学力はAクラス並

だ！」

F6「あんなに綺麗で勉強ができる完璧だ！」

希「……………」

ほめられてるけどうれしくないのか？

真「そして！天城 愁がいる！」

シーン……………」

俺「おい、コラ。何で静まるんだ！」

F7「誰だ？」

F8「知らない」

あー殴りて……………」

真「総合学力はバカだ！」

俺「うるせえ！」

真「だがな！数学だけに関してはこのっは学年トップだ！」

そう、俺は総合的にはFクラスだが数学だけなら真だろうがAクラス代表にも勝つ自信がある。

F「」「へー、そうなんだ」「」

俺「今、言った奴出て来い殺してやる！」

真「とりあえずEクラスから順番につぶして行きたいとおもっ！」

F「」「おおお！」「」

真「全員テストを受ける！」

F「」「おおお！」「」

こうして次の時代が始まった・・・

Eクラスと喧嘩と中井会長!?

問題

『PKF』とは何か答えなさい

七瀬 希乃

『Peace Keeping Force(平和維持軍)』

先生

正解です。

上田 真

『プレイヤーキラーファン』

先生

なぜ人を殺すファンがあるのでしょうか？

天城 愁

『プレイヤーキラーフラグ』

先生

人を殺すフラグなんていりません。

小坂 黎

『P(P)ッカ(K)ふお(F)しい』

先生

プッカがほしいなら買ってください。なお、プッカはPUKKKAじやなくPUCCAです。

真「つてことで、宣戦布告しに行くか……」

これからEクラスに向けて試験召喚戦争をするために、宣戦布告に
し行かないと行けない。

黎「ランクしたのクラスが宣戦布告しにいったらひどい目にあつら
しいな」

そつといえば、俺も聞いたことある。宣戦布告しにいったらポロポロ
に帰って来たとか……。

俺「誰が行くんだ？」

まず、俺は行きたくない。

真「代表である俺と愁と中井だ」

あ……。俺の名前があつた……。

俺「いやだ！」

苑「俺もだ！」

ポロポロになりいきたくないぞ俺は！

真「何いってんだ？ポロポロになるのは、こつちだけじゃないって

ことだよ」

確かに、向こうが暴力をしてきたんだったらこっちもやってもいいよね？

答えはYes！

俺「よし、殺し……。俺も行く」

真「今、絶対に危ないこと言おうとしただろ……」

さすが付き合いが長い奴だ。

苑「じゃ、俺はいいだろ……」

真「別にいいけど、Eクラスって女子が多いらしいぞ」

苑「宣戦布告しにいくぞ！」

扱「やすいな、やっぱ、バカは面白い。」

黎「じゃ、俺も行くべきじゃ？」

確かに、黎も喧嘩をすれば強い。それを知ってるはずなのに真はなぜ連れて行かない？

真「黎と美羽と七瀬はこのクラスにいないと思ってるだろ。だから、お前たちは今回の戦いには出さない」

美「そうなの？つまらないな……」

黎「なるほど、Eならお前だけで勝てるってことか、それで俺たち

は次からの戦いのための秘密兵器か」
希「・・・」

そして、三人は隣のEクラスに入ってしまった。

真「コンチャース！。Fクラスが宣戦布告してきたZ E」

いつもと全然違うこいつに一瞬、言葉を失った・・・。

古「へー、僕がこのクラスの代表の古河 修二だよろしく（モグモグ）」

そして、Eクラスの代表は彼女と弁当を食べていた・・・。

苑「異端者を発見。抹消する！」

真「愁、こいつを何もしないようにしとけ」

俺「ん？わかった」

思いつきり中井の腹を蹴った。

苑「グハ」

苑は気絶した。

古「君がFクラスとは思わなかったよ上田。まあ、面白そうだね」

真「じゃ、承認してくれたって思っていていいんだな？」

古「ああ、明日の9時ごろでいいか？」

真「わかった。それじゃお邪魔したな」

こうして、俺たちは教室を出ようとしたら……。

俺「うわ！」

後ろから背中を殴られた……。
驚いて倒れてしまった。

E1「バカが宣戦布告だと!？」

殴った奴が叫ぶ。

古「みんなヤレ」

笑顔で何もなく出そうとした古河も血が見たいようだ。

真「それをFクラスに掘り込んで来い。俺たちに喧嘩を売ったことを後悔させる」

俺「了解」

俺はすぐ隣の自分のクラスの教室を空けて持ってた物（中井）をクラスの中に入れて、戦場に戻った。

F1「中井会長がやられてる!？」

F2「Eクラスの奴ら!」

F3「くそ！仇は絶対とるぞ！」

Fクラスでいつの間にか、士気は上がっていた。

10分後

E1「ば、化け物だ・・・」

E2「くそ・・・試験召喚戦争でボコボコにしてやる・・・」

廊下でEクラスの人が倒れていた。

黎「結構ボロボロだな」

美「大丈夫？」

俺「ああ、数人ヤツテ来た」

真「ちよつと、向こうの人数を考えてなかったな」

Eクラスは部活で人が少なかったが少し人数が多かった。

真「つてことでだ！明日の9時から試験召喚戦争を開始する！相手は隣だから、すぐに攻めてくるぞ。集合は8時半だ。遅れるな！中井の仇を取るぞ！」

F「「「おおお！」」」

真「まあ、黎と美羽と七瀬はFクラスで待機するか適当にぶらぶらしててくれ」

「解ったよ」「はい」
「・・・」

七瀬はホントじゃべらないな。

試験召喚戦争とEクラスと試獣召喚！（前書き）

この新世代の試験召喚戦争はいろんな教科の召喚フィールドが重なっていても、

で勝負します。っと言ったら　の教科で戦います。（フィールドが展開されていたらですが）

そして、誰かと誰かが戦っていても自ら参戦することはできません。（相手を引き込む場合は宣言しないとイケない）

試験召喚戦争とEクラスと試験召喚！

問題

『人が生きていく上で必要となる5大栄養素をすべて書きなさい』

美羽

『脂質、炭水化物、たんぱく質、ビタミン、ミネラル』

先生

『正解です』

上田

『食べ物、水、食料、火、心』

先生

『回復試験じゃないからってふざけてませんか？』

天城

『心、親友、食料、水、火』

先生

『生きていくために必要な物だったらいい答えです』

翌日

真「さあ！行くぞ！」

F「「「おおおお！」」」

Eクラス戦を前に、Fクラスの士気はMAXに到達していた。

真「作戦は簡単だ！、敵本陣までの道を作る！そうしたら、数学の木内先生と愁が突撃する。それで終わりだ」

なるほど、だから教室に来る前に木内先生とはなしてたのか。

真「俺たちは最低クラスだ！だがな、下は上に勝てないことはないんだ！俺たちは勝者だ！」

F「「「うおおお！」」」

美「がんばってね」

黎「負けかけたら、参入してやるから安心しろ」
希「・・・」

そして、FクラスVSEクラス 開戦！

開戦と同時にFクラスのメンバーが突撃する。

教室に残ったのは、俺、黎、真、美羽、七瀬の5名だ。

真「さて、4人とも移動するぞ」

いきなり指揮官が作戦にないことを言い出した。

俺「おい、そんな話、聞いてないぞ！」

真「ああ、言っていないからな」

黎「どういうことだ？」

いきなり言い出したとしても、真のことだ。何か考えがあるに違いない……。

真「まず、Fクラスメンバーで道はできない」

俺「どういうことだ？」

真「向こうの作戦は全員で俺以外を倒す。そして1対複数で俺を静める。こんなところだろう」

確かに、Eクラスじゃ真の苦手教科でも1対1で勝つのは不可能だ。

真「だから、教室にいるはずの俺たちを移動させることで敵の作戦を崩す。まあ、下の階に逃げればいいだろ。そして、俺と愁は新校舎の階段から上がってEクラスの教室に行く」

なるほど、俺たちの戦場はEクラスとFクラスの間廊下だけだが、そうすることで挟み撃ちにもできる。

俺「うまくいくのか？」

真「当然だ」

美「じゃ、早速行こうよ」

黎「俺たちは下の階でのんびりしますか」

希「……(スク)」

全員移動する準備はできてる。

真「じゃ、いくか！」

こうして俺たちはこっそり廊下に出て旧校舎の階段まで行く。

ばれないように階段につくと、

真「みんな、知ってるか！相手クラスの代表の古河は彼女がいるんだぞ！」

真が火（Fクラスメイト）に油を投下した……。

FFF団1「なんだと！」

FFF団2「異端者に罰を」

FFF団「」「罰を！！」「」

いつの間にか戦ってたメンバーが覆面と黒マントに……。

E1「なんだこいつら!？」

E2「補習に行きたいのか!？」

Fクラスは突撃してるようだ

真「これでよし……」

俺「お前、時々怖いな……」

こいつを敵に回したら結構危ないかもしれない。

そして、美羽、黎、七瀬は下の階でのんびりしてもらって俺と真はEクラスの後ろにつながる階段を上る。

西「戦死者は補習！」

上つてるときに鉄人が5人くらい抱えていた……。

「……」

「行くか……」

俺たちは何も見てない……。

階段を上るとEクラスの方は俺たちに背中を向けていた。

真「行け、数学以外で挑まれたら俺がやる」

Fクラスの前に木内先生がいる。

俺「天城がその辺のEクラスメンバーに数学勝負を挑みます！」

E「……何!?!」

後ろに俺たちがいて驚くEクラスメンバー

俺「サモン試獣召喚」

そう唱えると、俺の召喚獣が現れる。

武器は双剣を持って、鎧は黒い袴

『数学 Fクラス 天城 712 VS Eクラス E1〕5 計
617』

点数が表記される。

E「「「え!?!」」」

点数を驚くEクラス。

二つの剣が敵を切り裂いていく。

『0
『数学 Fクラス 天城 659 VS Eクラス E1〕5 計

少しダメージがあるが5人を一瞬で消す。

西「戦死者は補習!」

そして、死体を運ぶ……。

真「このまま行くぞ!」

Fクラスメンバーの生き残り俺と真がEクラスに攻め込む。

Eクラスは貧しい学校の教室、見たいな感じだが机も椅子もあり壁は少しボロボロだが気にならない程度だった。

E6「Fクラスが攻めて来た!」

古「数学がすごい奴は英語で挑め！多分奴は数学だけだ！」

やばい、俺が数学だけつとばれてる。

E7「俺が天城に英語勝負を挑みます！」

やばい、Eクラスの前に英語担当の先生がいた。

真「俺も参戦する！」

『英語 Fクラス 上田 & 天城 350 & 5 V S E
クラス E7 85』

F「「天城弱い！」」

俺「黙れ！」

真「目の前の敵に集中しろ！」

真の出した召喚獣は大きな剣に重鎧だった。

真は俺を守りながらE7を倒した。

『英語 Fクラス 上田 & 天城 300 & 5』

真「さて、これでほとんどのEクラスは終わったな」

他のEクラスの方はFクラスが団体でつぶした。

古「な、たかが一人すごい奴がいるだけで俺たちが！？」

俺「チエツクメイトだ。天城が古河に数学勝負する！」

『数学 Fクラス 天城 659 VS Eクラス 古河 150』

双剣が古河を切り裂いた。

古「くそ!!！」

西「勝者！Fクラス」

俺「よっしゃー!!！」

真「勝者は俺たちだ！」

F「やったー!!」「これで、少しはまともになる!!」「ヒヤッホー!!！」

古「負けたよ……」

テンション上がりまくりの俺たちとすごい残念そうなEクラス

真「それじゃ、また後日にクラス変えの話はしよう」

古「こんなことになるなんて……」

真「みんな！良くやった！今日はこれで終わりだ！解散!!！」

こうしてEクラスとの戦いは終わった。

『休日』本屋と不良と拷問部屋！

問題

『大化の改新があつたのは何年？』

七瀬

『645年』

先生

正解です

上田

『六百四十五年』

先生

正解ですが、なぜ漢数字なんでしょう？

天城

『無事故年』

先生

漢数字ですらない君は間違いです。

今日から2日は休日だ。

昨日はEクラス戦で疲れたからのんびりしようと思っていたが・・・。

真「さて、どこで遊ぼうかな」

美「どこ行くの？」

黎「まあまあ、みんなどこに行くかを話合おうじゃないか」

俺「なんで、お前らがここにいるんだ？」

いつもの4人が俺の家に行った。

「「「暇だから」」」

いつから俺の家は集合場所になったのだろうか？

黎「お前も暇だろ？」

まるで当たり前のように黎が言った。

俺「一昨日は 文庫（以下：文庫）の発売日でいろいろ忙しかつたから俺は今日行くんだ！」

そう、俺は文庫を読むのが好きなのだ。一時期、部屋の半分が本で埋め尽くされた。（そのときは読まないものを買った）

真「そうか、じゃ、俺たちもついていくか」

「「「おおお」」」

なぜか、俺の本を買うのについてくることになったのだった……。

俺「さて、行くか」

家を出て、鍵が閉まっているかをチェックする。

言い忘れてるが俺の家族は海外出張で帰ってこないのだ。俺が着いていっても良かったのだが。「お前じゃ、英語で話せないだろ」ということで日本に残っている。

このときまでは平和な休日だった……。

そう、美羽が不良にぶつかなければ……。

不1「いてえ、じゃねえか！」

美「あ、ごめんなさい」

少し、ぶつかったただけなのに怒ってる不良。カルシウム取れよ……。

不1「ごめんですむかよ」

不2「そうだ、体でお詫びをしてもらおう」

近くの本屋行く道にはこういう奴が多いのが困る……。この道を通らなければ10分でいけるとを25分かかるからいやなんだ……。

真「女の子が怖がってるじゃないですか」

対応が素早い真は、美羽を女の子って自分とかかわりのないようにする。

黎「可愛そうだろ。こんな子に2人でいじめて」

この二人の不良はごめんて終わらせればどんなに良かったかを後々知るだろう……。

不1「やるのかあ!？」

不2「やっちまおうぜ!」

今日は本屋じゃなく補習部屋に行くことになりそうだ……。

ここからはいつものペースだ……。

向こうが殴りかかってきて、それを真がつかみ。片手が使えない相手を黎がぶん殴る……。

不1「ガハ……」

鳩尾にあたったのか痛そうにしてる。

不2「う、うわああ!」

恐怖に駆られた不2が俺に襲い掛かってきた。俺は部外者ですよ……。

俺は拳を避けて、片手が相手の顔をつかみ、引き寄せる。

その引き寄せた顔を俺の右ひざが相手の顔に当たる直前で止めた。

俺「はあ。これで補習室行き決定か・・・」

顔をつかんでた手を離す。

不2「うわあああ！」

不2は恐れて逃げていた。

真「逃げよう！」

黎「警察が来る前にな！」

ついでに言う知らない女の子と言う設定の美羽はすでにいない。

俺「覚悟決めろ。手を出してしまったからな・・・」

そして、30秒くらいで警察が来て。鉄人が俺たちを迎えに来た・・・。

西「休日でもお前たちは問題をおこすのか!？」

鉄人に連れられて文月学園に行く・・・。

西「さあ！補習だ！」

黎「俺たちは女の子を助けようとしたのに・・・」

西「うるさいぞ、そこ！言い訳は聞きたくない！」

俺「本当ですよ。たまには信じてくださいな。」

西「さっさと反省文を書け！」

こうして休日の1日を補習室で鉄人と過ごした。

2日目……。

昨日は鉄人と死と名の補習を受けていた……。はつきり言ってもうだめだ……。

俺「しかし、文庫を買った……！」

準備をして今度は1人で本屋に向かう。

今日は何もなく本屋に到着する。

俺「やっと……。文庫を！」

今、俺はすごくご機嫌だった。

次回作が気になってた本が3冊も手に入ったからだ。

ご機嫌な俺は来た道で帰る。

帰り道に意外な人を見つけた。

七瀬だった。七瀬が人に囲まれてる。

へー、あいつも結構友達いるんだ。

そう、思っていた。

いやな顔もせず人に囲まれていたから他の人もそう思うだろう。。。

少し見ていると、一人が七瀬の手を引っ張って人気のない所に連れて行こうとしている。

友達が連れて行くというのなら近道か何かだと思いが。。。
俺には聞こえた。

「いや！。。。」

空耳にも思えるくらい、微かな声だが自己紹介で聞いた七瀬の音が聞こえた。

そして、見てみると連れて行こうとしてる奴に抵抗してる。

俺は迷った。昨日、鉄人にこれ以上何かおこすなら停学にするって言われていたからだ。

俺は、自分が情けなかった。

自己紹介で『仲間を見捨てる奴は最低』とか言っていてこんなことがあっても何もしないでいようっと思っただ俺が情けない！

俺はメモ用紙とペンを取り出して本を買ったレジ袋に文字を書いたメモ用紙を入れた。

そして、買った本の1冊を取り出して読んでるふりをしながら七瀬を囲んでる奴らの中に入る。

不3「なんだお前？」

誰かが話しかけてきたが気にしない。

そして、わざと七瀬を連れて行くこうとする奴にぶつかると。．．．。

不4「わあ！」

希「え．．．？」

驚いてそいつは手を放して倒れた。

不3「お前、なんてことを！」

不1「お前は昨日の！」

不2「くそ、やっちなまえ」

俺「あー、ごめんなさいね。本を読んでたらぶつかってしまった」

不良の何人かが俺に殴りかかる。俺はそれを避けながら本を閉じ、メモ用紙を一番閉じた本の上において、レジ袋に入れた。

俺「ちょっと、ごめん。これ預かってくれない？」

俺はさりげなく名前を出さずにレジ袋を驚いてる七瀬に渡す。

希「え．．．はい．．．」

七瀬はレジ袋を受け取って見えやすいところにおいてあったメモ用紙に気づく。

その間に俺は不良の1人を鳩尾を蹴って倒す。

七瀬は少し迷いながら走って逃げた。

不1「女が逃・・・」

最後まで言う前に黙らせた。

一対四、状況が悪いが負ける事はない・・・。

そして、人気のない路地裏から4人が出てきた・・・。

不5「おい、どうした？」

不6「やられてるのか!？」

殴られてる仲間に気づき驚くそして、状況は悪化した・・・。
1対8だ。

はあー、ボロボロになって補習室で停学になるのか・・・。

10分後、一方的に殴られていた俺は警官が来たことで不良たちは逃げていった。

そして、もちろん。親がいないので学校側に引き取ってもらった・・・。

西「何か言いたいことはあるか？」

鉄人の拷問部屋（補習室）で聞かれた。

俺「本当にすいませんでした！」

西「!？」

俺「本屋で買いたいものがなくてイライラしてやってしまいました」

西「バカかお前は」

俺「バカだからFクラスなんですよ先生」

西「開き直るな！」

俺「・・・」

西「勉強ではバカでも、お前はそんなことで喧嘩をする奴じゃなくなっただろ！」

そう、俺は高校1年の1学期は黎と友に暴れまくった。だが2学期に入ってからいや、真に出会ってから変わったのだ。くだらないことでは喧嘩をしないようになった。

俺「いえ！そんな理由でやりました」

西「はあ、それじゃ覚悟しろよ！」

俺「はい！」

そして、19時まで補習室で過ごした（！）飯は出ないー！。ちんぽ
一週間の停学になって幕を下ろした。

停学とブラックジャックと私のクラス

問

『1得意なことでも失敗してしまうこと』

『2悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喻え』

七瀬

『1サルも木から落ちる』

『2踏んだり蹴ったり』

先生

正解です。他にも同じ意味があるので、調べてみるのもいいかもしれません

上田、天城、小坂

『1美羽の手料理』

『2手料理後のデザート』

先生

君たちは仲が良いのは知っていますが、この回答はなんなんでしょう？

俺「はぁ・・・」

俺は停学になり平日を暇に家ですごしている。

七瀬は普通に学校に行けてるのかな？

一週間後、黎にあつたら絶対笑うな……。

真の奴、鉄人から話聞いてたら怒るだろうな……。

美羽は……。心配してるのかな？

あゝ、学校行きたい……。

そんなことを考えながら、一日中部屋ですごす愁だった。

真 side

いつものように、いつもの4人のうち俺しかいない教室（他のFクラスメイトはいる）。

暇すぎる……。考えていると愁の隣の席の七瀬が来た。

真「七瀬、おはよう」

返事はないと思いつながら挨拶をしてみる。

希「……。おはよう」

……。挨拶を返してくれた？

当たり前なことだが、その当たり前がいつもなかったので少し驚い

た。

休日の間何かあったのだろうか？

考え事をしてると、美羽と黎が来た。

真「おはよう、美羽」

美「おはよう」

今日も綺麗だ。

黎「俺に挨拶は？」

真「いたのか？」

ちよつとした冗談なのに。

黎「やってやるうか？」

真「いいぜ、でも喧嘩はやめよう」

黎「ああ、朝から疲れたくないからな」

そして、俺はかばんから、トランプを出す。

真「よし、ブラックジャックでどうだ？」

黎「望むところだ！」

美「面白そうだね〜見学するよ〜」

俺はトランプをシャッフルして俺と黎に2枚ずつ置く。

黎「引くか・・・」

黎の手札は3枚になり

黎「俺はこれで行くぜ」

俺の手札は4と13、14になっている8以上を引いたらアウトだ。

真「じゃ、俺も引くか」

引いたカードは4・・・。これで18だ。

真「これで、いいよ」

そして、お互いのカードを見せ合う。

真：18 黎：18

引き分けだった・・・。

なんとという偶然だ・・・。結構やっているが引き分けになったことはブタ同士でしかない。

そして、ブラックジャックは続いて・・・。

俺は2勝3敗2引で終了した。

真「くそ！」

黎「俺の勝ち」

時計を見るとそろそろHRが始まるころだ。

しかし、七瀬の隣の席に座るはずの愁が来ていない。

真「そういえば、愁はどうした？」

黎と美羽は小学からの知り合いである愁をよく迎えにいつてから学校に来る。

理由は、愁が寝坊で来ない時があるからだ。

美「今日は迎えに行つてないよ」

真「遅刻の可能性大か・・・」

黎「もしかして、鉄人のいいつけを守らずに昨日、喧嘩してないだろうな・・・」

いやいや、あいつ1人なら喧嘩になる前に逃げれるし、昨日は多分本屋に行つてるのだろう。

昨日、昼ごろ行つても誰もいなかったし。

希「あ、あの・・・その話。詳しく教えてください」

七瀬が俺たちを見ながらそんなことを行つた時、あいつは来ないと思つた。

七瀬 side

時は少し戻る。

昨日、私を助けてくれたのは、隣の席の確か天城 愁って人だった。どうして私のために喧嘩までしてくれたのだろう……。

いろんな、文庫を入れたレジ袋に『七瀬、逃げる』と書かれたメモ用紙を渡した彼……。

バカばかりの教室、こんな人たち、と何の係わりも持ちたくないと思った。

でも、昨日のことでのこのクラスとも係わりを持とうと思った。

教室に入って自分の席に向かう。

真「七瀬、おはよう」

天城君と仲のいいクラスの代表が話しかけてくる。

希「……おはよう」

代表は少し驚いてた。

。まあ、仕方ないと思う。いつも、何も言わずにしてたんだから……。

そして、自分の席に座っていると、代表たちが後ろで騒いでる。何でも、挨拶をしなかったからトランプで勝負しているらしい。

それにしても、天城君が来ない……。昨日のお礼と文庫を返したい……。

昨日の彼はすごかった。自分より人数が多いのに友達や良く話す相手でもない私を助けるためにあの中に入っていったのだ。

思うと、天城君のことばかりを考えていた。

真「そういえば、愁はどうした？」

後ろから、そんなことが聞こえてすごく気になった……。

美「今日は迎えに行っていないよ」

真「遅刻の可能性大か……」

黎「もしかして、鉄人のいいつけを守らずに昨日、喧嘩してないだろうな……」

驚いた。昨日、西村先生の言いつけがあったのに、私のために喧嘩をするなんて……。

気になった。いいつけとは何なのか……。

希「あ、あの……その話。詳しく教えてください」

後ろで話していた。3人が全員、驚いた顔をしていた。

真「わかった。何で知りたいのかとか、そういうのは聞かないよ。けど、その前に名前がわからないと話にくいだろ？俺は上田 真。気軽に真とか代表って読んでくれていいよ」

そういえば、天城君は隣の席ってことで知っていたけど。他の人は代表以外はまったく知らない。

美「そうだね。自己紹介の時いなかったもんね。私は小島 美羽。気軽に美羽って読んでね」

黎「俺は小坂 黎。黎でいいよ。ついでに言うと、美羽と俺は愁の幼馴染だ」

真君に美羽ちゃんに黎君……。私も仲良くできるかな？

希「私は七瀬 希乃。希乃って呼んでください」

真「よろしくな、希乃」

黎「これからよろしく希乃」

美「希乃、これから仲良くしようね」

みんなはやさしい……。

希「はい」

真「さて、本題に行きますか」

それから真君に一昨日の出来事（美羽がぶつかったのが原因とかは言っていない）を聞いた。

そんなことがあったんだ……。

真「まあ、あいつが喧嘩するなんて、よくあるし大丈夫だと思うぞ」

真君はすべてを見通してるような風に言った。

真「まあ、あいつのことを思うなら、誰にも何も言わないのがいいよ」

私にしか聞こえないくらいの小声で言った。

美「あ、先生来たよ」

美羽ちゃんの言葉でみんなが席に座る。

天城君は……。停学になってしまったのだろうか？

幽霊と希乃と悪役

問題

『（ ）年 キリスト教伝来』

七瀬

『1549年』

先生

正解です。

上田

『15死苦年』

先生

どうして君はそうなんですか？

天城

『神が私たちにくださった時』

先生

君の回答は良くわかりません。

そして、1週間が過ぎた。

俺「停学が終わった〜！」

俺は朝、目がさめた瞬間からテンションは高かった。

学校の準備をして出かける。

俺「おはよう!」

教室の扉を勢い良く開けて言う。

F「「「死んだんじゃないのか!?!?!」」」

反応がおかしい……。

俺「えーつと……。何から突っ込めばいいんだ?」

F1「死んだって聞いて少し前にここで小さな葬式を……」

F2「確か、代表が言ってたよな……」

犯人はわかった……。

俺「真!!!いるか!!!」

教室の端から端に聞こえるくらいの声で叫ぶ。

真「うるさいな」

俺の席の近くで返事をする奴がいた。

俺「「どういことだ!?!?!」」

俺の席に向かいながら言った。

真「いやー、久々に会う親友にちょっとしたドッキリを」

俺は席に座りながら

俺「ドッキリでやることが死亡……」

希「……天城君、おはようございます」

俺の言葉をさいぎられた……。

俺「ああ、おはよう」

はつきり言って驚いた。いつも、挨拶をしなかった七瀬が挨拶をしてきたのだから……。

あの時のことでも気にしてるのだろうか？

真「まあ、久々の登校おめでとう」

俺「ああ」

希「すいません。私のせいで……」

俺「気にするな、俺はやりたいことをやっただけだ」

七瀬にしか聞こえない声で言った。

希「……七瀬 希乃です。希乃って呼んでください。改めて、よ

ろしく願います・・・」

いきなり自己紹介をされた。いつもは自分からは話さない七・・・いや、希乃が自分から話しかけてきた。

真「どうした？愁、自己紹介をされたら自分もやるものだろ。それとも綺麗な希乃に見とれてたか？」

俺「な、何言ってるんだ。えーっと・・・俺は天城 愁。愁って呼んでくれ。これからもよろしく」

希「はい、愁君」

笑顔で名前を呼ばれると胸がドキツとして・・・。

希「それと・・・。これ、お返ししますね」

希乃がそういつて出したのは、あの時の文庫だった。

俺「あー、そういえばそうだったな」

俺は文庫を受け取りかばんに入れる。

黎「愁がもう来てる!？」

そんな時、教室の出入り口付近で驚いてる奴がいた。

美「あ、愁。お久しぶり〜」

俺「ああ、二人とも久しぶりだな」

黎「愁が死んだってドッキリに参加できなかったよチクショー！」

こいつも参加しようとしたのか……。

そんなことをしていると先生が来てHRが始まりそして終わった。

福「あ、天城君、西村先生がお呼びらしいので職員室に来てください」

俺「う……。わかりました……」

「死ぬなよ」「」

この反応するのは親友である2人だ……。無理かもしれない……。

そして、職員室にいった

俺「西村先生、天城がきました」

西「補習室に來い」

いきなり、拷問部屋に呼ばれた……。

拷問部屋で先生と2人……。怖い。

西「お前は停学になったときも聞いたが本当にあんなくだらない理由なんだな？」

俺「ええ、そうですよ。くだらない理由でくだらない奴と喧嘩しました」

これで何回目だろう、しかし、返事をするときは同じことを言う。

西「上田にも聞いたがあいつも知らないって言張る。覚えてるか？お前は『くだらない理由でもう喧嘩はしません』っと、上田と小坂を連れて俺に言いに来た時を」

忘れもしない。確かに俺は真に出会ってからそういうことを言いに鉄人に会いに行ったことがある。

俺「はい、そうでしたね」

西「お前は、約束は守る奴だと思っていたんだがな・・・」

俺「ちよつとした気の迷いですよ」

西「そういえば先週あたりから七瀬のクラスへの態度が変わったつと聞いているが、それとはまったく関係ないんだな？」

驚いた。態度が変わっただけで俺との関係を聞く、この鉄人は本当に人間なんだろうか？

俺「まったく関係ありませんよ」

俺は平然な顔で言った。

西「なら、七瀬に聞いてみてもいいんだな？」何で、態度が変わったのか？』っと」

この先生は生徒の弱みを握って何がしたいのだろう。そんな怒りをもってしまふ。

俺「なぜでしょう？」

西「何も話さなかった七瀬がなぜそうなったか・・・」

俺「いいえ、俺が聞きたいのは真実がわかっているくせにそんな嫌らしい言い方をするんですか？」

鉄人の表情はずっとまじめにこっちを見ていたが、このとき表情が変わった。

西「やっぱり、そうだったのか・・・」

俺「なぜそんな言い方をしてまで俺に聞いたんですか？七瀬に聞きたかったなら、俺の停学中に聞くチャンスはあったと思います。七瀬は正直な奴ですからすべて話すですよ」

西「俺にとっては、お前が何でそこまでするかを聞きたいからだ」

俺「悪いですか？人のためにちょっとした喧嘩をして、何もなかったようにするのは・・・」

西「俺が言いたいののはだな、なぜそこまでしなきゃいけないかった理由を聞いてるんだ」

俺「わかりましたよ。変わりに七瀬に何も言わないって約束してくれませんか？」

西「教師として、ことによっては無理だな」

そして、俺はすべて話した。

俺「つと、言うことですが何も言わないって約束してくれますか？」

西「お前は、自分だけに罪があるままでいいんだな？」

俺「いいんですよ。俺は正義を語るより、悪役の方が似合ってますから」

西「わかった。約束しよう。代わりに……」

話は終わったと思ったらまだあるようだ。

西「天城、貴様に観察処分者の称号を与える！」

俺「え……。えええええ！」

俺の学園生活はのんびり終われないようだ。

俺たちの理想！

先生

今回はちょっと面倒な問題を作ってみました。

問題

コインを20回投げます。出方は何通りあるでしょう？

天城

『2097152通り』

先生

数学だけではできるのが本当に不思議です。

上田

『たくさんだ！』

先生

樹海図を書いてて面倒になって投げ出しましたか……。

七瀬

『わかりません』

先生

すぐに出る方がおかしいんですよ。こんな問題をだしてごめんなさい

鉄人からいきなり観察処分者にされて戻ってきた俺……。

黎「何の話だった？」

親友はお茶を飲みながら聞いた。

俺「鉄人から観察処分者にされた・・・」

ありのままを言う。

「「ぶ！」」

黎と真はお茶を吹いた。

俺「汚いな・・・」

真「マジかよ!？」

黎「問題をあまり起さなきゃつかない称号だぞ！」

いや、一年の時にだいぶ問題を起したのは覚えてないのかこいつ？

俺「まあ、たまに先生たちに呼ばれることが多くなって、召喚獣のダメージが俺に来るだけだ」

真「これからA、B、Cのクラスに試験召喚戦争するのに大丈夫かよ？」

トップ3全部か・・・。攻撃当たったら痛いんだろうな・・・。

希「だ、大丈夫です」

隣で話を聞いてたのか希乃が言った。

俺「いや、なぜに大丈夫なんだ？」

疑問だ。そこまで自信を持っていえるのだ・・・。

希「愁君は強いから・・・」

いや、俺は弱いですよ・・・。

黎「そうだな、愁はある一点（数字）に関しては最強だからな」

美「そうだね。愁ならどれだけボコボコにされても平気だよね」
真「お前の犠牲は無駄にしない」

俺「ごめん。1人じゃ突っ込み切れね・・・」

いまさらだがふと思った。

俺「そういえばDクラスはどうしたんだ？」

A・B・Cとは全部戦うのにDクラスだけ戦わないなんて・・・。

真「ああ、もう戦った」

早！

希「みんなで突撃して私が代表を討ち取りました」

俺「それはすごいな・・・」

希乃と黎そして真はAクラスの力を持っているから3人がいれば苦
手科目で挑まれない限り勝てるのだ。

真「そういえば、EクラスとDクラスの交渉をしないとイケないな」

そして、真は立ち上がって教壇に立っていった。

真「みんな、良く聞け！」

Fクラスの全員が真を見る。

真「俺たちはEクラスとDクラスをつぶした！そこでお前たちに聞
く、俺たちの目的は何だ！！」

F1「設備のいいクラスから設備を奪い取る！」

F2「そうだ！俺たちは設備を変えるんだ！」

俺の周り（希乃、美羽、黎）以外は設備を変えることを言った。

真「お前たちの言いたいことはわかった。でも、それでいいのか！」

いいはずがない。もしAクラスを打ち破って設備をゲットしても、
それはクラスのカリヤない、一部の力に頼ってるだけだ。

真「Aクラスに勝っても、俺たちは所詮Fクラスなんだ。俺や黎、
美羽に希乃。4人に頼って勝ってその後どうする？Bクラスが設備
を狙ってくるだろう。Bに勝っても連戦でCが攻めてくるかもしれ
ない。そして、4人が何かで欠席したらこのクラスは終わりだぞ！」

F1「それもそうだな・・・」

F4「勝てたとしても継続できないなんて」

F5「そんなに不安ですぐすことになるならこのままでいい!」

クラスに不安がよぎった。

真「そこで、俺に提案がある!」

どうせ、ろくでもない提案だろう・・・。

真「俺は、この学校の試験召喚戦争というシステムをなくそうと思っ!」

なくす?どうやって・・・。

F2「無理だ!」

F4「そんなことできるはずがない!」

真「じゃ、お前たちは何で試験召喚戦争をするんだ?」

F「」設備を入れ替えるためだ!」

まあ、そうだろうな・・・。

真「だったら、すべてのクラスが同じ設備ならどうだ?」

同じ設備なら、負けるとランクが落ちる。勝っても得るものはない。それだったら誰もやらない。これが真のシステムをなくす方法か・・・。

F4「やるわけないだろ」

F5「得のしないことはしない！」

F6「！そういうことか……」

真「俺の最終目的はすべてのクラス設備をDクラスにする！」

F1「となると、全クラスと戦うのか！」

F4「でも、俺たちなら……」

真「俺は判断はお前たちに任せる。半数以上が賛成するなら全員ついてきてくれ。半数以上が反対なら俺たちの最終目的はCクラスあたりにする！さあ、選べ！」

俺の意思はもう、決まっている。こんなふざけたシステムを……

真「俺についてくるものは立ち上がれ！」

やめさせる！

みんなが行きよいよ立ち上がった。

黎を除いて……。

美「黎、反対なの！？」

俺「え！？いつもなら無茶でも何でもやるお前が……」

黎「……」

黎は何も答えない……。

希「どうしちゃったんですか・・・？」

希乃も心配そうに見つめる。

黎「ZZZ・・・」

寝てる・・・。

真「・・・」

真も予想外なことに驚いてしまった。

そして、教壇から移動をする。自分のかばんを取りまた教壇に戻る。

真「あ、もう座っていいぞ」

そして、全員が座り寝ている黎を見る。

黎「ZZZ・・・」

まだ、夢の中のようだ。

希乃が起そうとする。

俺「希乃、やめとけ。下手に手を出すと被害を受けるぞ・・・」

希「え・・・？」

真はかばんの隠しポケット（自分で作った）からエアガンを取り出す。

黎に狙いを定めて撃つ！

少しずれて真のちやぶ台の足にあたった。

ちやぶ台の足はぼろかったのか壊れた。

真「ツチ」

舌打ちをする真。

希「愁君……。だ、大丈夫なの？」

俺「ああ、あいつは昔エアガンもって喧嘩しまくってたらしい。俺は見たことあるけど結構強かったな。最近、撃ってないから鈍ったな」

希「いや、そういうことじゃなくて、ちやぶ台壊れましたよ……」

俺「ああ、改造して威力上げてるらしい

希「すごく狙われてる気がするんですけど」

それは仕方ないのだ希乃の後ろが黎の席だから。

会話をしていると2弾目を放つ。

俺「まあ、あいつも希乃のこと考えて遠慮してたから自分のに当ててしまったんだろう」

つと言いながら自分のちゃぶ台を盾にしてエアガンの弾をガードする俺。

真「すまん」

一言、誤る真。

俺「しっかりしてくれよ」

希「だ、大丈夫なの!？」

俺「大丈夫、大丈夫」

真「本当に腕、鈍ってるな・・・」

狙いをつけて

3弾目を放つ

黎「いてえー!!」

黎の声が良く聞こえた。

真「よし!」

黎「よし!っじゃねーよ!」

黎は立ち上がり真を殴りに行く。

俺「まあまあ、作戦会議してるのに寝てるお前が悪いぞ・・・」

俺は止めに行った。その時、

西「騒がしいぞ！」

鉄人が来た。

西「また、貴様ら3人か！」

「「逃げるぞ！」」

さっきまで喧嘩をしていた2人は仲良く逃げ出す。

俺「ちょっと待ってください！俺は違います」

西「言い逃れするのか！」

襲ってくる鉄人。結局、俺は逃げることになる。

F1「嵐が去った・・・」

美「本当に楽しいな」
希「愁君大丈夫なのかな・・・」

Fクラスは平和になった。

真「3人バラバラに逃げようぜ」

「「了解」」

真の提案に乗りみんなが散る。

西「待てー！」

それから15分後、俺が捕まりそのころには2人とも拷問部屋に入っていた。

「「「最悪だ！」「」「」

Cクラスと戦略と手紙の行方

アンケート

自分の趣味を答えてください

上田

『ゲーム、エアガン改造、射撃』

先生

ほどほどにしてくださいね

天城

『読書（文庫のみ）、喧嘩』

先生

読書は文庫以外も読みましょう。喧嘩はしないように。

七瀬、小坂

『とくにないです』

先生

何か趣味を持ちましょう。

小島

『料理を友達に上げる』

先生

それは良いですね。友達も喜んでくれると思います。先生にも作ってくださいませんか？

後日、真はEクラスとDクラスと同盟を結んだ。

真「さあ、次はCクラス戦をするぞ！」

F「「「おおお！」」」

真「さて、愁に黎ついて来い」

宣戦布告しに行くのか俺と黎を呼んだ。

黎「さて、また暴れるか……」

真「まあ、正当防衛だよな」

俺「計画して反撃することを正当防衛とは言わないぞ」

そして、Cクラスに……。

ドアを蹴って入った。

真「Fクラスの代表だCクラスの代表いるか？」

根「この俺、根本 鏡也になにか？」

そういえばこいつって伝説のFクラス時代に兄貴がBクラスの代表
だったらしいな。

真「俺たちFクラスがお前らに宣戦布告をする」

根「ああ、最近のうわさのか・・・」

うわさになっているのか俺たちは・・・。

根「普通にやるんじゃない。3：3の一騎討ちで勝ち残り戦をしないか？」

3：3ってこいつらAクラス並の力をもつ奴がこっちは3人いることを知っているのか？

真「いいのか？」

根「バカなクラスを相手にするんだ。ハンデくらいやってもいいだろ」

確かに俺たちはバカだ。だがこの状況はこっちの勝ちを約束してるようなもんだぞ・・・。

真「なら、その条件で受けよう」

根「ルールとして、最初は総合科目で戦い、次からは負けたチームの次の相手が科目を選べるってどうだ？」

真「いいだろう」

根「でわ、明日からは休みだ。次の平日の10時からでどうだ？」

10時か・・・。授業が始まる9時じゃなく10時からの理由でもあるのだろうか？

真「わかった」

根「でわ、次に会う時を楽しみにしてる」

そして、何事もなくFクラスに戻った。

真「次のCクラス戦は3：3の一騎討ち勝ち残り戦になった！」

F1「勝てる！Aクラス並が3人いる俺たちなら勝てる！」

F2「これで俺たちの理想に……」

報告を受けて大喜びするFクラス。

そして、俺たちは自分たちの席に。

希「……やりましたね」

隣で希乃も喜んでいた。

真「愁どう思う？」

俺「真と同じだ」

黎「え？何でだ？」

黎は賢いはずなのに戦略的にはまったくだな……。

真「あいつらが俺たちのことを知らなければこの条件は良いものだ」

俺「だが、あいつは噂のFクラスかって言っていて俺たちのことを知っている。なのにこっちに有利な条件を出した」

俺が真の言葉に続ける。

真「つまり、あいつらは何か勝つための秘策があるからあの条件にしたってことだ」

そう、この真、希乃、黎が来ても勝てる秘策か何かがあるのだろう・・・。

美「っで、誰を出す予定なの？」

まあ、真、希乃、黎を出してどう順番を入れ替えるかだな・・・。

真「俺、愁、後は黎か希乃を出す」

俺「ちよつとまで、何で俺の名前が出てるんだ？」

他奴はわかる。だが、数学だけの俺を出してなにをするつもりなんだ？

真「相手はこっちのメンバーを知っている以上予想外な方向から攻めるのも良いかなってな」

美「それじゃ、私はテスト受けなくてもいいね」

まあ、予備のメンバーもいるから他の奴は回復試験を受けなくても良いだろう・・・。

真「まあ、俺の考えなら一人一殺だ。黎か希乃が一番手で相手の一番手をつぶす」

まあ、総合科目なら負けないだろう・・・。

真「相手の二番手はこっちの苦手科目に強い奴が来る。まあ、黎なら歴史、希乃なら数学だな」

俺「希乃って数学が苦手なのか？」

希「はい。がんばってもものびないんですよね・・・」

真「暇なら希乃に数学を教えてやれ、愁」

いや、俺の数学のとき方を教えたなら解らなくなるぞ・・・。

希「よ、よろしくお願いします」

俺「あ・・・ああ。うん。解った」

そういわれたら断れない俺がいた。

真「そして、二番手である愁が相手を一撃でしとめる」

まあ、こっちが数学を選べば確実にだろう・・・。

真「最後の奴が多分英語で申し込んできて愁が負けて俺の出番になり得意科目でつぶして終わる。こんなもんだな」

俺のもっとも苦手である英語は基本一桁台なのである・・・。

真「まあ、負けることはないと思うが油断せずにつぶそう」
そこにいた全員が苦笑をする……。

黎 side

明日から休みで休み明けに試験召喚戦争か……。
まったく、楽しい学校だ。

放課後、美羽とわかれて1人で帰り道を歩いてた。

それにしても、Aクラスにはあいつがいるんだよな……。

自分の昔の知り合いを思い出しながら川沿いに歩いてると……。

バン 背中から川の方に押される

バシャン！ 俺が川に落ちる

ダツダツダダ！ 押した奴がどこかに逃げる

黎「ぶ！」

いきなり水の中に沈んで驚く……。

黎「だ、誰だ！」

叫んでみたが陸に上がったら、もう誰もいない。

川はそれほど汚くもなかったが……。

冷たかった。

黎「くそ、さみー……。唯一の救いが教科書をすべておいてきたことか……。」

俺のかばんは弁当とお茶と筆記用具しか入っていなかったのである。

それにしても、誰なんだ？

黎「へ、へくしゅん！」

これはやばい……。風邪をひく……。

俺はダッシュで家に帰った。

希乃side

く一日の出来事く

どうしてだろう……。

昨日まで会った手紙を入れた封筒がない……。

昨日の帰る前まではかばんの中に入ってあったはずなのに……。

今日の体育の授業以外は、この教室にいて取り出したことはない。

誰かが持ち去ったのだろうか……。

そんな時、Cクラスへの試験召喚戦争になった。

3：3の一騎打ちで戦うことになった。私のクラスは成績が優秀な子が自分を入れて三人いて。勝てると思っていたら。

Cクラスの代表の根本君……いや、根本が私に話しかけてきた。

根本はなくした封筒を持っていた。

『これをばら撒かれなくなったら試験召喚戦争の日は欠席しろ』
つと言われた。

私はどうすればいいんだろう……。

Cクラスと戦略と手紙の行方（後書き）

根本（弟）は兄を尊敬しています。

兄が使った方法をすごく参考にしているっという設定です。

希乃の手紙を盗むって原作に似すぎって？

もう、それしか思いつかなかったんです許してください・・・。

卑怯者はケルベロスを怒らせた

休日、愁は希乃から返してもらった文庫を読みながらのんびりしていた。

プルルルル

そんな時、1週間ぶりに電話が鳴った。

俺「珍しいな・・・」

面倒だなっと思いつながら受話器をとる。

俺「もしもし、天城ですけど、どちら様？」

『・・・』

返事がない、ただの屍のようだ。

どこか、昔のゲームの文字が思い浮かんだが気のせいだろう・・・。

希『愁君・・・？』

屍じゃなかったよ。この呼び方をする奴は今のとこ1人しかいない。希乃だ・・・。

俺「どうした？っと言うより、なぜ電話番号を知っている？」

俺はまだ教えていないはず・・・。

希『真君から聞いたの……』

どこか元気がない返事が返ってくる。

俺「そうか、それでどうした？」

希『私……どうすれば良いのか解らなくて……』

声が震えてるのが解った。多分泣いているのだろう……。

俺「まあ、落ち着け。俺にはまださっぱり意味がわからないから落ち着いて理由を教えてください」

希『うん……』

そして、俺は希乃の話を聞いた。何か重要な手紙を根本に取られてそれをばらまかれたくなかったら試験召喚戦争の日に欠席をしないかないっと言っことも……。

卑怯なことを……。

俺「まあ、大丈夫だ。俺と真と黎が出れば何とかなるから、試験召喚戦争の日は欠席しろ」

希『で、でも……』

俺「まあ、心配するなって何とかしてやるからよ」

希乃が出なくても勝てないことはない……。

希『ごめんね・・・』

俺「まあ、このことは誰にも言つなよ。俺も言わないし」

希『う、うん』

俺「そういえば、何で俺なんだ？こついうことなら真に言つべきじゃ？」

希『え・・・』

俺「まあ、頼りにされてるのかな俺も」

ちよつと笑いながら言った。

希『頼れる人は愁君しかいなくて・・・』

・・・。

ドクン、ドクン。

やばい、ドキドキしてきた・・・。

俺「あ、ああ。そうか・・・。あ！誰か来た。電話切るよ」

そして、一方的に電話を切った。電話を切つてからもドキドキは収まらない・・・。

プルルル・・・

再び電話が鳴った。

希乃のなんだろうか……。ドキドキしながら受話器を取る……。

俺「もしもし、天……」

真「愁無事か!?!」

俺の緊張感を返せ!

俺「ああ、元気だが?」

真「それは良かった……」

真は何かほっとしている。

俺「どうかしたのか?」

真「黎が風を引いて試験召喚戦争の日にこれるかわからねえ」

へー、風引いたのか……。ってやばい!非常にやばい!

俺「それは本当か!?!」

真「本人からの電話だ。あいつはこんな冗談は言わないから本当だろ……」

まずい、非常にまずい……。希乃も黎もこれないなんて……。

真『お前が大丈夫そうだし、次は希乃にあたってみる』

さらにやばい……。真が希乃に電話したら手紙のことも話しちゃうだろ……。

俺「相当まずい状況だ……」

真『まさか……。希乃もやられたのか？』

俺「何か知らないが試験召喚戦争の日に欠席するように言われてるらしいぞ……」

真『ツチ、向こうの狙いはこれだったのか……』

前にやったDクラス戦でほとんどの奴は回復試験を受けていない。3：3の一騎討ちだったので必要がないと真が言ったのだ。

開始時刻は10時。回復試験を1つ受けるのに最低45分、最高1時間……。科目として1科目しか受けれない。

真『こんなことだったら美羽に回復試験を受けさせるべきだった……』

美羽はBクラス並なのでCクラスとの一騎撃ちでも確実ではないが戦えるだろう。

俺「真、頼みがある……」

真『それどころじゃないが……。いちお聞こう、なんだ？』

俺「俺に英語を教えてください」

そう、相手は俺の苦手科目を知っている。だから、俺と対戦する相手は英語で戦うだろう。確実に勝つために……。

真『お前が2連勝でもしてくるっていうのか？』

俺「俺かお前、どっちかが2連勝しないといけないんだろ？お前の苦手科目は物理だ。勉強をがんばっても点数を伸ばせないっていつも言ってる？それだったら俺が英語をがんばって俺が2連勝するしかないだろ？」

そう、俺のクラスのAクラス並は全員苦手科目がある。黎は歴史が120点あたりだ。希乃は数学が170点代。真は物理が100点数らしい。これじゃCクラス並だ。

真『お前は努力すれば点数を上げれるんだな？』

俺「ああ、やってやる……」

真『解った。俺の家に来い。お前の家には資料がないだろ』

俺「わかった」

そして、俺は真の家で必死に勉強をした。

真「まあ、最初に比べたらすごい成果だが……Cクラスで戦って確実に勝てるとはいえないな……」

真は自分が作ったテストを俺にやらせて点数を見ながら言った。

俺「まだまだ。まだやるぞ！」

時刻は10時半。

真「今日は家に帰れ。これ以上やっても集中できないだろう」

ッということ家で帰ってきてすぐに寝た。

翌日、明日はCクラスと試験召喚戦争だ……。

起きると10時くらいまで1人で勉強をする。

そして、真の家に向かった。

そして、昼間で勉強をして小テストをする。

真「……さつきから点数が上がらないな……」

必死にがんばってるが点数が伸びない……。

俺「なんとかできないのか？」

真「俺も魔法使いじゃないからな」

くそ、ここまできて……

。 次の試験召喚戦争で負ければ希乃の手紙はどうなるか解らない……。

真「最終手段を使うか・・・」

いきなり、そんなことをつぶやいた。

俺「なにか秘策があるのか!？」

真「ああ、でもな過酷だぞ。絶対にやり遂げるって自信があるか？」

過酷なのか・・・でも、俺の友達がくるしむのなんていやだ!

俺「やってやる!過酷だろうが地獄だろうが!」

真「よし、制服に着替える。学園に行くぞ」

文月学園に？

そして、家に戻りすぐに着替えて学園に行く。

真と合流して職員室に向かう。

真「2-Fの真ですが西村先生入ますか？」

西「何だ真」

鉄人を呼んでなにをするんだろう？

真「愁が俺と試験召喚戦争をしたいって言うんですけどちょっと立会い人になってください」

西「良いだろう」

ちよつと待て、まさか・・・。

真「上田が天城に英語で勝負、サモン試獣召喚」

真の召喚獣が現れる

俺「くそ！」

俺の召喚獣も強制的に召喚される・・・。

『英語 Fクラス 上田 374VSFクラス 天城 5』

俺を真の大剣が一刀両断・・・。

俺「うわああー！」

そういえば、観察処分者だからフィードバックが来る。すごく痛い！

西「戦死者は補習！」

鉄人により拷問部屋に連れて行かれる。

真『これがお前のレベルアップ方法だ』

言葉には出さないが目がそういつていた。

こうして、拷問部屋で鉄人と勉強をした。本気で話を聞いて勉強を
すると鉄人は勉強を教えるのがすごくうまい。

そして、俺は拷問部屋から出てきて家に帰り眠った。

番犬と冥界の使者

先生が弁当を食べてから腹痛で採点ができないので最後に問題を出させていただきます。

次の日

真「どうだ。勉強できたか？」

登校すると真が言った。

俺「ああ……。できたぞ……」

真「なら、9時になったら回復試験を受けて試験召喚戦争を待つだけか……」

黎と希乃の席には誰もいない。

美「黎と希乃どうしたんだろ？」

美羽が疑問に思う

真「ああ、2人来ないから美羽が一番点数の低い科目を受けてくれ」

美「え、こないって……。大丈夫なの？」

まあ、当然の疑問だ。

真「1番手は捨て駒だ。2番手の愁が2人抜きしてラストを俺が狩る！」

そう、俺たちは苦手科目を選ばれたら勝てないが力をあわせて勝つ。

そして、回復試験を受けて決戦の時……。

希乃 side

愁君は大丈夫つと言っていたが大丈夫なんだろうか……。

黎君が私の代わりに……。私には何もできないんだろうか……。

黎 side

くそ、俺が風邪をひくなんて……。

体温計は39.3 っと出る。

あいつら、大丈夫なんだろうか？

side END

根「やあ、Fクラスのみなさん」

根本が入るCクラスに来た。はつきり言って殴りたい。

真「ここで殴るなよ」

真が小声で言った。

根「あれれ？人数が少し少ないね」

ツダ 俺が踏み込む

ドカ その俺を真が殴って止める

根「仲間割れか哀れだな。フハハハハ！」

C「ハハハハ」

Cクラスが笑い声に満ちる。

真「やめろ、ここで殴ったら問題になる」

俺「・・・だ」

真「何だ？」

俺「いやだ！」

俺は許せない、ここまでして勝とうとするこいつに・・・。

真「一騎討ちをやるう。俺のところの番犬（愁）は暴れたいようだ」

根「良いだろ」

立会い人として鉄人が来た。

西「始め！」

相手の1番手と美羽が前に出る。

「「^{サモン}試獣召喚！」」

二人の召喚獣が現れる。

剣をもって胴衣を着てるC1の召喚獣と忍者装束に小太刀を持った
美羽の召喚獣

『総合科目 Fクラス 小島 1200点 VS Cクラス C1
2000点』

差は800で俺たちは負けた。

C1「まずは1勝」

F「「「つう……」「」」

美「「ごめん……」」

真「まあ、仕方ない。行け愁！」

俺「ああ……」

次は俺が前に出る。

俺「俺がC1に数学で勝負。^{サモン}試獣召喚！」

俺の召喚獣が現れ。相手の召喚獣も強制的に現れる。

『数学 Fクラス 天城 650点 VS Cクラス C1 150点』

圧倒的な力だった。

それでも剣を振ってくる相手に

俺「変化^{チェンジ}体[」]」

俺がそういうと……。

召喚獣の体が光……。

光のなかから三つの首の犬、ケルベロスが現れた。（大きさは召喚獣と同じ）

「「「な!?!」」」

全員が驚く。そう、これが俺の腕輪の能力。

俺「消える」

そういうと召喚獣は相手をつめで引っかいた。

『数学 Fクラス 天城 550点』

攻撃は当たっていないが腕輪の力を使ったので点数を消費する。

C1「何だあれは・・・化け物か・・・」

西「次！」

驚いてる奴が多い中、鉄人の声が響き渡った。

C2「はい」

C2「俺が天城に英語勝負を挑む！試獣^{サモン}召喚！」

『英語 Fクラス 天城 201点 VS Cクラス C2 257点』

「・・・嘘だ！」「」

真以外の全員が言ったんだろう・・・。

鉄人に関しては昨日の成果が出てんだなっと関心してた。

俺「これが現実だ！」

相手は槍を持った召喚獣。

C2「相手が悪かったな、槍と剣なら槍のほうが有利だ」

確かに、有利だろうが・・・。

俺「お前バカか？俺は観察処分者だ。召喚獣の扱いなら負けない」

そう、日ごろ観察処分者つと言つことだけで先生にこき使われている……。

相手は槍を構えて突撃してくるが……。

俺の召喚獣はスライディングしてそれを避けて相手の足を蹴る。

C2「な……!?!」

倒れこむ召喚獣を2回か3回ほど斬る。

『英語 Fクラス 天城 201点 VS Cクラス C2 58点』

俺「だいぶ点数減ったじゃねーか」

C2「くそ……」

最後に剣を敵に投げてそれが召喚獣に当たって俺は勝利を決める。

『英語 Fクラス 天城 201点』

F1「あのバカが2連勝した!」

F2「いける!いけるぞ!」

根「だらしのない奴め!」

代表の根本がC2を殴った。

俺「おい、お前!」

根「何だ？」

根本はこつちを向いた。

俺「それががんばった仲間にはやることか？」

根「がんばった？」

俺の言葉を聴いて根本は笑う。

根「どれだけががんばろうと結果こそがすべて！現に七瀬はいつもが
んばってるのにFクラスなんかに入る」

希乃をバカにするのかこいつは……。

俺「お前、いっていいことと……」

怒ろうとしたら鉄人にとめられた。

西「C2！今の行為は暴力か？」

C2「いいえ、違います……。ふざけあってるだけです……」

西「それならいい」

鉄人は何も言わなくなった。

俺「良い訳ないだろ！結果が出せないから殴る？ふざけるな！」

根「お前、うるさいよ。根本が天城に国語で勝負する。試獣^{サモン}召喚」

『国語 Fクラス 天城 105点VS Cクラス 根本 293点』

巨大な斧を持った根本の召喚獣。

真「お前の目的は終わってる。存分に楽しみ」

親友の言葉を聴いて

俺「もちろんだ！」

根「観察処分者なんだろ？存分に痛めつけてやるよ」

斧を横に振る。俺はそれに反応してその場に倒れ込んで避ける。

根「甘い」

俺の上で止まった斧、刃のない部分で俺をたたく。

俺「うわあ！」

『国語 Fクラス 天城 57点VS Cクラス 根本 293点』

刃の部分じゃなかったことと手加減してたことからダメージは低い。

だが、背中を木製バットでたたかれるように痛い。

召喚獣は双剣の片方をその場に落とした……。

根「これはいい」

根本は斧を自分の後ろに置き。俺の剣を拾う。

根「これでじわじわいたぶってやるよ」

俺「!?!」

剣を取った根本を召喚獣の右手に突き刺す。

俺「っう!」

俺には手に何かが刺さったように痛む……。

根「さっきまでの威勢はどうした?」

俺はいったん根本から距離をとる。

根「ほら、楽しもうぜ」

真「愁、降参をしるお前がきづついてたら希乃は喜ばないぞ」

真が真剣な顔で言ってるのだろう。

俺「バカか?ケルベロスは番犬だぞ。退くことはない」

冗談のように言う。

根「なら、ここで倒れる！」

剣で突き刺そうとする根本。それを必死に避ける。

避けていたが根本の剣が左肩に刺さる。そのまま上に切り上げる。

俺「うわああ！」

本当に斬られていないが痛む肩を抑える。

『国語 Fクラス 天城 15点VS Cクラス 根本 293点』

根「そろそろ終わりか・・・」

根本は後ろにある斧を持ってきて。

根「終わりだ」

大きく持ち上げ倒れてる俺にめがけて振り下ろす。

俺「くそ」

俺は持ってた剣で根本の足を切る。

振り下ろされた斧は右手にあたり

俺「うわわああああ！」

右手が右手が！

『国語 Cクラス 根本 283点』

根「がんばっても削れたのは10点か」

俺を笑う根本。

俺は右手から傷ができて少し血が出てる。

真「愁！大丈夫か！」

西「天城を保健室に！」

鉄人も的確な指示をする。

俺「何言ってるんですか？戦争は終わってませんよ・・・」

俺は最後を見届ける・・・。それに、たいした傷でもない。

真「なら、さっさと決めようか」

真は根本の方を向く。

真「俺が根本に歴史で勝負する。試獣召喚^{サモーン}！」

『歴史 Fクラス 上田 412点 VS Cクラス 根本 240点』

真の召喚獣が現れ

真「死神^{デスゴット}」

真がそういつと大剣は鎌に変わり重鎧は黒装束に変わった。

そして、姿を消した。

根「な・・・!?!」

真「終わりだ」

黒装束は根本の後ろに現れ鎌を一振りして元入た位置に元の姿で現れる。

『歴史 Fクラス 上田 312点』

点数が減っているがFクラスの勝利だ。

F「」「うおおお!」「」

勝ったか・・・。

俺は保健室に運ばれ少し手当てをして一日を終えた・・・。

問

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

上田、小坂、天城、七瀬

『good? better? best

bad? worse? worst』

先生

天城君が正解してることに驚きました。

小島

『先生、弁当はどうでしたか？』

先生

問題を解きましょう。後、生徒が先生に弁当を上げるのはいろいろと問題があるので、友達だけに上げてください。

敵と弁当と大切な友達

問

以下を訳しなさい

『 This is the bookshelf that my grandmother had used regularly .
』

七瀬

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

先生

正解です

天城

『これは私の・・・が愛用した本棚です』

先生

惜しかったですね。祖母がわかりませんでしたか……。でも、すごく理解できてます。

上田

『これは本棚が愛用した私の祖母です』

先生

後で職員室に来てください

俺は右手の怪我はたいしたことなかった。

しかし、朝起きると左肩が痛かった。見た目はなんともないが触れると痛い。

俺「まあ、良いか・・・」

よくあることだし普通に学校に行った。

俺「おはよう」

教室の扉を開けて入ると・・・。

黎と真がこの世の終わりみたいな顔をしていた。

美「おはよう」

代わりに美羽だけがすごく機嫌が良い。

俺の体が叫んでる『ここは危険だ』つと・・・。

俺「あ、教科書忘れた」

そういつて教室を出ようとするっがしかし、2人の親友がダツシユで俺とこまできて肩をつかんだ。左肩が痛む。

真「俺が貸してやるよ」

黎「だから、家に戻らなくてもいいよ」

2人は急に笑顔になった。

俺「何を言ってるんだ？お前らの席は後ろだろ？」

俺がそういうと……。

希「だったら、私の教科書見せてあげますね」

希乃……。ありがたいが今はありがたくない！

俺「ああ……。ありがとう……」

希乃に礼を言う。

そして、二人の親友に連れられて席に……。

「さあ、地獄と一緒に味わおうな……」

小声で言った。

これまでのことを訂正しなければならないこいつらは親友じゃない。敵だ！

美「愁」

地獄への招待状が……。

美「今日ね。サンニンニベントウヲモツテキタンダヨ」

そう、美羽の弁当はまずいってレベルじゃない……。食べないのレベルなのだ……。

しかし、中学の時に弁当を作ってくれたら食うつと言う約束をした。しかも、美羽が好きな黎は本当のことを言おうとした俺を黙らせる。そして高校に入って被害者が1人増えた。

これは非常にまずい……。今日が俺の命日かも知れない。

黎「俺たち親友だもんな……」

真「苦楽を一緒に……」

こいつらは敵だ！

希「美羽ちゃん、弁当を作ってきたんだ」

美「うん。たまに3人のために作ってくるの」

希乃「難しい顔をして

希「美羽ちゃん、私もご一緒してもいいですか？」

……。被害者がもう一人増えた！？

やばい、やばいよ……。俺や黎、真は頑丈だから大丈夫だが希乃は……。

美「いいよ」。黎たちと昼休みに一緒に弁当を食べよ」

美羽はそういった。そして、奴らは動き出した……。

FFF団「」「異端者！」「」

Fクラスのほぼ全員が覆面に黒マント。

FFF団「」「異端者に裁きを！」「」

さらに厄介になってきた……。

黎「くそ、やるしかないのか！？」

真「毎日疲れるな……」

俺「休めばよかったー！」

そして、朝の乱闘が始まった。

相手は鉄パイプや金属バットにハンマー……。

俺「ちよつとまで！前は素手だったよね！？」

FFF団1「お前ら強いから武器を持つようにしたのSA」

したのSA。じゃねーよ！

俺「くそ！」

近づいてきた奴からつぶしていく。

真「弾がもつたいないな」

内ポケットに入れてた小型エアガンを取り出し、銃口で相手をついて、その後弾丸を放つ。

FFF団2「う……」

改造エアガンは結構痛いぞ……。

黎「素手じゃ、勝てない!？」

黎は苦戦していた。喧嘩は強いが素手は苦手なのだ。素手対素手なら勝っていたが素手対武器じゃ勝てないらしい。

黎「愁か真、頼む!」

俺「仕方ないな」

相手の腹部を殴りながら答える。

殴った奴はその場に倒れこむ。そして、持っていた木刀を奪い……。

俺「これでいいだろ!」

木刀を黎に投げつける。

黎「ありがとよ!」

木刀を受け取りクラスメイトを叩く。

この乱闘は先生が来るまで続いた。

福「HRを始めますが……なんで皆さん血がついてるんですか?」

先生の永遠の疑問だろう。

そして、昼休み……。

美「屋上で食べよう」

天国に行くのかな……。

真「神よ……。我らに生き残る力を……」

黎「死ぬまえに告白しようかな……」

親友2人はいろいろと崩壊している。

希「楽しみですね……」

そんなことを言ってるわりには元気がない。

俺「希乃どうかしたのか？」

希「いえ……。昨日のこと誰も話そうとしませんけど……。皆さんどう思っているのか……」

ああ、そういうことか……。

俺「まあ、結果よければすべてよし。どうでもいいんじゃないか？」

気楽に答えた。

希「そうですね……。そういえばお礼がまだでしたね。ありがとうございます」

俺「いやいや、特に何もやってないぞ」

拷問部屋とか行っただって言えないな……。

希「真君から聞きました。がんばってくれたんですね……」

真の野郎！

その真は……。

真「神は我らに罰を与えるのでしょうか？」

小声でまだ言ってた。

俺「はあ、黙っていようと思っていたのに……」

希「私にはそんなに言いづらいですか……？」

俺「まあ、言いづらいだろ。お前は自分を責めるタイプだからな……」

自分のせいだと繰り返すだろう……。

希「……」

俺「まあ、気にするな。おかげで少し勉強ができるようになった」

希「今度何かお礼をしたいです・・・」

希乃が顔を赤くしながら言った。

俺「それなら、今度、弁当でも作ってくれよ。豪華じゃなく普通のいつも食べてるようなやつを」

希「うん、解った」

その日の希乃の笑顔は何か吹っ切れたようだった。

その後、美羽の弁当を食べて倒れた・・・。

目覚めた時と拷問？いいえ、説得ですよ。(前書き)

これまでCクラス代表は根元って書いてましたが伝説のFクラス時代のBクラス代表の苗字は根元じゃなく根本なことに気づきましたので訂正しました。

目覚めた時と拷問？いいえ、説得ですよ。

アンケート

『今、ひとつだけ何でも好きなものが手に入ります。何を望みますか？』

上田、小坂

『小島 美羽』

先生

さすがに人の名前を書くとは思っていませんでした……。

天城

『恋……』

先生

先生もほしいです。

小島

『食材』

先生

食材ならすぐに手に入ると思いますが……。後、弁当を作るのはほどほどにしてください。

七瀬

『勇気』

先生

勇気ですか、何か伝えにくいことでもあるんですか？

ここはどこだろう……。

「おい！起きろ！」

遠くから聞こえる……。でも、眠いよ……。眠たいんだよ……。

爺「愁、こつちじゃ……。」

死んだはずのじいちゃんが読んでる……。

目の前には川が……。

じいちゃんは川の向こうで手を振ってる。

俺「わかったよ。今、川を渡るよ……。」

「ちよ……！？わたるな三途の川だぞ！」

後ろから聞こえるが遠いのか聞き取れない。

「仕方ない腹を殴って吐かせよう！」

「解った！」

恐ろしい会話してるが聞こえないので気にしない……。

爺「ほら、こっちに来るんじゃない」

川に入ろうとした瞬間。

俺「グハ」

腹を思いっきり殴られた。

黎「大丈夫か！」

いや、腹がすごく痛いぞ……。

真「意識を取り戻したか！」

二人が真剣な顔で言った。

俺「あれ……。じいちゃんがいたはずなんだが……」

黎「おい！じいさんは小学の時に亡くなったとか言ってたか
！？」

そういえば……。

真「お前は美羽の弁当を食べる時、『苦しみは一瞬が良い』とか
咳いて一気に全部食べたんだよ」

そういえば、そうだった……。

黎「俺たちは死なない程度に食べていったがお前が倒れた時には驚

いたぞ・・・」

どうやら現在いる場所は水道の前だ。

希「愁君、大丈夫？」

近くの階段の上の方から聞こえた。

黎「お前はのどにつまらせたってことになってるから、よろしく」

黎が小声で言った。

俺「大丈夫だ。すぐ戻る」

俺はそういつて屋上に戻る。

黎「いやー。愁もいつきに食いすぎだつて」

屋上に戻ると適当に会話をしだす黎。

真「本当だ。のどに詰まらせて死ぬ奴だっているんだぞ」

俺はそれとは別で死に掛けたぞ・・・。

「「「ごちそうさん」」」

美「いえいえ・・・」

3人で言ったが誰一人として本当の笑顔じゃなかったのは言うまでも無いだろう。

美「そういえば、デザートも・・・」

真「遊ぶぞ！」

「「おおお！」」

自分たちの最速の速さで屋上を去った。

その後、俺たちはクラスに戻って、トランプをやっていた。

授業が始まり・・・何事も無く終わった。

放課後。Cクラスに足を運んだ。

真「やあ〜。負け組みさん〜」

真がそんなことを言って中に入った。

根「ツチ・・・」

舌打ちが聞こえたが気にせず・・・。

俺「さて、交渉しに来たぜ」

Cクラスに勝った。あの日、真は明日の放課後に交渉しに行くと言っていたので大体の奴が教室にいた。

根「設備取替えの日を決めにきたのか？」

真「やだな。俺たちは平和が好きなんだよ」

俺「そうそう、平和がいちばんだよな」

黎「まあ、平和に行こうよ」

Cクラスに入った全員（3人）が言った。

根「つで、平和好きは何が目的なんだ？」

俺「まずは、手紙を返してもらおう」

3人には手紙のことを話したので普通に言った。

根「そんなこと知らないな」

そんなことを言い出した。

俺「はぁ・・・」

ため息をつく・・・。

俺「Fクラスに入る。FFF団員全員呼んで来てくれ・・・」

黎「ほいほい」

黎はFクラスに戻る。そして、FFF団員全員を連れて帰ってきた。

俺「もう一度、問う。返す気はないのだな？」

根「知らない物を返せるはずが無いだろう」

俺「みんな、知ってるか？根本にはAクラスに幼馴染の彼女がいるんだぜ！」

FFF団「」「異端者を発見」「」

みんなの服装が一瞬で変わる。

FFF団「」「異端者に裁きを！」「」

そして、鉄パイプやら金属バットやら・・・を出した。

根「解った！出すから。出すから助けてくれ！」

根本は降参した。

俺「みんな、やめろ。裁きはこれから下すからその前に死んだらつまらない」

FFF団「」「ツチ」「」

FFF団は舌打ちをして凶器を置いて、帰っていった。

根「これでいいんだろ？」

そういつて封筒を渡した。

封筒が目当てのものかと破られていないかを確認してポケットに入れる。

俺「さて、これで希乃がやられて『仕返し』は終わりだ」

真「交渉はこれからだ」

黎「俺がやられた分もやりたいが犯人がCクラスと断定できないのが残念だ」

根「な・・・」

真「俺たちは設備の入れ替えをしても良いんだが・・・。同盟を結んだEクラスの設備を上げてやりたいと思っている。だから、お前たちの設備を1つ下げて、Eクラスの設備を1つ上げれば、3ヶ月の宣戦布告ができないだけで許してやるっ」

C「・・・おおお！」

黎「あゝ、ただし・・・。このメモに書いてあることを全部、根本が言ったらだ」

そういつて10枚くらいの紙を出して根本に渡す。

根「な、なんだこれは!」

メモに書いてた言葉は基本的に『　　が好きだ!』とか『自分はなんだ!』とか『あいつ(彼女の名前)?、ただのブスだよ』っといった。ことが書かれていた。

真「根本、どうする?」

俺「あゝ、ついでに言っと。これを断ったら。Fクラスと設備交換した後には試験召喚戦争をもう一度申し込んで設備を落としてやる」

真が聞いて俺が脅迫をする。

根「言えばいいんだろ！？言えば！」

根本が焼けになった。

黎「あゝ。ごめんごめん、大切なことを言ってなかった」

根本が言おうとしたところを黎がとめる。

黎「この録音機に『全部』録音してね」

そういつて、録音機を近くの席の机の上に置く。

根「な・・・」

その録音機はマイクロSDに録音できるタイプの物だ。

真「もちろん。今すぐには言わない。1週間の期間与えるから、その間にどんな手段を使っても言わせてハッキリと聞き取れる物だったら設備を1つ下げるだけで良い」

根「そんなことをやるわけ・・・」

C1「俺が絶対に言わせて見せる！」

そう言い出したのは前に殴られた奴だった。

C2「そうだ！それである設備にならないんだったらやってみせる

！」

C「「「俺たちに任せてくれ！」」」

根「待て……。話せば解る……」

Cクラスの根本以外の全員はFFF団が置いていった凶器を手にした。

C2「そういえば、殺したらだめだな……」

冷静な奴が言った。

C1「痛みが弱いことからやっていって、いわなかったら段々威力を上げていくか」

Cクラスの全員（根本を除く）が恐ろしい会話を始めていた。

真「じゃ、任せたぞ」

C「「「ああ！」」」

そして、教室を出る。

真「やったな！」

黎「見たか？あの根本の絶望した顔……。ククク」

黎は笑いをこらえてる……。

俺は少し耳を澄ませて教室の様子を聞く。

『ほら、言うんだ!』

『つう……。俺は……』

『そこは『俺は和人()が好きなんだ』だろ!』

『もう、やめてくれ……』

『俺たちの運命はお前にかかってるんだよ』

向こうには怖い世界があつたに違いない……。

黎「クハハハハ!」

黎はこらえきれずに笑う。

真「まあ、自業自得か」

俺「さて、帰るか……」

Fクラスの教室に戻ってかばんを持って帰ろうとすると……。

希「あの……」

希乃に呼び止められた。

俺「あゝ、そうだそうだ……。二人とも先に帰ってくれ」

そついうと二人はニヤリと笑って。

「「解ったよ。人気者め」」

つとに帰っていった。

二人の関係と手紙

二人が帰り教室には俺と希乃だけになる……。

俺「そういえば、手紙取替えしたぞ」

そういつてポケットから封筒を取り出す。

俺「良かったな。これで安心だな」

希乃はそれを受け取って確認する。

希「間違いなく私のです……」

希乃の顔は赤くなっていく。何か恥ずかしいことでも書いてあった手紙が入っていたのだろうか？

俺「まあ、手紙が読まれてなくて良かったな」

希「はい……」

安心したような顔で言った。

俺「それじゃ、またな」

手紙も渡したので帰ろうとするが……。

希「ま、待ってください!」

そう言われると立ち止まってしまっ。

俺「ん？どうかしたか？」

振り返るとさらに赤くなった顔をした希乃がいた。

希「あ、あの……」

恥ずかしそうに希乃が何かを言おうとする。

希「あ、ありがとう……」

俺「別に気にしなくて良いよ」

希「そ、それで……」

ますます、赤くなる希乃の顔。

希「う……」

俺「う？」

聞き返してしまっ……。

希「う、うれしいです……。じゃなくてですね……いえ、うれしいんですけど……」

何が言いたいのかさっぱりだ……。すごく混乱してるらしい。

俺「大丈夫か？」

希「は、はい……」

そして、再び……。

希「う……」

希乃は恥ずかしそうに「う……」と、少しの間、言い続けた……。

帰ってもいいのかな……。

そう思いつつその後つながらる言葉を待つ。

希「う、受け取ってください!」

そう言つて、希乃は返した封筒を俺の方に出す……。

……え?

急な展開に何も反応できずにいた……。

希「受け取ってもらえないんですか?」

少し、なみだ目になりながら聞いてくる。

俺「え……?俺宛の手紙……?」

希「は、はい!」

俺「ど、どつも・・・」

受け取るがここで見て良いのだろうか・・・。

俺「空けて良い？」

聞くなよ俺・・・。

自分が哀れに思えてきた。

希「え・・・。ど、どぞ・・・」

今絶対驚いたって・・・。

そう思いつつ封筒を破る・・・。

やばい・・・。ドキドキしてきた・・・。これで手紙に『不幸の手紙』って書いてあったら俺は泣くと思う・・・。

希乃は顔を下に向けている・・・。

そして、封筒の中身を取り出す・・・。

・・・。

え？

中身が出てこないのだから封筒の中をのぞいてみる・・・。

俺「なあ・・・。希乃・・・」

ビクつと肩を動かす希乃……。

俺「何も入っていないんだが……」

希「返事は……。つて、え!？」

返事は……。の続きと入っていた手紙の内容がどんなものか気になるが空の封筒を希乃に渡す。

希乃は封筒の中を見て顔を真っ赤にした。

希「……。て、手紙を入れてなかったみたいですね……」

ハハハつと笑う。希乃……。

希「し、失礼します!」

そう言つて、ダッシュで教室を出て行った……。

俺「今日のごとは……。忘れよう……」

俺は、今日のことを疑問に思わずに帰ることにした……。

二人の関係と手紙（後書き）

作者からの。ご相談！

えーっと。作者の神滅です。

このたび、ここまで読んでいただきありがとうございます。ついでに。

落ちがこれかよ！っと言われても『これです』っつしか言い返せません。

すいません。雑談になってしまいました。

はつきり言って、キャラクターの名前はあっても髪型とかの設定がまったくないんです！このまま、読者の皆様のご想像のままでも良いんですけど……。募集したいと思っています。多分、これから先の新キャラも設定が無いので考えていただけるとうれしいかなんて……。

ま、まあ！どうぞこれからも『バカとテストと召喚獣は新世代』をよろしく願います。

不安と不安……。

あれから1週間が経った。

希乃は3日間くらいは話をあまりしなくなった。手紙のことが恥ずかしいのだろうか？まあ、今となっては今までどおりだ……。

Cクラスから録音機とマイクロSDは返された。

根本が逆らえないくらいの弱みを握った。(注意：これでも主人公たちです)

真「さて、Cクラスまでつぶし終わった俺たちが次につぶすのはどこだ!？」

我らがリーダーの真が教壇に立って言った。

F「……Bクラスだ!」「」

真「考えが甘い!Bクラスは団体で戦っても勝てる見込みがある!なのでAクラスを先につぶす!」

F1「Aクラスか……」

F2「今年のAクラスも強いらしいぞ……」

そっぴや、Aクラス代表は……。黎の……。思い出さないでおこう……。

真「俺たちの戦うフィールドはCクラスと同じで一騎討ちだ!」

F2「なるほど！それなら俺たちにも勝ち目がある！」
F3「けれど……。そんな条件を受けてくれるのか……。？」

なるほど、個人の強さが強いうちのクラスなら一騎討ちなら勝てるかもしれない。

真「必ず受けてもらう！」

真が自信満々に言った。

黎「どうやってだよ！」

確かに気になる……。

真「それは秘密だ！」

希「そういえば、Aクラス代表って、杉谷 恋華さんですね」

真「ああ、そうだ！杉谷は愁と黎そして美羽の幼馴染だ！」

FFF団「」「異端者を発見」「」

杉谷といったら小学から同じ学校で綺麗ですごくモテていた。しかし、彼女は誰とも付き合っていない。なぜなら……。彼女が好きなのは黎だからだ……。

そのころの黎もすごくモテた。俺が隣にいるから話かけにくいとかでラブレターはだいぶもらっていた。まあ、黎が好きなのは美羽だったけどな……。

懐かしい記憶をたどっていると覆面と黒マントの集団に囲まれてい

た。

黎「ちょ……。待て」

俺「みんな！何か勘違いしてるんじゃないか？」

その中で俺は大声で言った。

苑「天城、何が言いたいんだ？」

珍しく、中井が聞いた。

俺「確かに恋歌は美人で綺麗になった！」

FFF団は凶器を持つ手をしっかり握り締めた。

黎「おい、挑発してどうするんだよ」

黎が小声で言う。

俺「だがな！あいつが好きなのは黎であって俺ではない！」

友達を裏切ることにしました。

黎「弁当の時の復讐か！？」

黎が怒った。

そして、FFF団は俺を囲むのをやめた。

黎「くそおー！」

俺「まあ、これ上げるからがんばれ」

そういつて、木刀を2本、囲まれてる中にいる黎に向かって投げた。

黎「がむしゃらだ！」

後ろで小さな戦争が始まった。

希「あの・・・」

俺「希乃、どうかしたか？」

小さな戦争が気になるのかなと思いつつ聞いてみる。

希「愁君は杉谷さんが美人に思えるんですか？」

どうして、聞くのだろうか？

俺「まあ、美人にはいるんじゃないか？」

希「そ、そうですか・・・」

希乃は急に元気がなくなった。何か悪いことでも言ったのだろうか？

俺「でも、綺麗な奴でも性格的に無理だな・・・」

希「え？」

俺「恋歌は黎が好きで『好きです』って紙いっぱい書いたラブレターを黎の机の中にぎっしり入れたんだよ……」

あの時は俺も驚いた……。学校に来てのんびりしていると黎が「なんじゃこりゃ!？」っていきなり言い出すんだから……。

希「そ、そんなことが……」

他にも恋歌にはいろいろやられていたが……。知らない方が良さだろう。

希「愁君は好きな人とかいないんですか？」

いつもながら、いきなり聞いてくるな……。

俺「いないね〜。小学の時は黎の隣にいて邪魔者扱い。中学の時は喧嘩ばかりで危険人物扱い。高校はこれからだな……」

とりあえず、ざっと言ってみた。

希「そ、そうなんですか」

元気がなくなっただと思っただら今度はほっとしてるよ……。どうたんやら……。

会話が終わると黎はFFF団をやっつけた……。

黎「だめだな……。昔の感覚が戻ってきてる……」

暴れまくっていた黒歴史がまた始まるのだろうか……。

真「まあ、交渉に行ってくるからのんびりしていてくれ」

そういつて真は教室を出た。そういえば、今日は誰も連れて行っていないな……。

真 side

俺はFクラスを出て設備を変えているEクラスを少し見ながらAクラスを目指した。

そして、Aクラスに到着する。

真「お邪魔します」

今回はドアを足で開けた。

A1「な……！」

まあ、最強クラスに喧嘩ごしで入ってきたら驚くだろうな……。

真「Fクラス代表の真だ。代表の杉谷と次席の鈴香はいるか？」

鈴香とはある情報を通して解ったことだがCクラス代表の彼女だ。

恋「なにか？」

鈴「なぜ、私まで……」

二人は立ち上がりこっちに来た。

真「解っているだろうが試験召喚戦争を申し込みに来た」

鈴「彼氏のクラスを倒して調子に乗って私たちをつぶしにきたの？」
恋「愚か」

いろいろ、言われたがまあ気にしないでいよう。

鈴「代表はともかく私まで呼ぶってなんなの？」

まあ、怒るような口調で言ってるが正論だな。

真「鈴香にはこっちの戦い方を承諾してくれるならこのSDを上げようと思ってるね」

そして、見えるようにSDを録音機（再生も可能）に入れて再生をする。

『鈴香が俺の女？何言ってるんだ？俺がす・・・』

真「おおっとここまでだ」

つと云って俺は録音機を止めて巻き戻しをする。間違えて再生を押してしまっても大丈夫なように。

鈴「何なのよ。その、データ！」

鈴香は立ち上がった。

真「題して『根本の本音を録音してみました』の一部」

我ながらネーミングセンスないな……。

鈴「ど、どうせ合成でしょ!」

真「じゃ、本人に聞いてみれば」

まあ、ごまかすだろうな。

鈴「う……」

恋「つで、戦い方ってなんなの?」

杉谷は冷静だな。

真「一騎討ちだ。最初は総合点数、次から2回はAクラスその後の2回はFクラスの5回勝負だ」

杉谷は何か考え込む。

真「ついでに言うと、俺たちの1番手は黎だ」

杉谷の肩がビクッと動いた。

真「まあ、一騎討ちを受けてもらえないなら俺は帰るか」

録音機をポケットにしまう。

鈴「代表……。ここは引き受けませんか?」

二人がひそひそ話をし始めた。

恋「良いわ。引き受ける」

真「それはどうも」

恋「こつちからの条件をだしてもいい？」

録音機からSDを抜いていると聞かれた。

真「何が望みで？」

杉谷のことだ黎関係だろう・・・。

恋「私たちが勝ったら。ひとつ望みをかなえてほしい」

真「その、望みとは？」

恋「私たちが勝ったら・・・。黎と七瀬さんをAクラスに入れること」

・・・。

そうきたか・・・。

真「俺は良いが本人の承諾が必要だな」

恋「勝てるから条件を出してるんじゃないの？」

真「もしもの時のためさ」

やばい、これで負けたらマジでやばいな……。

恋「それじゃ、明日か明後日の放課後に連絡を」

真「解った」

鈴「あの……。SDは……」

まあ、一騎討ちを引き受けてくれたし……。

真「ほら」

手を出して渡す。

まあ、あの中に入ってるのは『鈴香が俺の女？何言ってるんだ？俺が好きなのがあいつだとわかって言ってるのか！？』って言うものだ。他のネタはまた今度にする。

そして、Fクラスに……。

side END

真「みんな良く聞いてくれ！」

真は入ってきてすぐに言い出した。

F「……なんだ、なんだ？」「」

真「Aクラスが一騎討ちでも良いと言ってくれた」

さすがだ……。

F1「すごい！あのAクラスって言うってもこれなら勝てる！」

真「ただし！向こうも条件をつけてきた」

何だ……？

真「俺たちが負けたら……。黎と希乃をAクラスに入れるって言うてきた」

F「なに！？」「」

俺「嘘だろ！？」

真「本当のことだ」

マジかよ……。それじゃ、負けたら……。

隣の席の希乃を少し見つめる……。

希乃は不安な顔をしていた……。

Aクラスに行きたいのだろうか……。

真「それで、二人ともそれでいいか？」

黎「良いわけあるか！もし、もしも！負けたら奴（恋歌）の入るクラスになるんだぞ！」

そういえばFクラスに入ろうつと言い出したのは黎だったらしいな・

。。。もしかして恋歌と同じクラスになるのを嫌がったな。。。。

真「ごめん、お前に聞いてなかった」

親友の反応は冷たかった。。。。

黎「おい！コラ！」

その、黎を無視してみんなの視線が希乃に集まる。。。。

希「わ、私は。。。。」

どうなんだろう。。。Fクラスじゃなくて。。。やっぱり、A
クラスの方が良いのだろうか。。。。

希「それでも、良いです！」

この言葉の意味はAクラスに行きたいのか勝てるかと信じてるのは
俺には解らなかつた。。。。

くだらない・・・！

心理テスト

バザーで貴方は何かの役を務めなければなりません。どの役を選びますか？ついでに理由も書いてください。

A ヤキソバ調理 B 場内警備 C 撤収片付け

小島

『A』（料理が好き）

先生

が、がんばってください・・・。

天城

『C』（まあ、何かやるより最後にパパッと片付けの方が良い）

先生

片付けはやらない子だと思いました。

小坂、上田

『B』（美羽を守らなければ・・・）

先生

なぜ、小島さんと行っている事になってるんでしょう？

七瀬

『C』（えっと・・・。片付けが苦手そうだから・・・）

先生

片付けが苦ってそうっと言いますと。誰か行きたい人がいるのでしようか？

杉谷

『C』(黎の使った物は誰にも渡さない！)

先生

あなたの状況がいろいろと不安です。

(心理テストはあるサイトを参考にさせていただきました。A、B、Cの意味はあとがきにて)

希乃がそう言った後、すぐに話し合いは終わり帰ることになったが・・・。

苑「天城、ちょっといいか？」

珍しく中井に呼ばれた。

真「みんなで先に帰ってるぞ」

真はそういった。みんなとはいつもの5人だ。

俺「わかった。また、明日な」

別れを告げて帰る4人に手を振る。

俺「っで、用事はなんだ？」

Fクラスには4人以外の全員が残っていた。

F1「なあ、どう思ってる？」

俺は、俺だけが呼ばれた時から大体が想像できてるがまあ、聞いておこう……。

俺「なにがだ？」

F2「Aクラス戦のことだよ」

だろうな……。黎や真を呼ばないのはAクラスの条件の話をやりにくいからだろう。黎はAクラスに負ければ入れて、真はそれを承諾した。そして、こいつらの不安は……。

F1「ようするに……。あいつらはわざと負けるんじゃないのか？」

そう、それだろう……。

俺「俺は、あいつらを信用してる」

俺は他の奴らをにらんだ。

大体、黎にかんしては恋華と同じクラスになることをどうやってでも拒むだろう……。

F3「いや、小坂は拒んでるのは解るのだが・・・」

希乃か・・・。

俺「俺は・・・」

なぜ、言えない・・・。

『そんなことをしないで信じてる!』そういうだけじゃないか・・・。

F1「七瀬さんが・・・。いや、わざと負けるって思ってるわけじゃないんだ・・・」

F1は希乃がわざと負けるっと思ってるとは口から言いはしないが・・・。しないとは言いきれないのだろう。

俺「くだらない・・・」

F「・・・え・・・?」「」

俺がつぶやくのを聞いて驚く

俺「くだらないんだよ・・・」

苑「な、何が?」

中井が聞いてくる。

俺「希乃がそんなことをするって考えてるお前たちにそんなことを目の前で言われてるのに・・・。何も言っちゃれない俺がくだらな

い！」

このくだらないっと言う言い方は間違ってるかもしれない。でも、俺は自分に・・・希乃をそんな風に見ていた奴らにイライラしていた。

F4「でもはじめのころを見たら・・・」

俺「俺たちがそんな風に考えてるからだめなんだ！今のあいつは違うんだよ！」

そう言い出して俺は教室からでた・・・。

F「「「・・・」」」

教室に残った奴は沈黙していた。

俺は下駄箱に向かう・・・。

「ねえ。あなたは、あのクラスに入るべきじゃないよ」

下駄箱でそんな声が聞こえた・・・。

Fクラスのその後

F5「天城の奴・・・。あんなに怒りやがって・・・」

苑「天城は七瀬さんのことが好きなんじゃないのか？」

F「……なに！」「」

F1「確かに……。そうかもしれないな……」

F2「異端者か！異端者なのか！？」

苑「いや、待て。付き合っていないのに異端者じゃないだろう……」

F1「まあ、モテないあいつが付き合ってもらえるはずないだろうな」

F「ハハハハ」「ククツクク」「フフフフフ」

その日、Fクラスの教室は変な笑い声が良く聞こえたとEクラスは不安がった。

くだらない・・・！（後書き）

先生

この問題でわかるのは貴方の愛情の形です

Aの人は相手に常に愛され、つくされることを望みます

Bの人は相手と常に一定の距離を持ち、自立した大人の愛を望みます

Cの人は相手につくし、ささげる愛になりがちです

自分を中心に考えるか、他の為に何が出来るかを考える違いですね

皆さんが以外な結果になりましたね・・・。Aが1番少なく。Cが1番多いのには驚きました。

絶対に勝ちます！（前書き）

2・500のユニークアクセスありがとうございます。

総合評価や感想が全然あがないのでやめようかなっと思いつつ書きつつ・・・。

まあ、ありがとう

3・000アクセスになったら、ケルベロス（愁と黎）と真の出会いの話を書こうかなっと思っっています。

絶対に勝ちます！

希乃 side

時間は少し戻り、愁と別れて4人で下校していた時……。

美「愁だけ呼ばれるなんてめずらしね」

そう、良く真君が呼ばれることはあった。（主に作戦やこれからの
どの相談）

しかし、愁君だけで呼ばれるのはたぶん今回が初めてだろう……。

真「まあ、クラスの奴と仲が良いのは悪いことじゃないだろう」

悪いことじゃないけど……。その……、異性に興味がなく……。
。同姓に興味があったら……。最近、変な本を読むようになって
来てます……）

黎「そういえば……。Eクラスも立派になったな」

私たちのCクラスとの交渉の結果。EクラスはDクラスの設備に変
わったのだ……。その時、愁たちが何をしたのかは知らない）

希「私たちのクラスもそのうち……」

これは理想じゃなく……。もうすぐ現実となることだろう……。

そ、そういえば……。手紙をまだ渡せてないんだ……。

封筒の中身は家の机の中にあつてすごく恥ずかしかったな……。

そつだ……。今日、愁君の下駄箱に入れよう！

希「あの、私、先生に用事があるつて頼まれてたのでちょっと、行つてきます」

顔をうつむけながら言つ。

美「ん？そんなこと……。あ、解つた先に行つてるよ」

美羽ちゃんは多分何をするか想像がついてちよつと、笑つているのが見えた。

黎「え？いや、何も言つてなかつたんじゃ？」

黎君が疑問を言つ……。。

真「さつさと歩け鈍間」

真君もわかつてくれるよつで黎君を歩かせる。

美「じゃ、がんばつてね」

3人は帰つていった……。。

ちよつと、窓から3人が学校を出たのを確かめて、下駄箱に向かう。

階段を下りたすぐ近くに下駄箱がある。

階段を下りながら手紙をかばんの中でとりやすい場所におく。

そして、下駄箱の前まで来ると……。

自分の胸はドキドキしていた……。

そして、愁君の下駄箱を……。

「希乃、久しぶりだね」

あけようとすると声をかけられた……。

振り向くと恋歌ちゃんがいた……。

希「そ、そうだね」

笑顔を作ろうとするが……。うまく、作れない……。

恋「Fクラスはどう？なれた？」

恋歌ちゃんは心配そうに言った。

希「最初はいやな場所だったけど……。良いところだよ」

私はそういった。そう、Fクラスに入ったからこそ……。好きな人ができた……。

恋「まあ、無理しなくて良いよ。もうすぐお別れするクラスなんだから」

恋歌はそうだった。

希「え……」

恋「だって、次の試験召喚戦争で黎と希乃はAクラスになるんだもん」

そう、次のAクラス戦。私と黎君はクラス移動がかかっている物なんだ……。

希「それでも、Fクラスが負けるって決まったことじゃないです」

私はむきになって言った。

恋「Fクラスに残りたいんだ……」

恋歌ちゃんは残念そうな顔をした。

希「前はFクラスはいやだったけど、今はFクラスで良かったって思ってるんです……」

自分の思いを言葉にする。

恋「それでも、私は本気だかね」

そう言って恋歌ちゃんは下駄箱から去った……。

私は……。負けたくない……！

s
i
d
e

E
N
D

俺たちのクラス！（前書き）

3・000アクセスありがとうございます。

書き始めて、そろそろ1ヶ月……。すごい、アクセス量です。
（自分から見ても）

次回作は言っていたようにケロベロスと真の出会いです。

俺たちのクラス！

問題（英語）

『犬を反対から読むと？になります』

上田

『紙』

先生

かみはかみでも漢字が違います

天城

『バカ』

先生

西村先生の努力は数日で消えましたか・・・。

七瀬

『ぬい？』

先生

こつという問題は苦手ですか・・・。

小坂

『毛』

先生

何を思って書いたのかまったく解りません。

杉谷

『世界を作った者』

先生

間違っでは入ませんが……。名前で書きましょう。

回答

『犬(dog)を反対から読むと神(god)になります』

その日、俺は希乃の本当の気持ちを聞いた気がした。

帰る時に聞いた。希乃と恋歌との会話。

『前はFクラスはいやだったけど、今はFクラスで良かったって思ってるんです……。』つか……。

そんなことを言ってくれる奴を疑ってたんだ俺は……。

俺「そんなことを思うなら、負けないように勉強だな」

あいつがFクラスに入りたいって思っているんだ……。だったら、Aクラスに負けないな！

（翌日の放課後）

真「さて、Aクラスに喧嘩売るか」

そっいつて真は出て行った。

俺「とうとう、頂点に殴りこみか〜」

笑いながら言った。

希「がんばって、勝ちましょう！」

すごいやる気をだす希乃。

黎「や、奴と同じクラス？な、何を言ってるんだ……」

そんなことを言いながらガタガタ震えている黎。

美「恋歌と会うのは久々だね〜」

出会うことを楽しみにする美羽。

真「明日はAクラス戦だ！今から言う4人は回復テスト受けるよ！」

この試験召喚戦争を終わらせるっと言い出した真。

F「「俺たちは絶対にかつ！」」

そして、勝利を願う奴ら。

本当に面白いクラスだ。

希「愁君なんだか楽しそうですね」

俺「ああ、楽しいよ。バカの溜まり場って言われていたこのクラス

がすごく楽しい！」

俺は笑顔でそういった。

真「楽しそうな顔してるバカ、そのバカの隣の希乃、ラブレターも
らいまくりのくず、美羽」

真が四人を言い上げた。

希「解りました」

美「了解」

俺「ちよつと待て、真」

黎「俺がくず？ だったらお前はくず代表だよ」

返事をする2人と怒る2人。

真「なんだ？ やるのか？」

真はエアガンを出してやる気満々だ。

俺「面倒だから抜ける」

俺は即座に退場。

黎「やってやるうじやねえか！」

黎はかばんから木刀をだすつと・・・。

福「みなさん帰らないんですか？」

担任が戻ってきた。

「「あ、帰ります」」

扉が開くと同時に真はエアガンを即しまった。黎は木刀を窓に向かって投げた。

窓から物を捨てるなよ……。

ちよつと、窓の外を見ると……。

根本が倒れてた……。しかも、その横に木刀が落ちてる……。

うん。何も見てない……。

そして、帰ろうとすると……。

希「愁君」

希乃に呼び止められた。

俺「どうした？」

希「回復テストを受けないといけませんよ」

あゝ、そんなことも言ってたな……。

俺「あゝ……。忘れてた」

苦笑いしながら机に戻る。

それにしても、希乃はやる気満々だな・・・。

3・000アクセス記念 番犬との出会い (前書き)

3・000ユニークアクセス記念です。

2回に分けて送ります。

3・000アクセス記念 番犬との出会い

これは、俺とあいつらが出会った頃の話である……。

そう、すべての始まりは……1年前。

〈1年前〉 真 side

真「めんどろだな……」

俺はそう小声で言いながら、だらだらつとしゃべる教師の授業を聞いていた。

俺の成績は上の方だと自分でも思っている。

この学校は1年の授業は低レベルな常識のようなことから始まる。

はっきりいつてつまらない。

こんなことをするならエアガンを分解して改造をしたい。

授業が終わり、放課後……。

美「黎〜、愁〜」

HRが終わると同時に綺麗な子が教室に入ってくる。2人の問題児の名前を呼びながら……。

愁と黎はこの学校の問題児だ。喧嘩をやりまくっているらしい、何

でこんな奴らがあんな綺麗な子と仲が良いのだろう……。

俺は美羽と呼ばれる少女が好きになっていた……。

しかし、俺が入る隙間なんて無かった……。

あきらめつつも……。あきらめれないこの感情……。

それから1ヶ月過ぎた……。

帰っている途中、愁や黎が喧嘩をしてるのを見つけた。珍しいことではなくよくあることだ……。

でも、今回は珍しかった……。近くの大学の制服を着た体が大きい奴と喧嘩をしている。

俺は立ち止まってその成り行きを見ていた。

馬鹿だな……。高校生が大学生に勝てるはずないだろ……。

黎は木刀を持って、愁は素手だった。

大学生も素手だが愁のような細い腕じゃなくごつく太腕で殴られたらいたそうだ……。

様子を見ていると……。

大学生が愁の腹を蹴って愁がいたそうに倒れこんだ……。

少ししたら愁は立ち上がった。

真「勝てないのになんで必死なのかね」

俺はそれをみてそういった。

黎は木刀で相手の頭を狙うが左手で木刀を捕まれる。

そして、大学生はふと笑って木刀を握りつぶす。

おいおい……。握力強すぎだろ……。

そして左手で殴られた……。

バカバカしいな……。

少しすると2人はボロボロになった……。制服は少し血がついたりしていた。

飽きたのか帰っていく。物陰に隠れていた小学生くらいの子供がその後をついていく。

ガキと喧嘩でもしていて兄貴が出てきてやられたってとこかな？

そう思い俺はその場を去ろうとした時……。

近くの木の陰から小学生くらいの女の子が出てきた……。

そして、愁と黎の元にやっていき心配そうに二人を見つめた……。

その女の子にボロボロだが笑顔で何かを答える……。

もしかして……。あの女の子がいじめられていたから2人が助けに行ったのか？

だから、必死だったのか？

どうなんだろう……。

黎がこちらの方を見た。

俺はその場から逃げるように立ち去った……。

なぜ、そうしたのか解らない……。

理由がわからないが必死だったあいつらを笑っていたのが恥ずかしくなったのかも知れない……。

次の日……。

黎「お前、昨日あの場所にいただろ」

黎がそんなことをいいながら俺の前に立つ。

真「小坂か……。何のことが知らないな」

俺は知らないふりをした。それでどちらの得にもならないだろう……。

愁「何も喧嘩をしようとは思っていない。それは解ってほしい。何で誰にも言わなかったのか気になっただけなんだ」

愁は冷静に聞いてきた。

真「知らないことを話すことはできないと思うんだけどな」

黎「お前……」

愁「そうか、悪かったな」

黎は何か言いたそうだったが愁が止めた。

真「それじゃ、失礼する」

俺はこれで退屈な生活に戻るのだろうかと少し残念に思いながら教室に向かう……。だが……。大変なのはこれからだった……。

3・000アクセス記念 番犬との出会い (後書き)

この後半は5・000ユニークアクセス記念で書こうと思っています。

Aクラス戦（前編） 黎の死亡フラグ

「決戦の日」

俺たちFクラスはAクラスに一騎討ちをしにAクラスに向かう。

恋「ようこそAクラスに」

俺たちを迎えたのは懐かしき幼馴染、恋歌。

黎の状態を見てみると……。

黎「俺たちは負けない……。俺たちは負けない……」

そんなことを必死につぶやいてた……。

黎……。そんなにAクラスがいやだったのか……。

F1「迎えてくれるなんて！」

F2「感激です！」

F3「杉谷さん、愛してる！」

Fクラスのメンバーが何人か話しかける。

恋「黎以外には言っていないのよ」

訂正しよう……。

俺たちではなく、黎だけを迎えたようだ……。

希「恋歌ちゃん……」

希乃が怖い表情で恋歌を見つめる。

恋「希乃、私たちは絶対に負けない」

希「……」

恋歌と希乃の間になにかあったのか？それ以前に恋歌と希乃って仲が良かったのだろうか？

そんな疑問を持ちつつ……。Aクラスの教室に……。

そこで待っていたのはAクラスメンバーと鉄人……。

西「今回も全科目を承認できる俺が立会人になる」

まあ、そうですね……。

A1「FクラスがAクラスに勝てると思っているのか？」

A2「Fクラスの分際で生意気なんだよ」

普通そう思うよな……。

真「勉強だけがすべてなのか？すべてがすべてやれて良い人なのか？」

真が強気な発言をする。

A 1「勉強ができるほうが良いだろ！」
A 3「バカが何言っても同じなんだよ」

俺「それは・・・」

『言いすぎだろ』つと言おうとしたのを真にとめられる。

真「俺は知っている。勉強ができなくてもやれることがある。やろうと思うことがある。できやしないからってあきらめる考えより。俺は、できなくてもやってみるって考えの法の

が良いとおもっただがな」

A 4「ただの無謀なバカだろ」

A「ハハハ」

真を笑うAクラス・・・。

西「早速一騎討ちを始める。ルールは5回勝負ではじめは総合科目、2回と3回戦はAクラスが科目を決め、4回と5回はFクラスが決める。両者それでいいな？」

真「ああ」

恋「はい」

代表がルールの確認をする。

西「一番手前へ！」

鉄人がそういうと2人が前にでた・・・。

Fクラスからは黎。Aクラスからは恋歌……!?

俺「いきなり代表かよ!」

思わず言ってしまう。

真「まあ、2年の中でもっとも総合科目が高いからな……」

黎「そ、そんなバカな……ツハ!真、俺をはめやがったな!」

黎が講義をするが真は聞く耳を持たない。

恋「ねえ。黎」

黎「う……」

黎は相手を見る……。

恋「私が勝ったらさ……」

俺の勘がこう叫んでる『黎、逃げる!』と……。

恋「デートしてよ」

黎「いやだ!」

即答。

F1「くそ、うらやましい!」

F3「黎、死ね!」

同じクラスなのにこの暴言……。

恋「決定ね」

黎……。

俺はかわいいそうな黎を見た……。

黎「くそ、だったら俺が勝ったら、俺のことはあきらめる！」
恋「約束ね」

あつさり承諾……。負けることを考えていないな……。

「「サモン試獣召喚」」

黎が呼び出した召喚獣は忍者装束に小太刀の2刀流

恋歌が呼び出したのは西洋風の鎧に召喚獣と同じくらいの大きさの
刀……。

『総合 Fクラス 小坂 3900点 VS Aクラス 杉谷 4
800点』

……はあ？

おいおい……。この点数は反則じゃないか……。？大体、恋歌の
成績は最高でも4500点だったはず……。

黎「そ、そんなバカな……」

恋「また後でね」

そういうと刀で一刀両断。小太刀で防御をしたが小太刀は砕かれた。
。。。

西「勝者Aクラス。二番手前に！」

相手はA4が出てきてこっちは希乃が。。。

A4「え？小島さんじゃないのか！？」

この順番は始めに決めてある物で相手はここで美羽が出ると思っていたんだろう。。。

西「科目は？」

A4「つく。。。。英語で」

A4は考えもしない状況にあせていたのか、それとも数学が苦手なことを知らないのか英語を選んだ。

恋「あの馬鹿！？」

数学が苦手な希乃に数学で勝負しないなんて。。。

希「行きます！」

希乃はやる気満々だった。

「「^{サモン}試獣召喚」

希乃の召喚獣は黒いジャケットにリボルバーだった。

『⁴英語 Aクラス A4 314点 VS Fクラス 七瀬 45

A4「・・・」

圧倒的な力の差・・・。

希乃は即座にリボルバーを撃った。

次は美羽が出番だなっと思っっていると・・・。

放たれた弾丸は敵に当たらなかった・・・。

「「「え？」」」

その場にいたもの全員が言った。

その後も何発か撃つがあたらない・・・。

F1「Dクラス戦みたいに決めてくれよ！」

A4はこの間に装備の槍で攻撃をする。

『³英語 Aクラス A4 314点 VS Fクラス 七瀬 40

希乃の点数が削られる・・・。

希「負けられないのに・・・。何で・・・。」

希乃は何度も撃つがすべて外れる・・・。

希「負けられないのに！」

多分責任や緊張から狙いが定まらないのだろう・・・。

俺「大丈夫、お前ならやれる」

俺は希乃にそういった。

希乃はそれが聞こえたのか落ち着いた・・・。

撃ちつづけるのをやめた。

敵が近づいてくる。槍が突進してくる・・・。

槍が届く少し前に希乃は大きくジャンプした。

希乃は向かってくる相手の頭上に飛んだ。

希「乱射」

そつつぶやくと腕輪が反応をする。

空中でリボルバーがもう一丁現れ左手で持ち2丁拳銃で頭上から相手を撃つ。

何発かは外れたが近いのでほとんどの弾があたった。

『英語 Fクラス 七瀬 250点』

点数の消費が大きい俺たちが1勝した。

Aクラス戦（後編） 番犬の役目

西「勝者Fクラス。次！」

これで1：1……。後2回勝ったほうが勝ち。

そして、次の対戦者が出る。

こちらからは美羽があいてからは……。

太「川口 太策たいさくだよろしく」

聞いたことのある名前だ……。

美「行ってくるね」

美羽が元気に行った。

一回は勝った……。これでは4回と5回戦を勝利すれば……。

西「科目は？」

鉄人がAクラスに聞く。

太「じゃ、保健体育で」

保健体育か……。美羽の苦手科目ではないな……。

「「試獣サモン召喚」」

川口がだしたのは制服に弓を装備して……。あれ？小型カメラを首にかけてる……。

『保健体育 Fクラス 小島 271点 VS Aクラス 川口
676点』

さすがAクラスだ……。

美「ちよつとこの差はひどくない？」

太「嵐」

太策がそう言うと腕輪が反応をする。

召喚獣が矢を連続で撃つと矢が竜巻のように飛ぶ。

F1「何だよあれ！」

まるで矢でできた台風……。

俺「おいおい……。マジかよ……。」

矢でできた台風は美羽の召喚獣に向かって進んでいく。

美「つく」

美羽は必死に逃げるが台風は追ってくる。

逃げ切れずに美羽が台風に当たると10点が連続して削られていき

0点になった。

F2「何だよ。あの強さ」

真「やっぱ、Aクラスは強いな」

苑「あいつに保健体育でこの学校で勝てる奴はいない・・・」

中井が何か知ってる見たいだ・・・。

俺「中井、あいつをしってるのか？」

苑「あいつは・・・。寡黙ムツウツなる性識者だ・・・」

聞いたことがある。やたらと保健体育が得意で女子の隠し撮りの写真を裏で販売してるとか・・・。

真「良く知ってたな。俺も名前しか知らなかったぞ」

苑「なぜなら・・・。中学の知り合いであいつの商品を俺がたまたま売ってるからな」

・・・。

F1「俺に安く売ってくれ！」

F2「いや、俺に！」

F3「会長、お願いします！」

あゝ、馬鹿が入るぞ・・・。

雑談をしてると

西「4番手を出せFクラス！」

鉄人に怒鳴られた。

俺「わかりましたよ……」

俺がそう言つと……。

真が立ち上がり前にでた……。

A1「……。マジスカ……」

どうやら、真が4番手というのは考えてないようだ。

真「無謀だろ？最後に残ってるのは実力がFクラスの奴らだ」

恋「後1回勝てば勝利なのよ。がんばりなさい」

恋歌はA1に言った。なぜか恋歌の隣には黎が手足をロープで縛られていたことを気にする奴はいなかった……。

黎「……。成仏しろよ……」

黎「愁！助けて『バチ！』……」

俺に助けを求めたようだが恋歌がスタンガンで黙らせた……。

黎「……、ごめん俺には行く勇気が無いよ……」

西「科目は？」

鉄人はその様子を見ていたが黎だから良いかと思いい試合を進める。

真「歴史だ」

得意科目である歴史を選ぶ……。

「「サモン試獣召喚」」

『歴史 Fクラス 上田 397点 VS Aクラス A1 34
0点』

現れた瞬間、真は大剣を振り攻めかかる。

相手はそれを大剣でガードする。

大剣同士の戦い……。

真「ここで俺が勝てばFクラスの勝利なんだよ！邪魔するな！」

すごい、自己中心的な発言……。

俺「まあ、俺に回ったら数学で絶対に勝てるからな」

まず、俺に数学で勝てる奴はいないだろう……。

A1「最上級クラスが……。最低クラスに負けるか！」

相手も必死だ。

真「最低だからって簡単に見て一騎討ちを受けるなんてな！最強なのはクラスであって個人の1つ1つの科目が最強じゃないんだよ！」

Aクラスは最強のクラスであっても、こっちの得意科目で攻めれば、勝てる！

A1「くそおお！」

相手が大剣を縦に振り下ろした。

真「今こそが！革命の時なんだよ！」

相手の大剣を避けて、真が大剣を横に振る。

A1「うわああ！」

相手を一刀両断……。

『歴史 Fクラス 上田 397点』

西「勝者、Fクラス！」

これで2：2で最後の勝負に

西「5人目、前へ！」

俺「待ってました！」

鈴「はい」

俺と鈴香が前にでた。

俺「もちろんながら、数学で」

鉄人に科目を言う。

鈴「数学しか能が無いの？」

鈴香が何か言い出した。

俺「何が言いたい？」

鈴「数学以外じゃ勝負できない臆病者だなんてね。ケロベロスの名が泣くんじゃないの？」

挑発か……。

俺「そうか、そうか……」

俺は録音機（再生可）を取り出して音量を最大にする。

西「天城、俺の前でそんなものを出すなんてな！」

録音機を没収されそうになるが、それより早く再生ボタンを押す。

『俺はDクラスの幸作（ ）が好きなんだ』

大音量でそんな言葉が出た。

そう、これはCクラスで取らせた根本の声。

鈴「……」

俺「やー、ホモの奴と付き合っていて泣き出したくないか？」

そう言っただけだ。

A2「まさか、今のって……。鈴香さんの幼馴染の根本……」

A3「まさか……。最近付き合ってるって聞いてるけど……」

A4「鈴香さん振られたの？」

A5「いや、もしかしてそのことも受け入れているのか……」

この録音を聞いてあたりから嫌な目線や話し声が聞こえる。

鈴「こ、こんなの、あんなたちが無理やり言わせたんじゃない！」

さすがだな、すぐにはれるとは……。

真「うわー……。こんな録音を突きつけられて、彼氏を守るってことはもしかして、それすらも受け入れて……」

真がフォローをする。

その間に録音機は没収された。まあ、録音は、バックアップがあるからいいけどな……。

鈴「あ、あんだ達に人としての人情はないの!？」

俺「悪いな、俺は負けられないんだよ。クラスのため……。まあ、そろそろ、始めるか……」

鈴「この人でなし！」

「「サモン試獣召喚」」

『数学 Fクラス 天城 864点 VS Aクラス 鈴香 37点』

A1「あれが……。最低クラスの点数か？」

相手の召喚獣が出た瞬間に俺が敵を切り裂いた。

この点数の召喚獣の移動速度はすごく早く敵の召喚獣がどんなものかもわからずに勝負が終わった……。

Aクラス戦（後編） 番犬の役目（後書き）

Aクラス戦まで終了。後はBクラスを残すのみ！

友を失っても次に進む

俺「俺たちが、勝者だ！」

西「3対2でFクラスの勝利！」

鉄人が勝利したクラスを言う。

A1「そんな……。Aクラスが負けた……。？」

A2「バカの集まりに少し偉い奴が入っただけのクラスなのに……」

真「バカを甘く見るなよ優等生」

真が言った。

真「油断をしているから足元をすくわれるんだよ」

A「……」

真「俺がAクラスならどんなことがあっても一騎討ちは受けなかった。勝つ可能性が100%じゃないからな」

恋「……」

確かに団体で戦ったら可能性は0だろう……。

黎「……」

黎が気がついたようだ。

黎「勝ったのか？」

真「負けたぞ」

なぜか真が嘘をついた……。

黎「殺してくれ！」

恋歌と一緒にクラスがそんなに嫌か……。

希「勝ちましたけど……」

黎「真、後で殺す」

今殺したいんだろうが……。動けないんだろうな……。

未だに黎の手足を固定するロープは解けていない……。

真「さて、負け組への交渉はまた今度にするか」

そう言っつて真は出て行った。

俺「じゃ、黎死ぬなよ」

Fクラスの全員が出て行った。もちろん、黎はAクラスに残った。

黎「ちょ、冗談だよな……。？帰ってきてくれるよな。愁……。見捨てないよな……。小学からの付き合いだもんな……」

後ろから何か聞こえたけど気のせいだな・・・。

Fクラスに戻るとそれは大変だった・・・。

F1「Aクラスに勝った！」

F2「Aクラスと設備交換してもいいんじゃないか？」

まあ、クラスメイトがうるさい。

真「さあ、次はBクラスを沈めて終わりにしよう！」

F「「「おおー！」」」

俺「あー、次はBクラスか・・・」

希「愁君」

次のことを面倒に思っていると隣から声をかけられる。

俺「どうかしたか？」

希「Aクラス戦お疲れ様です」

俺「ああ、お疲れさん」

希「何とか勝てましたね」

俺「ああ、問題は次けどな・・・」

希「Bクラスですか？」

俺「多分だが・・・そろそろだ・・・」

そう話しているとドアが開いた。

亮「Bクラス代表の^{おおの}大木^{じやう}亮^{りやう}です。試験召喚戦争を申し込みに来ました。」

そう・・・。これからが問題なのだ・・・。

友を失っても次に進む（後書き）

（お知らせ）

皆さんいつもありがとうございます。神滅です。

今回のお知らせは、リクエストを聴きたいと思って書いてます。

何のリクエストかというところ……。

『話』です。たとえば、こんな話を読みたい。書いてほしいって物があればいつてください。

例：『愁と希乃のデートの話が良いです』

など……。じゃんじゃん受け付けます。受付終了はまた知らせます。

（追記：キャラクター設定の方も受け付けてます）

「すべては俺の手の中で！」

亮「Bクラス代表の大木亮です。試験召喚戦争を申し込みに来ました」

そう、最強のクラスをつぶしても、予備軍がまだいるのだ……。

真「やっぱり、来たか……」

F1「おい……」

F2「やばくないか？」

F3「やばい……」

さすがのバカも状況がわかっていようだ……。

F「……マジでかわいい！」「」

前言撤回する！

まあ、確かに綺麗な奴だが……。男子だぞ……。

昔、話題になった。大木 亮。男子なのに女子より綺麗で男子を魅かしてホモが多くなったとか聞いた事ある……。

亮「やっぱり、解っていましたか、断ることはできないのは学園のルールです」

そう、試験召喚戦争をされたクラスは絶対に受けなければならない……。

俺「真、この状況やばいだろ。明日の朝の戦争は戦力的に無理があるぞ……」

真「クツクツク」

真が変に笑う。

亮「何がおかしいのかな？」

真「予想道理にことが運びすぎて面白くてな」

「「「!?!?!」」」

その場にいた真以外が驚いた。

真「残念ながら、学園ルールとして試験召喚戦争の先約がある場合。その後じゃないと試験召喚戦争をすることができない」

確かにルールはある。だが、どこにも宣戦布告はされていない。

亮「へー、宣戦布告をされてたんですか？」

真「ああ、Dクラスから受けている」

!

亮「解りました。それなら、その次の日の放課後にやりましょう」

真「解った。Dクラスは明日だからお前らは明後日からだ」

亮「それでは、また、今度ね」

そうして、Bクラスの代表は帰っていった。

F4「ああ、帰ってしまった」

F5「め、女神様が・・・」

おい、あいつは男だぞ・・・。

希「綺麗な人でしたね・・・」

暗い顔で大木が出た扉を見つめる希乃。

俺「といつても、男は男だろ・・・」

希「ですよね・・・」

こいつは何を気にしてるのやら・・・。

希「でも、愁君が男好きに・・・」

希乃が何か言っているが良く聞こえなかった。でも、聞こえないのが幸せな気がした。

俺「とりあえず、いつだ？Dクラスが宣戦布告したのは」

俺は真に疑問をぶつける。

真「Aクラスとの戦いが決まった時に帰る前にDクラスに宣戦布告

をしてもらった。もちろん、戦わずに点数を補充して終わらせる」
なるほど、点数の消化しているメインメンバーを回復させるためか・
。。。

真「お前は良いが、他のメンバーは悲惨だからな、特に黎はな」

黎は総合科目で0にされたのですべての点数が0になっている・・・

俺「まあ、ガンバ・・・」

真「さて、明日は点数補充だけだ！明後日のBクラスも俺たちが勝つぞ！」

F「。。。おおー」

こうして、今日は帰った。

翌日、Dクラスとの試験召喚戦争で点数を補充した。

ただし、黎がその日、学校に来なかった・・・。

真、俺「。あの、バカ野郎！」

「すべては俺の手の中で！」（後書き）

次回、Bクラス戦。やっと……。試験召喚戦争の話が終わりに近づいていった……。

リクエスト、待ってます。

理性を失った番犬と悩む死神

問題

以下の漢字をひらがなにしなさい。

? 銀杏 ? 西瓜 ? 鉄人

上田

? ぎんなん ? すいか ? てつじん

先生

『大正解です』

七瀬

? ぎんなん ? にしうり ? てつじん

先生

『すいか、がわかりませんでしたか・・・』

天城

? ぎんあん ? にしうり ? にしむらせんせい

先生

『すべて間違っているうえに、?をそんなことを書くんですか・・・
。まあ先生がついてるのが以外でしたね』

Bクラスとの試験召喚戦争、当日

俺たちには問題がいくつもあった。

真「とりあえずだ……」

教壇に立っている真が言う。

真「何で、黎は昨日来なかった？」

黎「一日中寝てました……」

何でもAクラス戦の後に強制的にデートに連れ出されて、苦勞したらしい……。

黎はすべての点数が0点なので始まってすぐに回復試験を受けるしかない。

真「後、誰か希乃が休むとか聞いてないのか？」

そして、希乃がきていないのだ……。

誰もそんな連絡をもらっていない……。

美「何かあったのかな……」

そんなことはあってほしくない……。

真「もうすぐ、Bクラス戦だって言うのに……」

後30分程度でBクラス戦が始まる。

黎「この状況、相当やばいのか？」

真「ああ、お前が点数があれば防御に徹底するがBクラスに対抗できる戦力は俺と美羽と数学だけ愁だ」

鉄人の指導で他の教科もましになっていたがそれも一時的なものだった……。

『プルルルル』

その時、真の携帯が鳴った。

真「誰だよ！こんな時に」

校内だが授業中以外なら使ってもOKなのだ。

真「もしもし」

それにしても希乃が何も連絡をしないなんて……。

真「誰だお前」

真の会話がおかしい……。

俺「どうしたんだ？」

真が静かにしろつと合図する。

真「何が目的だ？」

あせる真。電話の相手は誰なんだ？

真「解った伝えよう」

そう言っつて電話を切った。

俺「誰からの電話だったんだ？」

真「本当にやばい、希乃の電話からだった」

美「事故でもあったの!？」

真「事故よりたちが悪いぞ・・・」

俺「どういうことだ？」

真「希乃が誰かに捕まった。そして、愁が一人で指定する場所に来て
いってことだ」

俺「!？」

真「俺たちに恨みがある奴って考えたら大体わかるが・・・。はっ
きりいってこれは罠だな」

希乃が誰かに捕まった? そんな・・・。そんなことが!？

俺「どこだ」

真「行くのか？」

俺「どこかって聞いてんだよ。教える」

もう、冷静になれない……。

真「ここから30分くらい歩いたところにある、ボロボロのビルだ」

それを聞いて俺は教室のドアから猛ダッシュで出て行った。

真 side

俺の話を聞いて愁がダッシュで出て行った。

黎「本当なのか？」

うるさい奴が聞いてきた。

真「今、嘘をつくような余裕は無い。あいつが行った以上防衛で何とかしのぐしかないぞ……」

あいつはもう止めれない。何とかしてくれることを信じて俺たちがクラスを守るしかないのか……。

それにしても、こんなことをするのはやっぱり奴か……？それともBクラスの誰かがやったのか？

犯人を考えながら目の前の勝負のことも考えていく。

5・000アクセス記念 面白い日常への誘い (前書き)

5・000ユニークアクセス記念です。

3・000ユニークアクセスの後半なので内容を覚えていない方は
もう一度どうぞ。。。

5・000アクセス記念 面白い日常への誘い

あれから一週間後……。

〈放課後〉

黎「ちよっと、面かせ」

そう、この言葉で退屈な日常からバカと一緒に日常が始まるのだ
た……。

真「解ったよ」

俺はおとなしくついていった。

階段を上がり、屋上に向う。

屋上で待っていたのは愁だった。

愁「わざわざ来てもらって、ども」

そんなことを言い出した。

真「何なんですか？俺は暇じゃないんだけどね」

黎「お前、「死神」って呼ばれていたんだな？」

驚いた。そのことを知ってる奴がまだ、いたことに……。俺は中
学の時、改造エアガンをもって友達が喧嘩をしてるのを止めたこと

がある。

その時に相手を容赦なく撃ち、「魂（やる気）を取る死神」と言われたことが一時期あった。

真「そんなこと知りませんねー。大体、そいつを見つけてどうするんだ？」

愁「喧嘩するだけだ」

回答はシンプルだった。

真「くだらないな」

愁「ああ、くだらないさ。力を試すだけのために相手を殴るなんてな」

真「だったら、やめろよ」

黎「強くならなないと、守れないものがあるんだよ」

守れない？何を言ってるんだこいつは……。

その時、思いついたのが一週間前の喧嘩の後、女の子が心配そうに見てるあの時……。

愁「くだらないと思うなら断ればいい。俺は強制しない」

俺は迷った……。この状況で賭けに持ち込んで、美羽に紹介または絶交してくれればチャンスが……。

黎「どうなんだ？」

真「良いけど、賭けをしよう。俺が勝ったら、いつも迎えに来てるあの子を紹介しろ」

言ってる自分も恥ずかしいが……。俺の青春はこの時しかないのだ……。

黎「な!？」

愁「なるほど……」

二人が考え出す。

愁「良いけど、2人に勝ったらでいいか？」

真「同時にやらないのか？」

黎「1：1でやって行く。それでいいか？」

まあ、良いだろ……。

真「良いよ。じゃ、次の休みでな」

そう言って、俺は出て行った。

〈喧嘩当日〉

愁「逃げなかったな」

俺は前に喧嘩を見た場所に行った。ここが集合場所だった。

俺は大きなかばんを1つ背負って、小さいかばんを腰につけてる。

真「当たり前だ。さっさとやろうじゃないか」

俺は大きいかばんからエアガンを取り出す。

黎「エアガンか・・・」

愁「解った。やろうか」

そう言っつて、愁が戦闘態勢にはいる。

真「そういえばこれつける」

そう言っつて安全ゴーグルを愁に投げる。

愁「ん？」

真「目に入るとこっちも困るからな」

愁「じゃ、使わせてもらうか」

そう言っつてゴーグルをつける。

真「行くぞ」

俺がそういった時には愁は飛び出してた。

いきなり、近距離に来る愁。

俺はエアガンで相手を殴った。

愁「!？」

エアガンで殴るっということは予想されていなかったのか、あわててバックステップを取り避ける。

その動作を見て俺は殴るために振ったエアガンを構えて、愁の右足を狙う。

撃つと弾が右足に当たる。

愁「つつ・・・」

少しいたそんな素振りを見せたが倒れたりはしていない。

愁はあわてて上着を脱いだ。

暑いから脱いだのだと思い。俺はエアガンを止める。

黎「同情はするべきじゃないぞ」

近くで黎が言った。

愁は上着を脱いでTシャツ姿になる。

真「何がしたいのか知らないがやるぞ」

俺がエアガンを構えて撃つと脱いだ上着を盾にして攻撃を防いだ。
なるほど、拳銃じゃないから貫通はしないからか……。
服を盾にして突っ込んでくる。

俺はそれを避けて横から撃とうと狙いを定めると……。

『バチン』

俺の手に何か当たりエアガンがはじき落とされた。

真「!？」

愁は脱いだ服を鞭のように使っていた。

俺は背中に手を回して、次のエアガンを取り出す。

取り出して構えてると……。

愁が思いっきり殴った……。

奴のパンチは速くて、重い……。3発も食らうと立てなくなるだ
ろう……。

真「ぐ……。」

俺は殴られた勢いで倒れこみ背中からエアガンが全部落ちた。

真「つち……」

俺は立ち上がり愁の位置を確認する。

奴は動いていなかった。狙いをさだめて……。

全弾撃つ。

起き上がった事に気づき、俺の方に進む。弾丸が当たっているのに止まらない。

空になったので小さいかばんから弾を装填する。

この時、判断をミスっていた。まずは、愁の位置を確認してから装填するべきだった。

腹をおもいつきり蹴られた。

真「ぐはああ！」

変な声を出しながら飛ばされる。その時、エアガンを手放していた。

愁「はあ、はあ。これでどうだ……」

愁も弾をあたりすぎで疲れてる。

真「まだだ……。まだ、負けねえ」

立ち上がるうとすると……。

不1「ケロベロスが喧嘩してる!？」

一人の不良の声がした。

不2「あいつ、疲れてるぞ……」

不3「相手も名がありそうじゃないか。ここでつぶせば名が上がる!」

不良のグループがやってきた……。

真、愁「はあ……。はあ……」

二人とも疲れてる……。不良は15人程度の集まり……。

一人じゃ勝てないな……。

黎「糞……。こんな時に……」

愁「黎、手出すな!」

愁が言った……。

真「!？」

相手をしろとか言うと思っていたら、まったく反対の意味だった。

愁「これは俺の喧嘩だ」

黎「……」

そう聞くと、黎はダッシュで逃げた……。

真「最低な奴だな……」

愁「俺の喧嘩なんだよ。邪魔されたくない」

不4「片方だけでもつぶせば名が上がるだろ！」

15名程度の不良が襲い掛かってきた……。

俺は避けようとするが……。避けれない……。

愁は一人一人を殴っていくが威力が低そうだ……。

俺は愁の後ろに隠れるように逃げた。

真「どうするんだよ？」

愁「あー、協力でもするか？」

状況を言うとそれしかない……。だが……。

愁「まあ、ボロボロになってまで美羽にあっても好印象にならないとおもっぞ」

真「!?!？」

こいつ……。解つてて……？

真「良いよ。後ろは任せた。後、エアガン1つ俺に渡してくれ」

愁「了解」

愁の行動は迅速だった。不良を蹴散らして近くにあるエアガンのところに行き、エアガンを俺に向って蹴った。

真「壊れるだろうが！」

そう言いながら受け取って近くにいる奴をエアガンで殴る。

不2「うわー」

その後に当てやすい奴の足を狙って撃ちまくる。壊れは無く普通
に撃てた……。

愁「やっぱり、強いな」

愁「お前もな」

それから5分間戦い続けた。

愁「何とか終わったな」

真「さて……」

俺はエアガンを愁に向ける。

愁「降参だ」

その時、愁がそんなことを言った。

愁「持久戦になって俺はバテバテだ。これ以上やっても無駄だ。今度、美羽を紹介するよ」

真「な……。お前、どういづつもりだ？」

解らない。くだらない事をやっていたこいつがいきなりやめるなんて……。

愁「くだらない事をやるのも飽きてきた。力はつけても上には上がいるんだから、もういいや……」

なんて、適当な奴なんだろう……。

真「く……」

なんだか、こいつを見ると……。

真「クハハハハハ」

面白かった。

それから、こいつらと一緒に行動することになった。くだらないこととはやめたこいつらと俺。面白いトリオじゃないか。

（現在）

ベットから起き上がって今まで見ていた夢のことを考える。

真「懐かしい夢だ。今日も面白い日常が続くだろう」

これから俺の日常は続く。

5・000アクセス記念 面白い日常への誘い (後書き)

これからもよろしく願いします。

化け物・・・

俺は走り続けた・・・。

「はぁ・・・。はぁ・・・。」

20分間走り続けて到着した・・・。

何時、取り壊しがおこなわれるかわからないビル。

ドアを蹴り開けて中に入る。

？「お前が天城か？」

中に入ると奥の方から声がした。

俺「ああ、そうだ」

奥の方に進むと・・・。

？「悪いがここでくたばってもらう」

鉄パイプやナイフや金属バットを持った連中が希乃の周りを囲んでいた。

希「愁君・・・。来ちゃだめ・・・。」

希乃はいつもより弱弱しい声で言った。

ク「お前の彼女が知らないがよ。こいつを捕まえれば来るって聞いたんだよ」

そう言つて俺と希乃の間に立つてた奴は避けた。

希乃の姿は……。いつも着ている。制服がボロボロに破られていた。顔や手足に殴られや蹴られた痕があつた……。

俺「……………」

ク「フフフ。怖くなって、何もいえなくなつたか」

横から金属バットで頭を殴られる。

俺「……………」

ク「何だ。こいつ、びくともしないぞ」

頭から、赤い液体が流れていく。

……。だが、それがどうした？

俺「クズども……。希乃に何した？」

ク「何、ちょっと遊んでもらっただけさ」

さっきの奴がもう一度、殴ってくる。

俺はバットを避けて、バットを持つてる奴の顔面に俺の拳をぶち込む。

俺「覚悟しろよ。俺は手加減をしない」

真 side

真「もう、すぐ開戦だ。はっきり言って黎が復活するまではずっと
防御するぞ」

「勝てるのかよ、そんなので！」「そうだ、天城も七瀬さんもいな
いのに勝てるはずがない」「もうだめなんだ！」

弱音をはく奴しかないのか？

俺は、教壇を思いつきりたたいた。

真「馬鹿ども、良く聞きやがれ！勝てる勝てないで言つとな！俺た
ちが勝てないんだよ。今のままじゃ」

「終わりだ……」「俺たちがここまでやれたことがおかしいんだ
！」「くそ……」

真「勝機はあるんだ！黎が復活しだい反撃をしてぶっ潰す。それに、
愁や希乃が帰ってくかもしれないんだ！俺たちで守るぞ！このクラ
スを！」

「そうだ……。まだ終わってないんだ」「やってやる……」「
俺たちの意地を見せるぞ！」

そして、無謀な戦争が始まる。

真「全員、扉の近くに固まれ！多数対1で戦うんだ！美羽は危なくなったらどちらかの補助を」

俺は必死に指示を出しながら戦う。友が帰ってくると信じて……。

愁 side

その頃俺は……。

俺「ゲホゲホ……」

一方的に殴られていた。

5人ほど殴り倒したら、体力が尽きて敵に捕まり殴られ続けている……。

希「もうやめて！」

泣き叫ぶ希乃……。

ク「うるせえな」

良く見れば……。手足を縛られてるのか……。

ク「脱衣ショーの始まりとでもするか」

クズの一人が殴ることをやめて希乃に近づく。

希「やめて……。こないで……。」

逃げたくても逃げれない希乃……。

俺「やめろよ……。関係ないだ……」

ク「黙れ」

近くに入た奴が俺の腹部を思いつきり蹴った。俺は少しむせる。

希「キヤー！」

悲鳴を上げてる希乃の上半身は下着姿だった……。

ク「良い女じゃないか」

この時……。俺の中の何かが切れた。

俺「やめろって……。言ってるだろ！」

俺の腕をつかんでた奴は驚いて手を緩めた。その瞬間に俺は振りほどきつかんでいた奴を殴った。

残り……。3人。

ク「食らえ」

ナイフを持って俺を切りかかる。

俺はそれを左手で受け止めた。

俺の手から赤き液体が流れ落ちていくが俺は気にせず右足で相手を

蹴った後右手でとどめをさした。

ク「う、うわあああ」

怖くなったのか一人は逃げた。

そして、もう一人は・・・。

ク「動くなよ。動いたらこの女がどうなるか・・・」

希乃を人質にしていた。

番犬は門の前に行く

希乃が人質になり動けない。

ク「動くなよ……動くなよ」

そんなことを言いながら近づいてくる。

希「愁君……。逃げて……」

俺は動かずにクズの顔をにらみつける。

クズは俺の目の前まで来て俺の右足を思いっきり蹴った。

俺は痛みで倒れた……。

ク「ほら、彼女を守ってみろよ」

俺は立ち上がる……。

ク「ほう……。頑丈だな」

痛みがあっても他の感情の方が強く出てくる。

ク「ほら、動くなよ!!」

持っていた鉄パイプで殴りかかった。

俺は避けもせず。足を狙ってくるそれを受けた。

今度は倒れずに立っている。

ク「いつまで耐えられるかな！」

そう言っただけを狙いを足から頭に変えた。

その時、奴はいくつかの失敗した。

1つ目は片手で攻撃して片手で希乃をつかんでいた事。2つ目は近すぎる事。3つ目は俺が反撃できるということを考えていなかったこと……。

俺は頭を狙ってくる鉄パイプを手でつかみ血で真っ赤になっている左手で奴の顔面を殴った。

俺「はぁ……。戦うなら100%の勝率の方に進めクズ」

殴られたクズはよろけた後に倒れて動けなくなった。

俺「希乃、大丈夫か？」

俺は希乃を見ないようにして自分の制服の上着を脱ぐ。

希「あ……。大丈夫です。愁君の方こそ大丈夫？」

俺「ああ、慣れてるから大丈夫だ。後、俺の上着でも着ろ」

そのままの体勢で希乃に上着を渡す。

希「ありがとう……」

少し、静かな時が過ぎる……。

希「あの……」

俺「どうした？」

希「手も本当に大丈夫なの？」

血で真っ赤に染まってる手を指差して言った。

俺「ああ……。大丈夫だ」

俺は少し考えて……。

俺「希乃……。一人で家に帰れるか？」

希「大丈夫だけど……」

俺「学校で何か言われても適当に言っておいてくれ」

俺はそう言っ出口を目指した。

希「愁君は……？」

俺「他にも俺を待ってる馬鹿がいるんだよ。だから、行ってやらな
いとイケない」

学校では、別の戦争がある。

俺が行かないと・・・。

そう、考えて一歩ずつ踏み出す

終わりだ・・・

真 side

真「黎のテストは後何分で終わる？」

F1「後15分だったような・・・」

後15分間守りに徹して、その後は黎と俺と美羽で敵の本陣を目指せば何とかなるか・・・。

俺たちは扉周りに固まって守り重視の戦いをしていた。

美「こっちに英語の援軍を！」

隣の扉で援軍を求める美羽。

真「誰か、英語がある奴5人ほど行け！そして、そっちから5人ほどこっちに来い！」

俺は指示を出しながら次の一手を考える。

そういえば、愁と希乃の方はどうなってんだ・・・。

『ブーブー』

俺のポケットの中の携帯が鳴った。

真「もしもし、どちら様？」

俺はとりあえず携帯を取った。試験召喚戦争中のみは情報のやり取りっとして去年から短時間なら携帯を使っても良いようになった。

希『希乃です』

真「おお、大丈夫だったか」

希『はい、愁君が助けてくれました・・・』

向こうは何とかなったか・・・。

真「じゃ、何か理由をつけて家に帰って休め。疲れてるだろうし」

希『あ、解りました・・・。あの・・・。愁君そっちに行きました？』

愁はこっちに向ってるのか？

真「いや、まだ来てないな・・・」

希『愁君は私の為に怪我をして・・・』

どんだん声が弱くなっていく・・・。

真「解った。何か様子が変わったら安静にさせるから心配するな」

希『よろしくお願いします・・・』

もしかして・・・。

真「辛いのか、悲しいのかどうなのか知らないけどよ……。泣くなよ。あいつはお前の為にがんばったんだ。お前が笑ってないとあいつは救われないぞ」

希『……。はい』

やっぱり、元気のように見せてただけか……。

真「まあ、こつちのことは心配するな！」

俺はできるだけ元気に言った。

そして、電話を切った。そして、俺は

真「誰か、ロープか鎖あるか？」

とんでもないことを言った。

F1「これでいいか？」

つと、クラスメイトの一人が出した。

恐ろしいな……。FFF団の奴らは……。

真「何のために持つてるのかは知らんが悪用するなよ……」

そんなことをしてると……。

B1「番犬だ！」

B 2「数学のフィールドがある・・・」
B 3「に、逃げる！」

廊下が騒がしくなってきた。愁が戻ってきたのか？

真 side END

愁 side

俺は30分間走り続けて学校に着いた。

そして、今はクズの一人が使っていた皮手袋をつけている。

教室の前にはBクラスの人が大勢いた。

愁「Fクラス 天城がここにいるBクラスに数学勝負を挑む。試獣
モン 召喚」

『数学 Fクラス 天城 864点 VS Bクラス 5人 平均
180点』

B 1「番犬だ！」

B 2「数学のフィールドがある・・・」

B 3「に、逃げる！」

俺「もう、遅い！」

俺の召喚獣が5人を倒す。

F 1「愁が戻ってきた！」

F2「つえー！」

F3「番犬が守ってくれた！」

真「おお！戻ってきたか！」

俺「戦況は？」

出てきた親友に戦況を聞くが・・・。

真「もう、良いよ。お疲れさま〜！」

そう言っつて、俺を殴り。近くにいた奴が俺をロープと鎖で縛った・・・。

つて、何で鎖があるんだよ！？

俺「なにすんだよ！」

俺は縛られながら言った。

真「お前の役目は終わりだ」

親友から冷たい言葉が告げられた。

終わりだ・・・(後書き)

そういえば最近・・・。問題が出てないな・・・。

お前は、一人じゃないんだ

俺「おい、何のまねだ！」

俺は真に向って叫んだ。

真「約束したんだよ。希乃と」

どういうことだ？

俺「何なんだよ！」

真「希乃はお前に無理をさせないようについて言っていた。だから、お前を安静にさせる必要があるんだよ。まあ、言っても聞かないのがお前だから殴って黙らしたけどな」

まさか、手袋の下のことを……。

俺「無理なんてしてねーよ！」

そついったが……。

真「手袋の下だろ？」

手袋していたら怪しまれるだろうっと思っていたが……。

手袋をはずされて傷口が出る。

F1「な……」

F2「え・・・」

真「こりゃ、ひでーな・・・」

美「どうしたの・・・。こんな傷・・・」

クラス全体が俺の傷を見て驚いていた。

俺「つち・・・」

side END

真 side

俺は見て驚いた。手袋をしてる時点で怪我を負ったんだろうなっと思っただがここまでひどいとは・・・。

真「お前は良くやった。希乃を守るために良くやったよ。だから、今は休め」

俺は苦勞人の親友に言葉をかけた。

愁「お前、いつからわかってた？希乃から電話があったんだろう？その時に聞いたのか？」

疑問を聞いて来る。

真「まず、出会った時に手袋をしてた時気づいたな。これはおかしいって。希乃から電話があったがお前の状態は聞いてない。まあ、そんなとこだから保健室でゆっくり休め。誰か、こいつを連れて行

つてくれ。一人だったらBクラスに突っ込んで行くかも知れないからな」

そう言うと、2人ほどが愁を連れて行った。

真「連れて行ったら、すぐ戻って来いよ」

そう言うておいた。

連れて行く際に俺の横を通った時に俺は愁の胸に手を当てていった。

真「お前はこの戦争で良く活躍したよ……」

そう言うて手を愁の胸から離すつと同時にもう、片方の手の中の紙を愁のポケットに入れる。

愁はそのことには気づいてない。

真「そういえば……。何で長袖の制服なんだ？もう、暑いだろ？」

確か、朝は半袖だったはず……。

愁「ああ、ちよつと、いろいろあつて着替えた」

家によつてたのにこんなに早くこれたのかよ……。確かに、こいつの家はビルのあつた方向だが……。

真「まあ、お疲れ様。今度、きかいがあれば、また頼む」

そう言うて愁は教室を出て行った。

美「ねえ」

今まで話をしなかった美羽が話しかけてきた。

真「ん？」

美「さっきの紙なんなの？」

真「ああ、ちよつとな・・・」

つと、言っていると黎が帰ってきた。

黎「1教科だけが終わらせてきたぞ」

真「よし、これからが反撃だ！行くぞ！」

「「「オオオー」「」」

これからが俺たちの戦いだ。

英雄は助けを求めた時に来るもんだろ？（前書き）

今回は黎sideで進みます。

英雄は助けを求めた時に来るもんだろ？

真「さあ、行くぞ！」

俺たちFクラスは全員でBクラスに特攻する。

黎「でも、俺は数学以外を挑まれたら終わりだぞ……」

数学以外の強化は0点なので挑まれた時点で終わりになる。

美「挑まれそうになったら受けてあげるよ」

美羽が行った。美羽を守ってやりたいと思っただが情けない……。

真「Bクラスだ！つぶせ！」

F「……イエッサ！」「」

B1「やられてたまるか！」

「……試^{サモン}獣召喚」「」

フィールドは英語のみなので英語の勝負になる。

英語	Fクラス	15名	合計	1489点	VS	Bクラス
4名	合計	1200点				

B2「か、数が多すぎる！」

個々の強さなら相手が圧倒的に上だがこれは、戦争なんだ！

自分たちが有利になる状況で戦う……。

真の特攻は無駄に思えたが強力な力を持っていた。

真「さあ、次行くぞ！」

F「」「おおおお！」

こちらの士気は最高まで上がっていた。

美「いけそうだね」

隣で笑顔で美羽が言う。かわいい……。

黎「ああ、これなら敵本陣に着くまでも時間の問題」

そこからはBクラスの奴らを見かけなかった。

真「もしかして……」

真が何か気づいたようだ。

黎「どうした？」

真「これは、相手が俺たちの戦い方をしてるぞ……」

Bクラスの扉に着くと。扉の周りにBクラスの人が固まっていた。

真「誰も近づくな！」

大声で叫んだ。

全員が止まる。

これは、入れば個々で倒されていく……。

亮「打つ手なしかい？」

中から大木亮が顔を出した。

真「誰か、数学の先生を呼んで来い」

Fクラスの2人ほどが呼びに行った。

教師フィールドが重なっていけば勝負を挑めるが……。この状況で挑んでどうするんだ？

亮「へー、この鉄壁を打ち崩せるんだー？」

かわいい顔して嫌な奴だ。

真「完全なものはどこにも無いんだよ」

2クラスの代表がにらみ合う。

黎「どうすんだろつな……」

数学の教師を呼びに行ったが戻ってこない……。

真「黎。数学教師が着たら、相手全員に数学勝負を挑むぞ」

真が小さな声で言った。つて、ちょっと待てよ……。

黎「お前、そんなことしたら……」

うちは確実に負けるっと言おうとしたら口をふさがれた。

真「勝てるんだよ。信じろ」

俺はうなずく。

Fクラスの2人が鉄人を呼んできやがった……。

西「承認！」

まあ、悪いことしてないけど着たら驚くよな……。

真「Fクラス 真がBクラス生徒全員に数学勝負を挑む！」

言いやがった……。言ってしまいやがった……。

鉄人のフィールド内のBクラスの召喚獣がどんどん強制召喚されていく。

B3「……な！そんなことして勝てると思ってるのか!？」

B4「もう、やっちまえ！」

Bクラスの奴らが真を襲う。

黎「俺たちも戦うぞ！試獣召喚」^{サモン}

F「」「試獣召喚」^{サモン}」「

『数学 Fクラス 上田 小坂 小島 その他15名 374点
410点 220点 平均90点VS Bクラス 大木 その他2
1名 250点 平均235点』

あまりにも戦力が違う。

俺と美羽が小太刀で一人を一撃でつぶす。

真は後ろで構える。

他の奴らはどんどんやられていく。

亮「自棄にでもなりましたか？」

愁が入ればまずこんなことになってないだろう……。

亮はBクラスの教室に一人だけ残っている。

真「馬鹿だな」

亮「え？」

亮は驚いた。

そう、目の前に奴がいたからだ。

そう、愁がいたのだ。

左手に包帯を巻いて。額にはシップをはって。

愁「チェックメイトだ試獣^{サモン}召喚！」

愁の召喚獣が現れる。

亮「いつの間に入ったか知らないけど……」

亮の召喚獣が一步下がる。

亮「俺にはまだ、仲間がいるよ？」

近衛部隊が現れた。

真「テメーが負けたら俺たちの負けだ！突き進め！」

真が後ろで叫ぶ。耳元で叫ぶなよ……。

『数学 Fクラス 天城 864点 VS Bクラス 大木 他1
0名 250点 平均260点』

合計1850点……。さすがに無理か……。

そう諦めた時。

真「そう来ると思つてたぜ！」

真がそう叫ぶと……。

大剣をふり……。

俺の召喚獣を吹っ飛ばした……。愁たちのとこまで……。

黎「ちょ！お前！」

召喚獣は愁の横に落ちた……。俺は追いかけた……。

『数学 小坂 340点』

だいぶ、点数が減つたぞ……。

愁「行くぞ！」

黎「しかたないな！」

亮「返り討ちにします！」

B「「「やあー！」「」」

その場所は本当に戦場と言われても良いだろう……。

敵をどんどん減らしていく。後ろでは真の点数が減っていつてる。

Fクラスのメンバーは俺と美羽と愁と真の4人になった。

愁「いつけー！」

B4「大将の首もらった！」

愁が亮を捕らえると同時にこちらも真の首が狙われた。

そう、その時間は長くて短い……。

決着の時。

『Fクラス 天城 上田 小坂 小島 450点 23点 114点 0点』

『Bクラス 大木 0点』

愁は大木を切り裂き。

美羽が真の盾になって。俺たちは勝利を収めた。

すべてが終わった時

俺たちの戦いは終わったのだ……。

A「Eクラスと試験召喚戦争をして全勝をした瞬間だった。」

真「美羽……」

美「これで私たちの勝利だね」

黎「勝ったのか……」

愁「俺たちは負けてない！」

亮「嘘だ……」

俺たちが勝利に喜ぶ中、一人真実を認めない者がいた。

亮「おかしいだろ……。Fクラスなんかが……。全クラスに勝つなんて……」

B1「そうだ……。これは何かの間違いだ！」

鉄人に向かって叫ぶBクラスの人。

西「勝者はFクラス。これが結果だ」

そう、これが結果であり真実である。

B1「でもよ！保健室に運ばれた奴が参戦するなんてありかよ！」

俺は一度、保健室に運ばれて保健室から抜け出して参戦したのだ・
・。

真「残念だな。保健室に運んだ奴を参戦させてはいけないってルールは無い。これは戦争だ。けが人つと偽って敵の陣地に

入れるのだって認められているはずでしょ？」

真が鉄人に聞いた。

西「その通りだ。これは戦争だ。Fクラスはルールも守っていた」

B1「くそー！」

Bクラスの奴が苛立って鉄人に殴りかかる。

亮「やめろ！」

代表が叫んだがもうおそい。

『パン』

乾いた音が鳴った。

俺「先生に当たるなよ」

俺が拳を受け止めた。

B1「放せ！」

俺の手を振り払った時。保健室でもらった包帯が解けて傷口が少し開いた。

血が流れていく。

真「愁！保健室に戻れ！」

それを見て真が叫んだ。

俺「ああ、解った」

そして、俺は再び保健室に。

黎 side

黎「あいつ大丈夫かよ……」

真「まあ、死なないだろ」

亮「あの人……。あの怪我してまで……」

大木が驚いた顔で愁が出て行くのを見ていた。

真「あいつはそういう奴だ。つい50分ほど前には一人のクラスメイトを助けるために喧嘩もしてきた」

真が大木に説明をする。

亮「す、すごい・・・」

真「そうそう、勝利したのはこっちだから言っことを聞いてもらっぞ」

亮「・・・はい」

何も考えてないような顔で返事をした。大丈夫かこいつ？

真「お前たちのクラスをDクラスの設備にして俺たちのクラスの設備を1つ上げる用に先生に交渉しろ。以上だ」

亮「はい。解りました」

真「じゃ」

そう言って、真は教室を出て行った。

俺と美羽も真の後を追っ。

着いたのは保健室。

真「愁、大丈夫か？」

扉を開けながらのんきな声を出した。

side END

扉を開けてのんきな声をだして真が入ってきた。

俺「大丈夫なはずないだろ！」

包帯でぐるぐる巻きにされた手を見せながら怒鳴った。

真「悪いな、怪我してるとこ。あの方法しか思いつかなかったんだよ」

後ろから黎と美羽も入ってきた。

俺「大体、ポケットの中に『Bクラス教室に來い。そこで戦争を終わらせる』なんてメモ入れて。見てなかったらどうするんだ

よ！」

真「ああ、お前なら脱出するために持ち物を確認するから大丈夫だろっと思ってたな」

そう、話は俺が保健室に連れてこられた時に戻る。

〈回想〉

F1「けが人です。見てください」

保健室の先生である。増井先生が顔を出して。

増「そのベットに寝かせとけ」

そう言うと俺をベットにたたきつけてFクラスの奴は帰っていった。

増「あー、刃物で刺された傷だな。結構回復してるし包帯巻いて安

静にしとけ」

そう言っつて包帯を俺に渡した。

自分で巻くのかよ！

増「じゃ、寝るから問題起すなよ。後、動けるようになったら適当に出て良いから」

この人、良く雇ってもらえたな・・・。

まあ、包帯を巻いておいて、自分のポケットの中身を探る。

先生に見つからずに脱出しないといろいろ面倒なことになりそうだから！

はつきり、言っつて先生は寝たふりをしてるが俺の方を見ている。

ポケットに手を突っ込むと紙があった。

紙なんていれたかなっと思いつつ出して見る

『Bクラス教室に來い。そこで戦争を終わらせる』と書かれていた・・・。

あいつは見つけられなかったらどうするきなんだよ？

俺「先生。痛くないので出て行きますね」

無謀かと思っつたが・・・。

増「おう、お大事に。つか、もう来るな面倒だから」

マジで、雇ってもらえてよかったな先生……。

そして、Bクラスに向って試験召喚戦争に終止符を打った……。

〈回想 END〉

黎「まあ……。俺たちが勝利できてよかったじゃないか」

俺「ああ、そうだな」

真「これで……。俺たちの目標である全クラス設備統一が完成された」

3人「……終わった!!!」

増「黙れ、糞ガキども!」

怒られて……。

こうして……。俺たちの戦争は終わったのだ……。

あ、まだ続くよ!

すべてが終わった時（後書き）

まあ、なにか最終回を感じさせていますが……。まだ続きます……。

次回、『朝、遅刻しそうになって女の子とぶつかったらフラグが立つ』

お楽しみに……。 （サブタイトルが違う場合があります）

朝、遅刻しそうになって女の子とぶつかったらフラグが立つ（前書き）

長かった原作で言う1巻の内容・・・。

2巻と3巻は5話で終わらせて良いよね？（終わらせれるか解りま

せんが・・・）

朝、遅刻しそうになって女の子とぶつかったらフラグが立つ

俺たちは全クラス設備をDクラスにした。

そしたらあさんに呼ばれてしかられた……。

しかし、俺たちは目的を達成した。

そして、今俺たちは……。

俺「遅刻する！」

走っていた……。

黎「余裕を持って、起こしに行ってるはずなのに何で遅刻しかけるんだ！」

美「愁！一人だけ遅刻を間逃れる気！？」

いつもの3人は今日も走っている。

俺は後ろの二人を置いていってでも遅刻を間逃れるために全力で走る！

黎「愁！今俺たちをおいていこうとか思っただろ！」

幼馴染には俺の行動はお見通しのようだ。

その時……。曲がり角から女の子が飛び出してきた……。

俺「うわ！」女の子「きゃ！」

ぶっかった……。

二人とも倒れた。

俺「ごめんなさい」

俺は立ち上がりながら誤る……。

女の子は俺たちと同じ位の年だった……。

黎「愁、気をつけるよ馬鹿！君、大丈夫？」

後から来た黎は女の子に手を差し伸べる。

女「……」

しかし、手を取る気も無いようだ……。

女「き……」

俺「き？」

思わず聞きなおす……。

女「キヤー！」

再び悲鳴を上げて……。

立ち上がった俺の足を蹴られた・・・。

はあ？

何が起こったかもわからない・・・。

女「キヤー！」

女の子は悲鳴を上げ続ける。

黎「大丈夫・・・グハ！」

女の子は起き上がる時に黎にアッパーをした・・・。

黎はその場に倒れた・・・。

女「ご、ごめんなさい！」

そう言って走って去っていった・・・。

なんだっただんだ？

そう思っていると・・・。

蹴られた足に激痛が走る！

俺「イテー！」

蹴られたところが痛くなってきた・・・。

美「黎たち、道路の真ん中で何やってるの……」

後から来た美羽は道路に倒れてる黎と座り込んでる俺を見て変な顔で見つめてる……。

俺「俺も聞きたい……」

俺は走れないので歩きながら学園を目指す。

黎は倒れたままなので俺が担いでる……。

美羽に説明をしながら学校に向う……。

クラスが統一されても……。俺たちの学園生活は平和には終わらないようだ……。

そう、もうすぐ……。

文月学園祭……。

俺たちを待っているものは……。

朝、遅刻しそうになって女の子とぶつかったらフラグが立つ（後書き）

。彼女とぶつかった時・・・。死亡フラグが立つのかもしれない・・・。

門を守る鉄人

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください

『あなたが今欲しい物はなんですか？』

天城

楽しければいいんじゃない？

先生

『アンケートに疑問系で答えるのは不思議です』

上田、小坂、小島

楽しみ

先生

『3人同じ答えとは仲の良いですね。楽しい学園祭になると良いですね』

七瀬

あの人との思い出

先生

『そろそろ恋をする季節になってきましたね。もしも、好きな人がいるというなら。先生は全力で応援したいと思います』

杉谷

黎、または手錠やロープに……（以下、拘束道具が永遠と書かれていた）

先生

『先生は小坂君の状態が非常に不安です。犯罪はやめましょう』

そして、俺たちが学校についた時・・・。

先生が校門に立っていた・・・。

もちろんだが・・・。

西「遅刻だぞ！」

鉄人が立っていた・・・。

俺「来る前に通り魔に襲われて足怪我しました」

西「そんな、嘘が通じるとでも思ったか！」

俺「これ、証拠の物です」

そう言っただけで背負っていた藜をその場におろした。

西「な・・・」

俺「この通りです」

美「私、現場を見ていなかったけど本当だと思います」

西「小島が言うなら本当だろう。小島は教室に行け。天城は保健室

だ
」

俺「はい
」

そして、俺は鉄人につれられて保健室へ。

そこで、俺は足にシップを張ってもらい。黎はベットで横になった。

クラスに行くと言園祭のことを話し合っていた。

F1「喫茶店でいいんじゃないか？」

F2「何か展示して料金取るだけでいいとおもう」

F3「何でも良いけど、簡単なものでいいじゃん」

いろいろと意見が飛び交っている……。

真「よお、愁。お前も意見が合ったら何か言えよ」

黒板に出た意見を書きながら真が言った。

俺「とりあえずから揚げとか食い物を扱う」

そう言つと真は書き足した。

席に着くと隣で心配そうに見つめる希乃が入た。

俺「おはよう〜」

普段と同様に挨拶をする。

希「し、愁君。大丈夫なの!? あ、あの……。蹴られて気絶して倒れて大変だったって聞いたけど!？」

俺はとっさに美羽の方を見た。美羽は気づいて首を横に振る。

俺「気絶したのは俺じゃなくて黎のほうだ。俺は足を蹴られたただだよ」

希「そうなんだ……。良かった……」

おい……。黎はどうでもいいのか……。

希「それにしても……。愁君がそんなことになるなんて……」

ああ……。そうか、希乃の中ではあの時の喧嘩で俺は強いとでも認識してるのか……。

俺「俺は強くないし……。油断してたな……」

希「どんな人だったの?」

俺「学校来る途中でぶつかつた女の子だったな……。二人ともこけて、俺が立ち上がりつて黎が女の子の手に手をさし伸ばしたら……。二人とも蹴られてこのざま……」

俺はある程度の経緯を話した。

希「……。へー。そうなんだ……」

ん?何か違和感がある言い方だな……。

希「た、大変だったね」

俺「あ、ああ」

真「よし、多数決を取るぞ」

ある程度の意見を取った真が多数決を始める。

見てみると変なものばかりあった……。

『美羽と希乃の写真集販売』やら……『デート相手代理』などさまざまなものがあつた……。

てか、誰だよ……。『美羽と希乃の写真集販売』とか入れた奴……。

真「全部やりたいところだが……」

やってたら『美羽と希乃の写真集販売』をやることになるだろうな……。

真「学園祭でやってもよさそうなのを俺が決めたからその中でな」

散々、意見を言わせておいて真はまともなものだけを多数決で取つた。

ブライディングの嵐が起こったのは書かなくても良いだろう。

結果。から揚げと焼きそばをやることになった。

門を守る鉄人（後書き）

6 / 8 追記 最後の方に真と書くはずが黎になっているのを見つけてびっくりしました・・・。何時保健室を抜け出したのやら^^^ ;
これからは気をつけます^^^ ;

復活の呪文・・・？

放課後、俺は保健室をよることにした。

黎「愁・・・。元気か？」

そこにはベットのの上に座ってる元気の無い黎が座っていた・・・。

俺「ああ、元気だが・・・。お前は今にも死にそうだな・・・。」

黎「もうだめだ・・・。頭の中整理できない・・・。俺はもうだめかもしれない・・・。」

ネガティブになった黎は何もかもを諦めそうだ・・・。

増「あー、そのネガティブ野郎をさっさと連れて行ってくれ。邪魔だ」

先生は黎を追い出したがった・・・。

俺は黎を何とか説得させて保健室を出た・・・。

かばんを持って下ばかりを見る黎・・・。

何か元気になることでも見つけないと・・・。

俺は別の意味であせっていた・・・。

希「いた！、愁君」

俺の名前を読んでこっちに向ってくる希乃。

俺「どうした？」

希「召喚大会って知ってる？」

召喚大会といえば……。二人一組でチームを作り優勝者に景品が出る大会だ……。

俺「まあ、ルール位は……。あー、景品知らない」

希「私、パートナーを探してるんだけど一緒に出てくれない？」

……。マジスカ……。

なぜ、俺を選ぶのかなどの疑問をしながら何もすることが無いなど思ったので、

俺「別に良いけどさ……。恋歌や真に黎とか勉強できる奴とじゃなくて良いのか？」

希「愁でいいんです！」

俺「それで、景品って何なんだ？」

希「え……。やっぱり、知りたい？」

俺「まあ、出るからには興味あるし……。」

希「召喚獣のパワーアップの腕輪と……。如月グランドパークの
ペアチケットです……」

その時……。黎が動いた……。

黎「ペアチケット……」

俺「お……。黎が復活する……」

黎「よし、出るぞ……。俺は大会に出る！」

そして、誰かを探しに走りだした。

俺「行った……」

希「じゃ……。大会の件お願いします！」

顔を赤くした希乃は下駄箱に走っていった……。

……。なんだったんだ？

まあ、帰ろう……。

学園祭 準備！

そして、次の日から準備が行われた。

その間、希乃とはあまり話しができずに入た……。

一方、黎は美羽と大会に出ると言っていた……。

真は準備に追われた。

そして、学園祭当日。

俺「とうとう、当日になったか」

黎「やっとか……」

真「お前らはあんまりやってないだろ……」

真は準備をあまりしない二人を睨んだ。

黎「おいおい、ちゃんと準備しただろ？」

俺「ああ、やった」

真「お前らがやったのは……。演劇部からテーブルと会議室から机と椅子を持って来ただけだろ」

確かに、そのふたつ意外は何もやってない。

だが、

黎「俺たち意外に誰にも見つからずに運べる奴がいるのかよ!？」

そう、テーブルや机は許可なく。勝手に持ちだした物だ。

真「だからっというて他のことをしなくて良い理由にならないだろ！」

やばい、真が怒った……。

俺と黎はお互いの顔を見て。

走り出した……。

真「待て!!」

そう言われてまつ俺たちじゃない。

『パン』

後ろから真がエアガンを撃つ音がした。

黎の足に命中して黎は倒れた。

真「降参する？」

俺にエアガンを向けながら言った。

俺は両手を上げた。

俺「降参」

この後、みんなにといしよに準備をした。

そして、学園祭がはじまった。

俺って何だろう……。

そして、最後の準備が終わった。

そして、俺と黎は店内にいと邪魔だと言われ追い出された……。

友達外のない友達だ……。

黎「どこ行く？試合までまだ時間あるだろ？」

この試合とは召喚獣大会のことだろう。

俺「とりあえず時間までぶらぶらするか……」

希乃と合って試合の打ち合わせをしたところだったが向こうは忙しそうなので諦める。

亮「愁さん〜」

ぶらぶらしていると亮に出会った……。

最近こいつはやたらと俺のところに来る……。

何時か、俺がそっちの趣味とかいう噂が流れなければ良いけど……。

俺「亮か……。なんだ？」

亮「愁さんにタダ券を渡しに。店に来てほしいので」

笑顔で言った。そして、渡されたのは演劇のチケット……。

黎「あれ？俺の分は……」

渡されたチケットは1枚しかなかったのだ……。

亮「買って下さい」

さっきの笑顔とは別で冷たい一言……。

俺「黎、お前もらえよ俺は良いから……」

今にも喧嘩をし始めそうだったので俺のチケットを渡した。

黎「お、さんきゅう」

亮が黎をにらみつけるが……。

亮「仕方ないですね。それじゃもう一枚……」

黎「愁！そろそろ、試合の時間だぞ！」

近くの時計を見ると試合時間まで5分……。

俺「マジかよ！亮ありがとな！黎行こうぜ」

亮が何か言おうとしてたがそれを聞かずに俺たちは走りだした。

希「愁君遅いよ……」

大会会場で希乃が待っていた……。

俺「ごめん……」

試合開始1分前……。

大会会場について息切れをしていた。

そしてすぐに俺たちの番が来た……。

D1「Fクラスが相手なんてラッキー」

D2「そうだね」

相手はDクラス二人カップルだ……。なにかむかつく……。

希「行きましょう」

俺「Fクラスなんかに負けるなんて不幸だなお前ら……」

「「「「^{サモン}試獣召喚」「」」」」

『国語 Fクラス 天城 & amp ; 七瀬 70点 & amp ; 358
点 VS Dクラス D1 & amp ; D2 121点 & amp ; 1
80点』

召喚された瞬間に希乃の召喚獣が武器を俺に渡して俺の武器を希乃に渡した。

召喚獣の攻撃力（武器の）召喚した人の点数に反映されるので今俺が持つてる銃は358点分の威力を持っている。

2発ほど銃を撃って俺たちは勝利した・・・。

俺「簡単だなおい・・・」

らくらく1回戦を勝利で収めた。

希乃はすぐに店に戻った。

俺は一人取り残された・・・。

努力家な少女と不幸な少年の再会

黒月 side

愁くんを置いて店に戻る。

店に戻るとすぐに接客を始める。

希「いらっしやいませ」

私が愁くんを置いて接客をするのには意味がある。

明日、中学校の頃の友達が学園祭に遊びに来るのだ。

明日、店を手伝わない代わりに今日は一生懸命にがんばるのだ。

愁くんと一緒にいたいけど今日は我慢をする……。

side END

俺は一人大会会場を出た。

いつもは周りに誰かいるが……。

今は一人だ……。

別に寂しいわけじゃないが……。

退屈なんだ……。

その後、ぼんやり歩いていると……。

俺は不幸な再開をした……。

俺「あ……」

女「あ……」

そう、数日前にぶつかって、蹴られて逃げられた……。別名『通り魔』だ。

俺はとっさに自分の身を守るように手で攻撃を受ける準備をした。

女「先日はすいません！」

頭を下げる女の子と手で攻撃を受ける準備をする俺。

他人から見たら。変にしか思われないだろう……。

俺「え……」

反応が違うことに驚きつつも

俺「もう良いから……。頭上げなよ……」

女「はい……」

俺「俺は天城 愁。一番馬鹿なクラスに所属してる」

自分のことを馬鹿と呼ぶ俺に戸惑ってる。

俺「まあ、よろしく」

握手を求めるように手を伸ばすと・・・。

その手を殴られた・・・。

そして、威力がすごいので俺はそのまま倒れこむ。

そして、また通り魔として去っていった・・・。

再び・・・（前書き）

何だよ。このタイトルって思った方。すいません。他が思いつかなかった・・・。

再び・・・

学園祭1日目は散々だった・・・。

通り魔に出会って殴られて・・・。

試合が終わったらすぐさま店に戻る希乃。

なんだかとっても疲れて1日目が終わった・・・。

残る試合は準決勝と決勝戦のみとなっている。

順序良く勝ち上がって入る俺と希乃チーム。

黎と美羽チームも勝ち残っていてこのまま行けば決勝戦であたることになる。

そして、学園祭2日目が始まった。

試合は午前が一試合と午後は学園祭の最後に決勝戦が行われる。

俺「黎に美羽、勝ちあがってこいよ」

黎「おいおい、俺たちが勝ち上がらないほうがうれしいんじゃないか？」

美羽「私たちが上がったら勝っちゃうよ」

俺「それはどうかな」

会話をしつつ学校に向う。

学校の教室には店の準備をしていた。

そうなんだが……。

『通り魔』が教室にいた……。

俺「よお……」

女「あ……」

そう、『通り魔』の周りにはクラスメイトが倒れていた……。

(無残にも散ったのだろう……)

黎「愁、離れる……。やられるぞ……」

震えた声で黎が言った。

希「この子は私の友達で……。男子恐怖症で……」

希乃の友達だからここにいたのか……。

希「男の子が近づくと怖くて殴りかかってしまうんです……」

(だからか……)

今まで殴られていたりした理由がわかった。

俺「まあ、何があつてそうになったのかは知らないが大変そうで……」

希「そうそう、この子の名前は武月梓むつきすくも悪い子じゃないのでよろしく
お願いします」

希乃は俺から隠れるように後ろにいる武月の自己紹介をした。

俺「まあ、楽しんで行ってくれ」

そう言つて俺は真のところに行った。

真「愁、今日もお前ら何もなくて良いからぶらついていて良いぞ」

俺「2日も連続でぶらついていても良いのかよ……」

真「いや、お前ら邪魔だからさ」

本当……。頭がいい友達なのに思ったことははっきり言ってくれ
る。

俺「解つた。そうさせてもらつよ」

俺もわざわざ手伝つような奴じゃないのでお言葉に甘えてぶらつか
せてもらつ。

真「昼飯、ここで食つなら金もつてこいよ」

俺「それでもクラスメイトに言う言葉か？」

そういえば……。昨日は何も昼飯食っていなかったな……。
今更そんなことに気づいた。

真「当然だ」

冷たい友達の言葉を聞いて俺は教室を出ることにする。

その時、希乃が声をかけて来た。

希「愁君。ちょっといい？」

俺「ん？」

希「今日は1日店を休みにしてもらって……。その……。」

俺「なら、一緒にその辺回るか？」

希「え……。よろしくお願いします」

俺「武月だっけ？一緒に来るか？」

俺は知らない場所に一人歩かせるよりは良いだろうっと思って誘ってみる。

梓「え……。？良いんですか？」

俺「昔の知り合いといった方が良いだろ？希乃もそれで良いだろ？」

希「私も誘おうと思ってましたので……」

梓「二人の迷惑じゃなければ……。お願いします」

武月はそう言って頭を下げる。俺から約2mほど離れたところで……。

（誘ってみたは良いが……。俺って一番危なくね？）

俺はどうやら危険な行為をしたようだ……。

危険はいつぱい、復讐は今！

俺は結構危ない場所にいる……。

現在……。俺 希乃 梓っという感じに並んで歩いてる……。

梓は武月と呼ぶ俺に名前呼び捨てで良いと言ったもの……。
近づけばやられるのは確実だろう……。

(き、危険だ)

一瞬でも早く逃げたいが……。

逃げ出してみたら傷つくのは梓だ……。

俺は逃げずにその場にいる。

亮「あ、愁さん〜」

俺の名前を大声で叫んで近づくのは亮だ……。

亮「おはようございます。今日こそ演劇見に来てくださいね」

そう言っってまたチケットを渡す。

(こんなにも易々とチケットを渡しても良いのか……)

亮「今日は皆さんにも見ていただきたいと思ってございませう」

そう言って嵐のようにしゃべり続ける亮。

希乃にチケットを渡し。

希「あ、ありがとうございます」

亮「いえいえ」

笑顔でチケットを渡す亮。

亮はそのまま隣の梓にも渡そうとする……。

(亮! やめるんだ!)

俺の心の声は届かず。亮がチケットを梓に渡す……。

俺は目を閉じた。友達が倒れるのは見たくないからだ。

……。

(何も起こらない?)

梓「ありがとうございます……」

……。目を開けると梓がお礼を言っていた。

亮「愁さん。どうしました?目を閉じて」

俺「いや……。なんでもない……」

(なぜだ……。何があった……。ツハ！こいつ……。女性と間違えられてる！？)

学校で男に人気があるって言っても……。女性まで間違えるって……)

自分の性別を間違えられている亮を哀れに思えながら。それでよかったと思っっている。

亮「それじゃ、絶対来てくださいね！」

そういい残して帰っていった。

チケットをもらったので演劇を見に行くと時間がだいぶあったので他の店を回る。

そして、Aクラスの喫茶店に足を運んだ。

愛「いらっしやい」

学年トップの恋歌が迎えてくれた。

適当に席に座ると。

鈴「水です」

そう言っつて鈴香が希乃と梓の前に水を出す。

鈴「水です！」

怒った声で俺に水をかける。

俺は座っていた椅子を横に倒してその時に地面を蹴って回避した。

鈴「ツチ」

希「愁君大丈夫!？」

俺「大丈夫だ。すみません。人変えてください」

(何されるか解らねえ・・・)

鈴「手が滑ってしまいました。すみません」

俺「俺にかけようとしてたたるお前。まだ試験召喚戦争のこと根に持つてるのかよ」

鈴「いえ、注文を」

希「ふわふわケーキを」

梓「私毛」

俺「カルピスで」

それだけ聞いて鈴香は去っていった。

希「本当に大丈夫?」

俺「ああ、大体やることわかっていたからな・・・」

梓「すごいですね・・・」

俺「ある程度解っていたら避けれるもんだろ」

少し話しをして時間を潰した。

運命とは酷いものである

鈴「当店自慢のふわふわケーキです」

梓「ありがとうございます」

鈴香が梓と

希「ありがとうございます」

希乃の前にケーキとフォークを置く。

鈴「カルピスです」

そして、俺の目の前に赤い液体が入ったコップが置かれた……。

俺「すみません。マジで店員変えてください」

手を上げて発言するが無視された……。

鈴「大丈夫です。これは当店の赤いカルピスですから」

……。

（見るからに辛そうだ。唐辛子が……何か辛い物を入れやがったな……）

俺「あの、マジでやめませんか？ここ、店ですよ……」

鈴「大丈夫ですって」

川「交代の時間に来て見たら。騒いでる客がいるって聞いたけど君達か」

ムツリーニ
寡黙なる性識者こと川口 太策が来た。

俺「やっと話のわかる奴が出てきた……。カルピスを頼んだらこんなのが出されたんだが」

そう言つて赤い液体の入ったコップを見せる。

川「カルピスですが？」

(……。はあ?)

川「いえいえ、冗談ですよ。今すぐ変えをお持ちします」

礼をして川口は店の中に入っていった。それに続いて鈴香も

俺「時間を潰すのにこんなにも苦勞するなんて……」

俺が苦勞してる間に希乃と梓と恋歌(交代して今は暇)が雑談をしていた。

川「お待たせしました。カルピスです」

川口が持ってきたのは緑色の……。 (以下略)

俺「ねえ、先生よんで良い？」

川「冗談ですよ。これはサービスです。あ、普通の飲み物なので心配しないでください。後、カルピスです」

やっと、川口の後ろに隠してた手からカルピスが出てきた。

値段が一番安かったとはいえ。。。出てくるのに時間がかかりすぎだろ。。。

その時、風が吹いた。

そして、店から出ようとする女子生徒のスカートが浮かび。。。

川「!!」

川口はカルピスのコップを持っていた手を離し。ポケットの中から何かを取り出し。ポケットに直してさっき持っていた方と違う手でカルピスのコップをキャッチした。

川「どうぞ、ごゆっくり」

そう言って、去っていた。。。

(何者なんだ奴は。。。)

俺の中で疑問が残り。カルピスと緑色の野菜ジュースが残った。。。

希乃たちが楽しく話してるのを見つつ俺は飲み物を飲んだ。

そして、十分話終わった希乃が

希「そろそろ出ます?」

俺は、あぁっと言いながら立ち上がり代金を払って出て行った。

時計を見ると午前の試験召喚大会の時間の10分前だった。

俺「そろそろ大会の方行くか」

希「そうですね」

梓「大会?」

希「そういえば言っていなかったね」

希乃は梓に大会のことを簡単に説明した。

梓「じゃ、もしかして希乃ちゃんはおうーうー」

俺「どうかしたか?」

うーうー言っているのが気になって振り返ると梓の口を希乃がふさいだ。

俺「ど、どうかしたのか?」

希「な、なんでもないです」

希乃の顔が赤いがなんでもないと本人が言うのだからなんでもない

のだろう……。

その後、大会会場に向う間後ろで希乃と梓がこそこそしゃべっていた……。

(少し気になるが聞こえない……)

大会会場につくと梓と一旦別れた。

俺「準決勝か、結構速かったもんだ……」

希「今年はなにか人数が少なかったらしいです」

司会「さあ、学園祭の試験召喚大会もとうとう準決勝まで来た！なんと、生き残った2チームはFクラスだ！」

司会だしきり、いろいろな声が聞こえた。

俺「まあ、驚くよな最低クラスなんだから」

希「そうですね」

つと苦笑しながら言った。

司会「準決勝を戦うのはFクラス天城さんと同じくFクラス七瀬さんだ！」

そういわれたところで俺達が舞台に出る。

「迷惑トリオの一人じゃないか!」「七瀬さん好きだよ!」「誰だ

今告白したの!？」

いろんな声が響く。観客の人数が今までと違う。

(しかも、こんな時に告白って……)

しかし、当の本人希乃には聞こえていない。

司会「Fクラスメンバーと戦うのは、Aクラス鈴香さんとCクラスの根本さんだ!」

(対戦相手知らなかったが……。マジか……)

鈴香と根本が舞台上上がった……。

根「天城! 今日こそ復讐してやる」

鈴「怒ってなんか無いよ。ただの試合だからさ」

敵の殺意が俺に向ってのものだと感じるのに時間はかからなかった。

司会「それでは、準決勝からはルーレットで科目が決まります」

とかいって教科が書かれている円とその上に矢印がある物を持ってきた。

司会「見ての通りこれで矢印が止まった教科が今回の勝負科目です」

円には単体科目全部+総合点数が書かれている。

司会「では、私が回します！」

そう言つて円を勢い良く回す。

だんだん勢いが弱まつていく。

根「さあ、血祭りに上げてやるぜ」

根本がやる気満々だ。

止まつた教科は……。

司会「教科は数学です！」

その場で根本たちが降参して俺達は決勝に進んだ。

運命とは酷いものである(後書き)

テスト問題が思いつかないのでできれば募集したいです^^ ;

短編 決勝前

俺達は勝利して、喜んでいた。

俺「戦わずに勝つ。すばらしいな」

希「そうだね」

梓「でも、召喚獣が戦うところ見たかったな」

梓が残念そうに言った。

俺「安心しとけ。決勝は絶対戦うからな」

梓「え？」

俺「なぜなら、あいつらだからな」

俺がそう言うともう、ひとつの準決勝も終わった。

『国語 Fクラス 美羽&黎 0点&50点VS Aクラス 恋歌
&太策 0点VS0点』

黎と美羽が勝利を収めていた。

俺「次は教科によつたら危険だな」

希「恋歌ちゃんが負けるなんて……。どうして……。」「

俺「恋歌の方が点数は上でも、黎たちはコンビネーションがいいかな」

そう、あいつらなら。どっちかが突撃してその後ろからどっちかが突撃するとかやってもおかしくない。

無茶ばかりやる奴らだからな……。

希「どうなるだろう……」

俺「大丈夫だ。あいつらの裏を突けば良い」

俺にはあいつらの並び方によってある程度やることが解る。

希「なら、安心だね」

梓「がんばってね」

そして、俺達は店を回り。昼食を取った。

俺は屋台のカレー。

希乃と梓はFクラスの焼きそばを食べていた。

希乃と梓は楽しそうに話ながら食べていたので、俺は先に食べ終わった。

俺「ちよつと屋上で寝てくるよ」

そう言ってその場を離れた。

屋上は現在立ち入り禁止になっているがドアに鍵がかかっていないので屋上にでた。(結構昔から壊れている)

そして、ぐっすり眠った。

短編 決勝前（後書き）

短いです・・・。

次回も短いかも・・・。

2巻の内容で終わっていいかな？

寝る子は置いてかれる・・・

屋上で眠っていた俺は目を覚ました。

そして、時計を見る。

現在時刻 15:50

俺「後十分で決勝戦かよ！」

俺は飛び起きて走る瞬間につまずいてこける。

俺「なんだよこれ！」

寝る前になかった機械。

俺は蹴ったが・・・。

(見なかったことにしよう・・・)

再び走り出す。

再び転ぶ・・・。

今度はコードに足を引っ掛けた。

(なんなんだよ！)

心の中で叫びながら走った。

時刻は15:55

余裕で間に合った……。

俺は息を切らしてる。

俺「間に合った……」

大会の待機室の扉を開ける。

(……)

大会の待機室に誰もいなかった……。

俺「なぜだ！」

俺の叫びは何度も響いて消えた。

怒る番犬は門の前を離れる

俺は目を疑った。まだ、誰も来ていないことに。

観客の声は聞こえるからこの場所はある……。

俺は廊下にて少し歩く。

(なぜだ……。何が起こってる!?)

その時、真が通りかかった。

真「愁！何やってるんだ？」

真は息を切らしている……。

俺「誰もいないんだよ」

真「美羽がいなくなっただんだよ！」

……。

(なんて言った？こいつは……。なんていいやがった！)

俺「なんて言った！美羽がだと！」

真「ああ、言ったさ。美羽がいらないんだよ！10分ほどだよ！」

俺「どこだ！どこを探した！」

真はおどろきつつも自分の探した場所を言った。

俺は走った。教室、部室……。調べれるところは調べた。

（見つからない！？なぜだ……。校外なのか？）

俺は再び走り出す。

黎 side

見つけた……。

俺は息を切らしながらその部屋に入った。

黎「俺の友達が世話になったな」

木刀を取り出して言った。

不1「良くここがわかったな」

不2「ああ、学校の誰も知らないって思っていたんだがな」

不3「まさか、一人でくるとはな。しかも、目当ての人がよ！」

いたのは……。縄で手を足を縛られていて口には布をかまされて
いる美羽と不良が4人と不良のリーダーみたいな奴が一人。

リーダーだと思うのは奴にだけ椅子があるからだ。

リ（不良のリーダー）「まあ、ゆっくりしていけや、まだ、遊ぶ時間じゃないからよ」

そんなことを言う。

黎「遊ぶ時間なんてしらないよ。ただ……。覚悟しろよ！」

近くの奴に木刀を振る。

不1「そんなもんか！」

そいつは後ろに少し飛んで避けてそのまま殴りに来る。

俺は敵の拳を受け流し腹部に強い一撃を与える。

不1「が！」

そいつは一撃で倒れた。

不2「雑魚が！調子に乗るなよ！」

次の奴は木刀を持って大きく振りかぶって振り下ろす。

俺は受け止めようと思ったが少し横に移動し木刀を横に振り敵の顔を叩く。

そいつも倒れた。

（こいつら弱い！）

俺は勝てると思っていた。

リ「へー。強いな。俺が相手しよう」

リーダーみたいな奴が動いて他の奴は離れる。

黎「怪我をするだけだ」

リ「それはどうかな？」

敵が動いた。瞬間に俺も飛び出す予定だった。

しかし、動けなかった。

後ろから最初に倒した奴が俺の両足を掴んでいた。

黎「な!？」

そして、殴られる。

黎「ガハ！」

リ「さあ、楽しませてもらおうか」

それから俺は何度も何度も殴られ続けた。まるでサンドバッグを殴るように……。

side END

俺は、走り回ってる時に川口に出会った。

川「どうしたんだい？もうすぐ試合だろ？」

俺がいることに驚く。

俺「美羽を知らないか？」

息を切らしながら問う。

川「小坂君と同じこと言うんだね。体育館の奥の部屋に連れて行かれていたのを30分ほど前に見たよ。友達か何かだと思っていただけ。違うのかな？」

俺「解った！」

会話を最後まで聞かずに走り出す。

体育館は調べたが奥の部屋は更衣室として使われていたので調べていないかった。

体育館へ行くとさっきより騒がしかった。

俺は迷わず奥の部屋のドアを開けた。そこには……。

縄で手を足を縛られていて口には布をかまされている美羽とボロボロで額から血を少し流している黎と倒れている人間も含めて5人の知らない奴がいた。

俺「お前ら！何やってんだ！」

俺の怒りの叫びが体育館中に響いた。

ケロベロスは2人

俺は近くにいた奴を殴り倒す。

俺「覚悟しろよ。怒った俺の怒りは半端じゃないぞ！」

2人の敵が襲いかかる。

リ「やめろ！」

その言葉で2人は止まる。

俺「どうした？恐れたか？」

リ「お前の相手をやらせても意味がないって思ったただけだ」

そう言っつて拳を構える。

黎「そいつは……。俺の獲物だ！」

黎が傷ついた体で言った。

俺は黎の目を見る。

奴の目はまっすぐに俺を見て、訴える。『俺の獲物に手を出すな』
っつ。

俺「解ったよ」

リ「ごちゃごちゃ言ってねーで来いよ」

俺はダッシュでリーダーの横を通りぬけようとする。

そこを相手の足に引っ掛けられ転ぶ。

そのまま俺の上に乗って奴は俺を殴る。

リ「その程度か！あ！？」

何度も何度も殴る。

そして、俺が奴の拳を掴む。

俺「その程度だよ……」

俺は睨む。

その時に体を無理やり起こす。

リ「な！？」

上に乗っていたリーダーは俺から落ちて倒れてる。

俺「お前の拳なんかいたかねーよ」

そう言って、俺は黎のところに向う。

そして、黎を縛る紐を解く。

黎「サンキュウ・・・」

美羽は気絶しているが紐を解いておく。

俺の後ろから木製バットで頭を殴る奴がいた。

『バン』

音が響き俺は横に倒れる。しかし、すぐに立ち上がり不良を見つめる。

不「何なんだよお前ら!？」

俺、黎「Fクラスだ!」

俺と黎が同時に言った。

不良「・・・」

静かになった・・・。

一瞬の静寂。

それが解けた時・・・。争いが始まる。

俺が木刀の持った不良を殴り倒す。一撃でそいつは倒れた。

俺「黎!お前の得物だろ?」

黎に向って投げる。木刀は回転しながら放物線を描いて黎の手元ま

で飛んでいく。

黎は木刀を見ずにキャッチする。

黎「覚悟しろよお前ら」

リ「まだ、痛めつけられたいようだな！」

俺「痛めつけられるのはお前らだ」

黎「地獄の門番を怒らせてしまったな！」

倒れていない不良はリーダーを合わせて4名。

俺「さあ、命の保障はしてやるが」

黎「怪我したからって怒るなよ」

俺、黎「俺の守る門を開けたのはお前らだからな！」

懐かしい。台詞を言った俺達の怒りを止めることはできない。

ケロベロスは2人（後書き）

もう、この章で終わります^^；、

ケロベロスは愁の二つ名じゃなく愁と黎の二つ名なのを忘れかけて
ました・・・。

俺たちの力

俺は一直線に近くの奴に殴りかかる。

俺「はあー！」

気合を込めた一撃が不良に当たる。

不1「がは！」

(こいつらは弱い……。黎は大丈夫か?)

リ「何度やつても同じだろ！」

敵の膝蹴りが黎の腹に直撃する。

黎「あ……。あああ！」

黎は蹴られた状態で右手で持つ木刀で敵を叩く。

(捨て身になってんじゃねえか……)

余所見をしていると他の奴らが俺を囲んでいた。

俺「どうした？ 囲んで終わりか？」

不2「お前、行けよ」

不3「お前が行け」

(どうつやら先に行くのが怖いのか)

俺「なら、俺から行くぞ」

後ろにバックステップし、後ろにいる奴に裏拳をかます。

不3「うわ」

攻撃は当たらなかった。

不4「今だ」

横にいた奴が後ろからパイプで俺を抑える。

俺「な!?!」

不「やっちまえ」

残り二人が俺を殴りかかる。

数発の拳を受けよるける。

(つち、良い拳だ・・・)

俺はパイプを振りほどこうとするが無理だ。

黎「愁!」

黎が戦いの隙を見て木刀を投げる。

不4「痛て」

俺を抑える力なくなったとき。パイプを振りほどいて押さえていた奴の足を蹴りこかす。

さらにマウントを取り敵の上に乗り返りまくる。

不4「が・・・!？」

不4が力尽きるのを見ると木刀を黎に投げ返す。

俺「黎！」

黎「おう！」

黎は殴られつつ木刀をキャッチすると再び捨て身で戦う。

俺は残りの不良を見る。

二人は恐れて逃げ出した。

俺はその場に倒れる。

気がつくと鼻血を出してた。

美「大丈夫!？」

俺「俺より黎だ・・・」

目が霞むがしっかりと黎を見つめる。

血を流しながら、
黎は戦う。

俺たちの力（後書き）

やっと更新。

後2話くらいで終わろうと思ってます・・・。
皆さんありがとうー

終わりはハッピーエンドとは決まってい

黎は額から流れている血を服で拭きながら敵を見つめる。

その目は獲物を前にした鷹のようだ。

黎「もう、ゆるさねえ」

リ「死に底ないが！死ね」

敵がキックする。

黎は最小限の動きで避ける。

木刀を持ってない手でキックした足を掴む。

黎「覚悟しろよ」

右手で木刀を再び強く持ち振る。

敵は木刀を掴む。

黎は木刀を持つのをやめ、右手で木刀を持つ敵の腕を殴る。

リ「っく」

敵は木刀を落とす。

敵が足をばたつかせ押さえられなくなり、敵の足が開放される。

その時に木刀を拾っていく。

俺は黎の心配なんてしていない。

なぜなら、黎が負けることはないからだ。

黎が飛び出す。

リ「うっとうしー！」

敵が黎を叩きつけるように見えた。

黎「遅すぎるんだよ」

これが黎の強み。

まっすぐ来るのに突然曲がる。

それが黎。

黎は敵の横から頭に目掛けて木刀を振る。

『ドーン』

リ「が!？」

敵が倒れる。

黎「これで終わりだよ」

愁「ああ、終わりだ」

美「戻ろう・・・」

全員が出口に向う。疲れや恐怖などで俺たちは会話をしようとしなかった。

リ「終わりだ」

後ろから聞こえて振り向くとリーダーが後ろに立っていた。

『タン』

その時、俺の横を何かが飛んで行った。

それはリーダーの額に当たった。

リ「が・・・!？」

今度こそたおれた。

真「最後に油断した奴が負けだっけ？」

出口にエアガンを持った真が立っていた。

愁「悪かったな」

黎「はあ。この後、説教か・・・」

美「今回はほめられるんじゃない？」

美羽が俺たちの言葉を否定する。

黎「解ってないな。決勝戦をすっぽかしたんだぜ……」

愁「やばいな……。鉄人だけには合いたくないな……」

西「誰だ！俺を鉄人と呼ぶのは！」

近くから声がした……。

愁「に」

黎「げ」

真「る」

愁、黎、真「ぞ！」

俺たち3人がリズム良く言って同時に走りだした。

美「こつちが被害者なのにな……」

後ろで取り残されてた美羽があきれていた。

その後10分間の鉄人こつこ（鉄人が俺たちを捕まえに追いかけること）をして3時間におよぶ説教を受けた。

ちなみに美羽は被害者ということで説教を受けてない。

真「少ししか暴れてないのに……」

黎「同罪だ。残念だな」

真「くそ！なんでこんな」

愁「俺たちとつるんで失敗したって思ってるか？」

真「思うと思うか？」

愁、黎「思う！」

真「そんなに冷たいやつじゃないぞ！」

愁、黎「く、ははははっは！」

3人で仲良く下校をする。

これからも楽しい時間は続く。

俺たちのFクラスは決して負けることはない。

その後。

希乃は愁に告白をするが

「え、ドッキリカメラは？」

つと愁の場違いな発言がすべてを台無しにした。

その数日後

逆に愁が告白し、カップル成立と思って瞬間にFFF団に襲われう
やむやになった。

<完>

終わりはハッピーエンドとは決まってる(後書き)

無理やり終わらせた感がありますね・・・。

これ以上この作品を書けません・・・。

お許しください^^；

番外 フルーツバスケット（前書き）

まあ、作者である自分がしゃべったりしてますが気にせず。

番外 フルーツバスケット

いつもの三名は自分達の教室にたどり着くつと…。

特別企画>フルーツバスケット<

そんな言葉が黒板に書かれていた。

黎「…」

愁「さて、帰るか…」

真「ああ、帰ってなにしようかな」

『ちよつと待て!』

「「「!?!?」「」「」

『俺は、この作品の作者。神滅だ!』

愁「あー、幻聴聞こえるから保健室行くか」

愁はさつき空けた扉から出ようとする。

愁は見えない何かによって出れなかった。

愁「…。マジスカ?」

『この部屋出るには、この企画を成功させる以外はないぞ』

愁（嘘だろ）

『さて、他のメンバーも呼ぼう』

そう、つぶやくと反対側の扉が開かれた。

入ってきたのは…。

希「あれ？先生に呼ばれたんだけど…」

美「3人も呼ばれたの？」

亮「愁さん、大事な話って？」

川「なるほど、そう言うことですか」

恋「黎がここにいて…」

希乃、美羽、川口、亮、恋歌の5名が入ってきた…。

『さあ、これから8名でフルーツバスケットをしてもらう』

亮「何でそんなことを？大体だれですか？」

愁「はあ…。俺が説明するから…」

事情を簡単に説明する。

希「楽しく遊んで、行けば良いってことですね」

美「楽しそうじゃない」

川「なるほど、良いでしょう」

亮「愁さんと一緒なら」

恋「黎がやるなら私もやる」

全員あつさりと承諾した…。

黎「やるしかないしな…」

真「適当にやって適当に帰るか…」

愁「じゃ、始めるか…」

そうやって7つの机を輪になるように並べる。

『言ってなかったけど、罰ゲームありね』

「「「「「!?!?」「」「」「」

川口と恋歌以外は驚いた。

『3回出題した人は罰ゲームを受けます。罰ゲーム内容は…。その3回目出題をした人の前に出題した人に決めてもらいますね。18禁規制がつかないものならいいですよ』

その場の空気が凍りついた…。

希「し、仕方ないですよ。やるしかないんですから」

仕方なくつと云ってるが希乃の目は本気だった…。

愁「まじかよ…」

黎（まずい…。非常にまずい…。恋歌がこっちを見て笑っているって所が危険すぎる…）

恋「ルールだからね…」

川「とりあえず、始めますか」

ルール説明

椅子を内側に向け円状に配置して座る。椅子の数は参加者の総数よりも1つ少なくする。鬼はその円の中に立つ。

鬼は自分が該当する言葉を言う

例「Fクラス」

そうするとそれに該当した人は立って自分が座っていない椅子に座らなければならない。

座っている人が一人しか該当しない場合、その人はどこにも座れないので強制で鬼になる。

3回目の鬼になった人が再び鬼になるとゲーム終了。その前に鬼だった人が罰ゲームを言う。

じゃんけんで決めた結果、最初の鬼は川口だった。

『ゲームスタート』

川「そうですね…。「常にカメラを持っている人」とかどうですかね？（携帯のカメラも含む）」

希乃、真、黎、恋歌、美羽、亮が立ち上がる。

結果、真が座ろうとした席に亮が座ったので真が残った。

真「不覚だ…」

愁（狙う席がかぶると危ないな…）

真「そうだな…」

黎「変なこと言うんじゃないぞ」

真「武器をかばんに入れている奴」

凍りついた空気の中黎だけが立ち上がった。

黎「はめやがったな…」

真「何のことかな？亮当たりが持ってそうにおもえたんだよ」

黎と真の間に火花が散る。

美羽「ほら、続けようよ」

黎「そうだな…」教科でも400点を超えたことがある」

愁、真、希乃、恋歌が立ち上がった。

愁（恋歌の席だ…。あの席は絶対に黎は取らない！）

真（黎のことだ。俺を潰すだろう…。だが！恋歌の席には座ろうとしない！）

奇跡のように二人の意見が一致し…。

取り合いになった。

俺は全力で走ったつもりだったが真の方が席に近かったため、取られてしまった。

愁「つち…」

真「悪いな、狙いはよかったんだろうが位置を考えていなかったな」

頭脳戦で勝ったと真が言いたげだった。

愁「つふ…。」男子「」

真ん中に行くときすぐさま愁は言った。

少し反応に遅れつつ男子全員が立ち動く。

一瞬で椅子を取り亮だけが残った。

亮「早すぎますよ…」

愁「そりゃ、この面子だとね…」

亮「じゃ、「性別を間違えられたことがある人」」

…。

愁「続けて亮な」

亮「え！？そんなことって…」

真「さっさとしろ」

これからビートアップしていきます。

番外 フルーツバスケット(後書き)

ここまでの結果

「名前」 鬼回数(まだ答えていないのもいれて)

天城 愁 1

七瀬 希乃

小坂 黎 1

小島 美羽

上田 真 1

杉谷 恋歌

川口 太策 1

大木 亮 2

番外 フルーツバスケット ？

亮「そんな…。みんな性別を間違えられないのか？」

普通しないよ…。

全員がそう思ったが何も言わない…。

優しさという奴だ。

亮「好きな人がいる人」

愁と川口以外は肩を揺らして動かない…。

『ルールは絶対』

作者の一言により方を揺らした者が一斉に立ち上がる。

結果…。

恋歌が残った。

黎（嫌な予感がする…）

恋歌は自然と黎の方を見て…

頬を赤める。

黎（なんか来る！）

黎は焦った。

恋「中学校で喧嘩をした人」

愁と黎が立ち上がる。

黎（狙われてる！？確実に！）

恋は愁の席に座って黎が残った。

黎「意義あり！恋は喧嘩してないだろ！？」

黎が恋を指差して言う。

『意義を認めない』

黎「なぜだ！？」

恋「…黎に好きって告白した後、黎を好きだった子と喧嘩した」

ちなみに口喧嘩である…。

黎「思い出させるなー！」

愁「黎、耐えろ！耐えるんだ！」

黎の気持ちを一番わかってあげれる愁が励ます。

恋「あの時の言葉が…」「ごめん。付き合えないよ」だった…」

黎「うわあああ！」

頭を抱えて、苦しむ黎。

愁（あの時…。教室でクラスメイトが全員いるときに告白されたお前のつらさを俺は解ってるから！耐えるんだ

！）

美「黎って、そんな人だったんだね…」

黎^{バキ}

美羽の一言が留めを刺した。

愁、真（心が折れたな…）

かわいそうだが泣き出しそうでも泣かない黎の強さを称えた。

話を変えるが黎と亮はリーチなので次鬼になれば其の時点で終わりである。

黎（恋歌に回った時点で俺が負けと考えて良いだろう…）

黎「Fクラス！」

最善の逃げ方である。

座れなかったのは…。

希「私の番ですね…」

希乃だ…。

希（どうすれば…。愁君が鬼になってくれるでしょうか…）

希乃もターゲットは決まっている…。

そして、思いついたのは…。

希「本屋さんで本を3冊いっぺんに買ったことがある人」

皆さんは覚えているだろうか…。

希乃さんはしっぴかり覚えてました。

愁と関わり始めたあの時、愁が文庫を3冊買っていたことを…。

誰も立ち上がらない。

だが…。

『愁アウト』

作者は過去を振り返ってきたので宣告する。

愁「なぜだ!？」

まあ、愁にとってはよく買いに言ってるので覚えていなかったんで

すけど

希（覚えてくれてなかったんだ…）

希乃の中で少し嫌な気分になっていたのはいない。

愁（希乃は俺を狙っているのか？いや…。付き合っている男を狙うわけ…）

ないつと言いつれ切れない愁だった…。

愁（危険だが…。楽しく行きたいよな…！）

愁「このゲームに参加してる奴！」「」

全員が驚いて立ち上がる。

誰もが思った。

（隣の席に座れば良いだけじゃ…）

だが違う…。

恋歌と黎が隣にいてること其の場所がストップする。

ルールとして同じ席には座れない。

恋歌は自分席を死守する。

其の間に他のメンバーが座る。

この行動には意味がない。

現在座れる席は恋歌の座っていた席とその隣（希乃が座っていた）が空いているだけ。

黎は恋歌の隣を狙う。

これが狙いである…。

黎は隣の席に座ろうとしたが立ち止まった。

黎（までよ…。恋歌が鬼で次に俺が鬼になると恋歌の罰ゲームを受けることになるのか！？）

そう、気づいたのだ。愁の罠に、

だが、席の前に止まっている黎を押しつけ愁が座った。

この瞬間、恋歌が鬼と決定された…。

番外 フルーツバスケット ? (後書き)

次回
決着!

番外 フルーツバスケット 完(前書き)

せっかくなので誕生日に最終話更新！

番外 フルーツバスケット 完

愛歌が鬼になった時点でこのゲームは終わったも同然である。

安心しきつた愁に悪魔のささやきが来る。

『あー。ここから二人限定のものはなしで』

愁・愛歌「え……」

驚いたのは愁と愛歌である。

愁「嘘だろ！」

愁が叫ぶ。

『つまらないだろ？』

愁「そんな理由かよおい！」

叫ぶがゲームは再開する。

愛歌「国語の点数が350を越えている人」

立ち上がったのは…。

希乃、黎、真の三人。

希乃のが残ると思った愁だが…。

残ったのは真だった…。

真「遠いんだよ！」

真の反対側にはかり立ち上がった人が集まっついていて座れなかった。

Fクラスの男子メンバーはこれで座っていられないと罰ゲーム…。

愁は真に合図を送る。

「俺らは協力しよう」

真に合図が通じたのかうなずいてくれる。

真「「Fクラス！」」

真は鬼だった。

愁、黎「「くそが！」」

必至に走る。

愁は黎が座っていた席にすわり安心する。

真は愁の席に座り…。

後は希乃と美羽、黎である。

正直な話、黎には立ってもらいたかった。

立ったのは今回が始めての美羽だ…。

美羽「やっとだね」

わざと残った疑惑があった。

美羽「男性ってあつたねじゃ、「女性」」

女性が立ち上がる。愛歌は残りたいが残れない。（罰ゲームになるから）

愛歌は美羽のところにすわったので必然的に希乃が残る。

愁は危機感を感じてしまう…。

希乃「「大会の決勝に残った人」」

希乃が勝負に出た！

愁と美羽、黎が立ち上がった。

愁か黎、希乃が残れば罰ゲームになる。

愁が美羽の席を狙ったが黎が愁の服をつかんでとめた。

愁「な…」

黎「勝つー！」

愁を押しつけ座ろうとするが…。

その前に希乃が美羽の席に座った。

二人は座れる席が決定された。愁は黎の黎は愁の席に座らなければならぬ。

美羽がどちらかの席に座れば勝敗が決定される。

真「必至だなおい」

外野が何か言ったが気にしない。

美羽「これで決着だね」

いつの間にか美羽が黎の席に座っていた…。

愁「…え？」

『終了。罰ゲーム決定は愁』

作者が敗者を言う。

希乃「それじゃ、私が罰ゲームを言うね」

愁はダッシュで逃げようとしたがすでに遅かった。

黎「どこに行くんだい？」

愁の右肩がつかまれた。

左に回転して逃げようとすれば、

真「そんなに回りたいか？楽しそうだな」

愁の左肩をつかまれた。

愁に逃げ場なし！

希乃「えつとね…」

頬を赤く染めて次の言葉を考えている。

愁（希乃とは付き合っている。彼氏に恥を書かせることなんて…）

希乃「キスしてください…」

愁の脳が機能停止した。

「「「「「おおー」「」「」

外野が騒ぐ。

愁「まじ…」

微かにうなずき顔を近づける。

愁「っ！」

愁は目をつぶっている希乃に…。

キスをした…。

周りが騒ぐが気にならなかった。

愁も希乃もりんごのように真っ赤である。

愁「これでいいのか？」

聞いてみると

希乃「うん」

返事が返ってきた。

FFF団「異端者に裁きを」

急に扉が開けられ覆面と黒マントの集団が入ってくる。

愁「くそ！最後はやっぱこれか！」

こうして、フルーツバスケットは終了した。

番外 フルーツバスケット 完（後書き）

とうとう完結。

いやー。長かった…。

これで完全に終了とさせていただきます。
今までありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5059k/>

バカとテストと召喚獣は新時代

2011年4月13日12時31分発行